
岡部町

菅原遺跡

県道中瀬普済寺線建設関係埋蔵文化財調査報告

1996

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



I・II区全景



第一号製鉄炉跡

序

埼玉県では、県民の生活圏の拡大や産業活動の円滑化などに役立つようにするため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視しながら、県内1時間道路網構想をめざし、体系的に道路網の整備を行っております。

県道中瀬普済寺線は、深谷市中瀬を起点として、国道17号線の深谷バイパスを横切り、国道17号線にいたる県道であります。

蛭川普済寺線とともに、岡部町から本庄市をとおり、児玉にいたる、地域住民の生活に密着した道路であります。また、関越道の本庄・児玉インターにアクセスできる県道でもあり、今後、一層重要性が高まつてくると考えられる県道であります。

道路建設予定地には遺跡の存在が知られており、これら埋蔵文化財の取り扱いについては、関係各機関が慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、どうしても避けることのできない遺跡については、当事業団が発掘調査を行い、記録保存の措置をとることになりました。

埼玉県の北部に位置する岡部町は、重要文化財の緑釉手付瓶、灰釉瓶を出土した西浦北遺跡や和同開珎を出土した内出遺跡など多くの遺跡が所在しております。さらに近年では郡衙関連施設として著名になった県指定史跡であります中宿古代倉庫群跡など、古くから先

人の足跡が認められ、数多くの文化遺産を残しております。このたび発掘調査を実施した菅原遺跡も著名な岡部六弥太忠澄墓の脇をとおっております。

この菅原遺跡からは、県内では検出例の少ない古代の製鉄・鋳造関連の大量の遺物が発見されました。また、中世の土壙墓群が発見され、この地域が鎌倉時代からの館を中心として室町時代にわたり繁栄した地域の一つであったことも明らかにすことができました。

これらの成果をまとめた本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発及び教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課はじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力をいただいた埼玉県土木部道路建設課、熊谷土木事務所及び岡部町教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 荒 井 桂

例 言

1 本書は下記の遺跡の発掘調査報告書である。

遺跡名：菅原遺跡（SGWR）

所在地：埼玉県岡部町大字普済寺字菅原783

文化庁指示通知

平成3年7月4日付け 委保第5の964号

文化庁指示通知

平成4年6月10日付け 委保第5の643号

教育長通知

平成6年5月31日付け 教文第2の34号

遺跡コード番号：63-001

2 発掘調査は県道飯中瀬普済寺線建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託により、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3 発掘調査は当事業団の今井宏、浅野春樹、鈴木孝之、西井幸雄、大屋道則、上野真由美が担当して、平成3年4月1日から平成6年11月30日まで断続的に実施した。

整理報告書作成作業は大屋道則が担当し、平成7年4月1日から平成8年3月31日まで行った。

4 遺跡の基準点測量と航空写真は朝日航洋株式会社に、製鉄・鋳造関連遺物の科学分析は川鉄テクノリサーチに、人骨の分析は聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎に委託した。

5 写真は発掘調査時の撮影を各発掘担当者が行い、遺物の撮影を新屋雅明、大屋、菊池久が行った。

6 出土品の整理および図版の作成は、新屋、大屋が行った。

本書の執筆は、I-1を埼玉県生涯学習部文化財保護課が、縄文時代の土器を新屋が、石器の一部を上野真由美が、土偶を浜野美代子が、埴輪を大谷徹が、その他を大屋が行った。

7 本書の編集は、資料部資料整理第1課の大屋が行った。

8 本書にかかる資料は平成8年度以降県立埋蔵文化財センターが保管する。

9 本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜った（敬称略）。

大塚達朗、鈴木徳雄、鳥羽政之、早坂広人、平田重之、堀口万吉（敬称略 五十音順）

凡 例

1 X・Y座標による表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。	石 器 実 測 図 1 : 3
2 縮尺は原則として以下のとおりである。	その他の土器実測図 1 : 4
全測図 1 : 300	製鉄・鋳造関連遺物 1 : 2、 1 : 3
遺構名称図 1 : 150	石 器 2 : 3、 1 : 3
住 居 1 : 60	古 錢 1 : 1
土 壤 1 : 60	3 全測図等に示す遺構の略号は以下のとおりである。
井戸跡 1 : 60	土 壤 SK
溝 跡 1 : 100	溝 SD
縄文土器実測図 1 : 4	住 居 SJ
拓影図 1 : 3	井 戸 SE
	ピット P

目 次

口絵	4. 第IV区	127	
序	5. 第V区	193	
例言	6. 第VI区	199	
凡例	7. 第VII区	201	
目次	8. その他の遺物	205	
I. 発掘調査の概要	1		
1. 調査に至るまでの経過	1	(1) その他の縄文土器	205
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(2) 土偶	210
3. 発掘調査・整理・報告書作成の組織	3	(3) 塹輪	211
II. 立地と環境	4	(4) 古銭	213
III. 遺跡の概要	6	(5) 金属製品	220
IV. 遺構と遺物	7	(6) 瓦	221
1. 第I区	7	(7) 製鉄・鋳造関係遺物	222
2. 第II区	9	V. 結語	280
3. 第III区	93	付編	307

表 目 次

第1表 出土古銭一覧(1)	213	第3表 半球状土製品と他の遺物との共伴関係	299
第2表 出土古銭一覧(2)	214		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第36図 第18号住居跡	31
第2図 周辺の遺跡	5	第37図 第18号住居跡出土遺物(1)	32
第3図 遺跡位置図	6	第38図 第18号住居跡出土遺物(2)	32
第4図 第I区全測図	7	第39図 第19号住居跡	32
第5図 第1号住居跡	7	第40図 繩文時代の土壙	33
第6図 第1～3号溝跡	8	第41図 土壙出土遺物	34
第7図 第1～6号土壙	8	第42図 グリッド取り上げ遺物(1)	35
第8図 第II区全測図	9	第43図 グリッド取り上げ遺物(2)	36
第9図 第II区遺構名称図(1)	10	第44図 グリッド取り上げ遺物(3)	37
第10図 第II区遺構名称図(2)	11	第45図 グリッド取り上げ遺物(4)	38
第11図 第1号住居跡	12	第46図 グリッド取り上げ遺物(5)	39
第12図 第1号住居跡出土遺物(1)	13	第47図 グリッド取り上げ遺物(6)	40
第13図 第1号住居跡出土遺物(2)	14	第48図 グリッド取り上げ遺物(7)	41
第14図 第4号住居跡	14	第49図 グリッド取り上げ遺物(8)	43
第15図 第4号住居跡出土遺物	14	第50図 グリッド取り上げ遺物(9)	44
第16図 第6号住居跡	15	第51図 グリッド取り上げ遺物(10)	45
第17図 第6号住居跡出土遺物(1)	15	第52図 グリッド取り上げ遺物(11)	46
第18図 第6号住居跡出土遺物(2)	15	第53図 第1号竪穴状遺構	47
第19図 第10号住居跡	18	第54図 第1号竪穴状遺構出土遺物	47
第20図 第10号住居跡出土遺物	18	第55図 第3号住居跡	48
第21図 第14号住居跡	20	第56図 第3号住居跡出土遺物	48
第22図 第14号住居跡出土遺物(1)	21	第57図 第7号住居跡	48
第23図 第14号住居跡出土遺物(2)	22	第58図 第8号住居跡	49
第24図 第14号住居跡出土遺物(3)	23	第59図 第8号住居跡出土遺物	49
第25図 第14号住居跡出土遺物(4)	24	第60図 第9号住居跡	50
第26図 第14号住居跡出土遺物(5)	25	第61図 第9号住居跡出土遺物	50
第27図 第14号住居跡出土遺物(6)	26	第62図 第12号住居跡	50
第28図 第15号住居跡	27	第63図 第12号住居跡出土遺物	50
第29図 第15号住居跡出土遺物(1)	27	第64図 第1号掘立柱建物跡	51
第30図 第15号住居跡出土遺物(2)	27	第65図 第2号掘立柱建物跡	51
第31図 第16号住居跡	28	第66図 第3号掘立柱建物跡	52
第32図 第16号住居跡出土遺物(1)	29	第67図 第1号火葬墓	53
第33図 第16号住居跡出土遺物(2)	30	第68図 第1号火葬墓出土遺物	53
第34図 第16号住居跡出土遺物(3)	30	第69図 第1号道路状遺構	54
第35図 第17号住居跡	30	第70図 第1号道路状遺構出土遺物	54

第71図	第1～4号井戸跡	55
第72図	第1号井戸跡出土遺物	55
第73図	第5・6号井戸跡	56
第74図	第6号井戸跡出土遺物	56
第75図	第1～4号溝跡	57
第76図	第5号溝跡	58
第77図	第6号溝跡	59
第78図	第2号地下式壙出土遺物	60
第79図	第1・2号地下式壙	61
第80図	第1号製鉄炉跡	62
第81図	土壙(1)	64
第82図	土壙(2)	65
第83図	土壙(3)	66
第84図	土壙(4)	67
第85図	土壙(5)	69
第86図	土壙(6)	70
第87図	土壙(7)	72
第88図	土壙(8)	74
第89図	土壙(9)	75
第90図	土壙(10)	77
第91図	土壙(11)	79
第92図	土壙(12)	81
第93図	土壙(13)	82
第94図	土壙(14)	83
第95図	土壙出土遺物	85
第96図	第31号土壙人骨出土状況	86
第97図	第42号土壙人骨出土状況	86
第98図	第49号土壙人骨出土状況	86
第99図	第70・93号土壙人骨出土状況	87
第100図	第72号土壙人骨出土状況	87
第101図	第74号土壙人骨出土状況	87
第102図	第79号土壙人骨出土状況	88
第103図	第104・105号土壙人骨出土状況	88
第104図	グリッド取り上げ遺物(1)	90
第105図	グリッド取り上げ遺物(2)	91
第106図	グリッド取り上げ遺物(3)	92
第107図	第III区全測図	93
第108図	第III区遺構名称図	94
第109図	第1号住居跡	95
第110図	グリッド取り上げ遺物(1)	96
第111図	グリッド取り上げ遺物(2)	97
第112図	グリッド取り上げ遺物(3)	98
第113図	第1号竪穴状遺構	99
第114図	第1号竪穴状遺構出土遺物	100
第115図	第1号井戸跡出土遺物	100
第116図	第1・2号井戸跡	101
第117図	第2号井戸跡出土遺物(1)	102
第118図	第2号井戸跡出土遺物(2)	102
第119図	第2号井戸跡出土遺物(3)	104
第120図	第1・2号溝跡	105
第121図	第2号溝跡出土遺物	105
第122図	土壙(1)	106
第123図	土壙(2)	107
第124図	土壙(3)	108
第125図	土壙(4)	109
第126図	土壙(5)	112
第127図	土壙(6)	114
第128図	土壙(7)	116
第129図	土壙(8)	117
第130図	土壙(9)	118
第131図	土壙(10)	120
第132図	土壙(11)	122
第133図	土壙(12)	123
第134図	土壙出土遺物(1)	125
第135図	土壙出土遺物(2)	126
第136図	第IV区全測図	127
第137図	第IV区遺構名称図	128
第138図	第1号住居跡	129
第139図	第1号住居跡出土遺物(1)	130
第140図	第1号住居跡出土遺物(2)	131
第141図	第1号住居跡出土遺物(3)	132
第142図	第2号住居跡	133
第143図	第2号住居跡出土遺物(1)	134
第144図	第2号住居跡出土遺物(2)	135

第145図 第2号住居跡出土遺物(3)	136
第146図 第3号住居跡	136
第147図 土壙(1)	138
第148図 土壙(2)	140
第149図 土壙出土遺物(1)	142
第150図 土壙出土遺物(2)	143
第151図 土壙出土遺物(3)	144
第152図 土壙出土遺物(4)	145
第153図 土壙出土遺物(5)	147
第154図 グリッド取り上げ遺物(1)	148
第155図 グリッド取り上げ遺物(2)	149
第156図 グリッド取り上げ遺物(3)	151
第157図 グリッド取り上げ遺物(4)	152
第158図 グリッド取り上げ遺物(5)	153
第159図 グリッド取り上げ遺物(6)	154
第160図 第1号井戸跡	155
第161図 第1号井戸跡出土遺物(1)	156
第162図 第1号井戸跡出土遺物(2)	157
第163図 第1号井戸跡出土遺物(3)	158
第164図 第1号地下式壙	159
第165図 土壙(1)	161
第166図 土壙(2)	163
第167図 土壙(3)	164
第168図 土壙(4)	165
第169図 土壙(5)	166
第170図 土壙(6)	167
第171図 土壙(7)	169
第172図 土壙(8)	172
第173図 土壙(9)	174
第174図 土壙(10)	175
第175図 土壙(11)	177
第176図 土壙(12)	178
第177図 土壙(13)	180
第178図 土壙(14)	182
第179図 土壙(15)	184
第180図 土壙(16)	185
第181図 土壙(17)	186
第182図 土壙出土遺物(1)	187
第183図 土壙出土遺物(2)	188
第184図 土壙出土遺物(3)	189
第185図 グリッド取り上げ遺物(1)	190
第186図 グリッド取り上げ遺物(2)	191
第187図 グリッド取り上げ遺物(3)	192
第188図 第V区全測図	193
第189図 第1～5号溝	194
第190図 土壙(1)	196
第191図 土壙(2)	197
第192図 土壙出土遺物	197
第193図 グリッド取り上げ遺物(1)	197
第194図 グリッド取り上げ遺物(2)	198
第195図 グリッド取り上げ遺物(3)	198
第196図 第VI区全測図	199
第197図 第1～4号溝	200
第198図 第1～5号土壙	200
第199図 第VII区全測図	201
第200図 第1～6号溝	202
第201図 第1号井戸跡	202
第202図 土壙	203
第203図 グリッド取り上げ遺物	204
第204図 繩文前期の土器(1)	206
第205図 繩文前期の土器(2)	207
第206図 繩文前期の土器(3)	208
第207図 繩文後晩期の土器	209
第208図 土偶	210
第209図 増輪	212
第210図 古銭(1)	215
第211図 古銭(2)	216
第212図 古銭(3)	217
第213図 古銭(4)	218
第214図 古銭(5)	219
第215図 金属製品	220
第216図 瓦	221
第217図 獣脚正面鋲型(1)	223
第218図 獣脚正面鋲型(2)	224

第219図 獣脚正面鋳型(3).....	225	第256図 トリベ(2)	270
第220図 獣脚正面鋳型(4).....	226	第257図 羽口(1)	272
第221図 獣脚正面鋳型(5).....	227	第258図 羽口(2)	273
第222図 獣脚正面鋳型(6).....	228	第259図 調査区の配置図.....	274
第223図 獣脚正面鋳型(7).....	229	第260図 羽口の分布図	274
第224図 獣脚正面鋳型(8).....	230	第261図 半球状土製品の分布図	275
第225図 獣脚正面鋳型(9).....	231	第262図 トリベの分布図.....	275
第226図 獣脚正面鋳型(10)	232	第263図 獣脚正面鋳型の分布図	276
第227図 獣脚正面鋳型(11)	233	第264図 獣脚背面鋳型の分布図	276
第228図 獣脚正面鋳型(12)	234	第265図 容器外型の分布図	277
第229図 獣脚正面鋳型(13)	235	第266図 容器中子の分布図	277
第230図 獣脚正面鋳型(14)	236	第267図 角柱外型の分布図	278
第231図 獣脚背面鋳型(1)	238	第268図 角柱中子の分布図	278
第232図 獣脚背面鋳型(2)	239	第269図 谷部鉄滓包含層の土層図	279
第233図 獣脚背面鋳型(3)	240	第270図 獣脚正面鋳型の分布	285
第234図 獣脚背面鋳型(4)	241	第271図 獣脚背面鋳型の分布	285
第235図 獣脚背面鋳型(5)	242	第272図 獣脚正面鋳型の質量分布	286
第236図 角柱外形(1)	246	第273図 獣脚正面鋳型の層位別質量分布	286
第237図 角柱外形(2)	247	第274図 獣脚背面鋳型の質量分布	286
第238図 角柱外形(3)	248	第275図 獣脚背面鋳型の層位別質量分布	286
第239図 角柱外形(4)	249	第276図 角柱外型鋳型の分布	287
第240図 角柱外形(5)	250	第277図 角柱中子鋳型の分布	287
第241図 角柱中子(1)	252	第278図 角柱外型鋳型の質量分布	288
第242図 角柱中子(2)	253	第279図 角柱外型鋳型の層位別質量分布	288
第243図 角柱中子(3)	254	第280図 角柱中子鋳型の質量分布	288
第244図 角柱中子(4)	255	第281図 角柱中子鋳型の層位別質量分布	288
第245図 角柱中子(5)	256	第282図 容器外型鋳型の分布	289
第246図 容器外形(1)	258	第283図 容器中子鋳型の分布	289
第247図 容器外形(2)	259	第284図 容器外型鋳型の質量分布	290
第248図 容器中子	260	第285図 容器外型鋳型の層位別質量分布	290
第249図 不明鋳型	261	第286図 容器中子鋳型の質量分布	290
第250図 半球状土製品(1)	263	第287図 容器中子鋳型の層位別質量分布	290
第251図 半球状土製品(2)	264	第288図 羽口の分布	291
第252図 半球状土製品(3)	265	第289図 羽口の質量分布	291
第253図 半球状土製品(4)	266	第290図 羽口の層位別質量分布	291
第254図 半球状土製品(5)	267	第291図 トリベの分布	292
第255図 トリベ(1)	269	第292図 トリベの質量分布	293

第293図	トリベの層位別質量分布	293
第294図	谷部出土トリベの質量分布	293
第295図	谷部出土トリベの層位別質量分布	293
第296図	第5号溝出土トリベの質量分布	293
第297図	第5号溝出土トリベの層位別質量分布	293
第298図	半球状土製品の質量分布	294
第299図	半球状土製品の層位別質量分布	294
第300図	半球状土製品の分布	294
第301図	容器中子との共伴関係からみた外型鋳型	295
第302図	容器外型との共伴関係からみた中子鋳型	295
第303図	獸脚背面との共伴関係からみた正面鋳型	296
第304図	獸脚正面との共伴関係からみた背面鋳型	296
第305図	角柱中子との共伴関係からみた外型鋳型	297
第306図	角柱外型との共伴関係からみた中子鋳型	297
第307図	角柱中子との共伴関係からみた外型鋳型 (除く出土層位不明)	297
第308図	角柱外型との共伴関係からみた中子鋳型 (除く出土層位不明)	297
第309図	半球状土製品との共伴関係からみたトリベ	298
第310図	トリベとの共伴関係からみた半球状土製品	298
第311図	半球状土製品との共伴関係からみた羽口	300
第312図	羽口との共伴関係からみた半球状土製品	300
第313図	半球状土製品との共伴関係からみた獸脚正面鋳型	300
第314図	獸脚正面との共伴関係からみた半球状土製品	300
第315図	半球状土製品との共伴関係からみた獸脚背面鋳型	301
第316図	獸脚背面鋳型との共伴関係からみた半球状土製品	301
第317図	半球状土製品との共伴関係からみた容器外型鋳型	301
第318図	容器外型との共伴関係からみた半球状土製品	301
第319図	半球状土製品との共伴関係からみた容器中子鋳型	301
第320図	容器中子鋳型との共伴関係からみた半球状土製品	301
第321図	半球状土製品との共伴関係からみた角柱外型鋳型	301
第322図	角柱外型鋳型との共伴関係からみた半球状土製品	301
第323図	半球状土製品との共伴関係からみた角柱中子鋳型	302
第324図	角柱中子鋳型との共伴関係からみた半球状土製品	302
第325図	半球状土製品との共伴関係による羽口の質量分布	304
第326図	半球状土製品との共伴関係によるトリベの質量分布	304
第327図	半球状土製品との共伴関係による 獸脚正面鋳型の質量分布	304
第328図	半球状土製品との共伴関係による 獸脚背面鋳型の質量分布	304
第329図	半球状土製品との共伴関係による 容器外型鋳型の質量分布	304
第330図	半球状土製品との共伴関係による 容器中子鋳型の質量分布	304
第331図	半球状土製品との共伴関係による 角柱外型鋳型の質量分布	304
第332図	半球状土製品との共伴関係による 角柱中子鋳型の質量分布	304

写 真 目 次

図版1	I区全景、II区第1、8、10、13号住居跡	
図版2	II区第14、15、16、18号住居跡、第6号溝、 第1号竪穴状遺構、第12号住居跡、掘立柱建 物跡	
図版3	II区道路状遺構、第4、5、6号溝、第1、 2号井戸、第1号火葬墓、第1号地下式壙	
図版4	II区第12、13、16、17、20、33、34、35、36 号土壤	
図版5	II区第41、52、53、62、63、64、65、84、 92、96、100号土壤	
図版6	II区第106、107、111、114、206、211、 213、216号土壤	
図版7	II区第31、42、49、70号土壤	
図版8	II区第72、74、79、70、93、104、105号土壤	
図版9	II区鉄滓包含層、製鉄炉跡	
図版10	II区鉄滓包含層、製鉄炉跡	
図版11	III区全景、第1、3号住居跡、第78号土壤、 第1号井戸跡	
図版12	III区第2号井戸、第1号竪穴状遺構、第2号 溝、第1、4、9号土壤	

- 図版13 III区第11、13、15、16、17、18、20、21、22号土壙
- 図版14 III区第29、31、30、34、36、37、38、40、41、45、50、71、72、109号土壙
- 図版15 IV区全景、第1号住居跡、第33、36、54号土壙
- 図版16 IV区第2号井戸跡、第62、130、72、96、79、81、88、104、105、121号土壙
- 図版17 V区全景、第1、2、3、5号溝、第1、4、8、14号土壙
- 図版18 V区第15、16、18、24号土壙、VI区全景、VII区全景
- 図版19 VII区第1号井戸、第1、2、3、4、5、6、8、9号土壙
- 図版20 II区第1、6、14号住居跡出土縄文土器
- 図版21 II区第1、6号住居跡出土縄文土器
- 図版22 II区第10、14号住居跡出土縄文土器
- 図版23 II区第14号住居跡出土縄文土器
- 図版24 II区第14、15、16号住居跡出土縄文土器
- 図版25 II区第15、16号住居跡出土縄文土器
- 図版26 II区第18号住居跡、土壙出土縄文土器
- 図版27 II区グリッド取り上げ土器
- 図版28 II区グリッド取り上げ土器
- 図版29 II区グリッド取り上げ土器
- 図版30 IV区第1号住居跡出土土器
- 図版31 IV区第2号住居跡出土土器
- 図版32 IV区土壙出土土器
- 図版33 IV区土壙出土土器
- 図版34 IV区グリッド取り上げ土器
- 図版35 グリッド取り上げ土器
- 図版36 グリッド取り上げ土器
- 図版37 II区グリッド取り上げ石器
- 図版38 III・IV区グリッド取り上げ石器
- 図版39 IV区グリッド取り上げ土偶、菅原遺跡出土瓦
- 図版40 II区第9号住居跡、第18、21、86、89号土壙出土かわらけ
- 図版41 II区第89、95、122号土壙、III区第2、109号土壙、グリッド取り上げかわらけ
- 図版42 IV区第76、228号土壙、第2号井戸跡、グリッド、V区第11号土壙出土かわらけ
- 図版43 II区グリッド取り上げ羽釜、常滑壺、III区第1号井戸出土内耳鍋、II区第95号土壙出土石製品、IV区グリッド取り上げ石製品、III区第2号井戸出土石製品
- 図版44 II区第2号地下式壙、III区第2号井戸、III区グリッド、IV区グリッド取り上げ板碑
- 図版45 III区第16号土壙、第2号井戸、IV区第187号土壙出土板碑
- 図版46 IV区第1号井戸出土板碑
- 図版47 包含層出土獸脚正面鋳型(1)
- 図版48 包含層出土獸脚正面鋳型(2)
- 図版49 包含層出土獸脚背面鋳型(1)
- 図版50 包含層出土獸脚背面鋳型(2)
- 図版51 包含層出土角柱外形(1)
- 図版52 包含層出土角柱外形(2)
- 図版53 包含層出土角柱中子(1)
- 図版54 包含層出土角柱中子(2)
- 図版55 包含層出土容器外形(1)
- 図版56 包含層出土容器外形(2)
- 図版57 包含層出土容器中子(1)
- 図版58 包含層出土容器中子(2)
- 図版59 包含層出土トリベ(1)
- 図版60 包含層出土トリベ(2)
- 図版61 包含層出土羽口
- 図版62 包含層出土半球状土製品(1)
- 図版63 包含層出土半球状土製品(2)
- 図版64 古銭(1)
- 図版65 古銭(2)
- 図版66 古銭(3)
- 図版67 古銭(4)
- 図版68 付編分析資料(1)
- 図版69 付編分析資料(2)
- 図版70 付編分析資料(3)
- 図版71 付編分析資料(4)

Ⅰ 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、そして「埼玉の新しい92（くに）づくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため様々な施策を講じている。

県民の生活環境の保全と道路交通の安全性を重視し生活圏の拡大への対応、高度化する産業活動の円滑化などを図るための道路網の整備はその一環として展開されている。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした開発事業と文化財の保護について迅速に対応するため、関係各部局、機関と定期的な調整会議のほか、日頃協議を重ね調整を図ってきたところである。

平成2年度に国土木部道路建設課から岡部町菅原地内に計画された県道中瀬・普済寺線建設工事予定地における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて照会があった。

工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「菅原遺跡」(遺跡No.63-001)内にあり、同年町教育委員会が実施した隣接する地区の町道改良工事に伴う発掘調査で、縄文時代及び中世の遺構などが検出され、照会があつた工事予定地にも遺構が所在することが明らかであると考えられたため、下記の旨回答した。

- 1 工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「菅原遺跡」が所在する。
 - 2 工事計画上、やむを得ず現状を変更する場合は文化財保護法の規定による手続きをとり、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。
- その後の協議では、工事計画の変更が不可能である

と判断されたため、平成3年度に発掘調査を実施することになった。

発掘調査の時期については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、道路建設課、文化財保護課の三者で調整し、平成3年4月から6箇月の予定で着手することとし、道路建設課において調査に要する経費が予算措置された。

平成3年度の発掘調査は用地買収が終了した遺跡北側を対象とし、南側は用地買収をまって平成4、6年度に継続して調査を実施した。

文化財保護法第57条3項の規定による埋蔵文化財発掘通知が平成3年5月8日付け道建第65号で埼玉県知事から提出され、平成3年5月18日付け教文第3-12号で発掘調査実施についての通知を行った。

文化財保護法第57条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から平成3年3月30日付け財埋文第970号で提出された。届出に対し文化庁長官から平成3年7月4日付け委保第5の964号で指示通知があった。

平成4、5年度の発掘調査届及び文化庁長官、県教育委員会教育長からの通知は下記のとおりである。

- 平成4年3月31日付け財埋文第941号
平成4年6月10日付け委保第5の643号
平成6年5月16日付け財埋文第149号
平成6年5月31日付け教文第2-34号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

平成3年度(平成3年4月1日～4年1月31日)

平成3年度は、第I区、II区を調査した。

4月には準備を行い、5月から現場事務所を開設し、重機による表土剥ぎなどを行った。

当初、縄文中期と古墳時代から奈良・平安時代の集落の検出を予想していたが、表土剥ぎの結果、縄文時代以外にも、中世の墓壙群を含む遺跡であることがわかった。さらに、谷部に堆積していた土砂の中から鉄滓が検出されるに至って、古代の製鉄関連遺跡である事もわかった。

6月には、墓壙群の調査の進展にともない、いくつかの墓壙の中から、人骨が比較的良好な状態で検出された。これらの人骨に関しては精査を行い、聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎氏に分析を委託した。

他の墓壙群については、切り合い関係を見極めながら調査を行った。

8月には、谷部の鉄滓の包含層の確認調査が進展し、これによって、谷部には膨大な量の鉄滓が埋没しており、その中には鋳型や羽口などの製鉄・鋳造関連遺物も多量に含まれている事がわかった。

そして検討の結果、鉄滓の包含層が認められる谷部に1m小グリッドを設定し、このグリッド単位で層序を記載し、鉄滓などの遺物を取り上げる事とした。

11月には、古代から中世にかけての遺構の調査が終了し、これにともなって、縄文中期の住居跡の調査を行い、1月に終了した。

平成4年度(平成4年4月1日～5年1月31日)

平成4年度は、4月に準備を行い、5月から現場事務所を開設し重機による表土剥ぎなどを行った。

当初の予定どおり、縄文中期の集落と、中世の墓壙群が検出された。当初は、本年度内に県道予定地内の残りの全ての地点(III～VII区)の調査を行うはずであったが、買収などの事情により、第IV・VI区の2地点の調査を先行して行う事となった。

6月からIV区の中世墓壙群の調査を行い、多数の墓壙を確認したが、II区で認められたような人骨の出土

はなかった。

10月には縄文時代の遺構の調査を開始した。調査は順調に進展し、11月に終了した。

12月からは、VI区の確認を行った。VI区は中近世の大溝を中心とした遺跡であり、IV区のような中世墓壙群とは性格を異にしていた。VI区の北端では、やや規模の大きい溝状の遺構が確認され、周辺の状況から館跡の堀の可能性が指摘された。

これについて検討の結果、大溝のなかでVI区の調査区内にかかっているのは南側半分であり、北側半分は未買収地に続いているため、半分を残して大溝を調査する事には危険が伴うため、次回のV区の調査時に、北側半分の買収を待って、調査を行う事になった。

溝や土壙、ピット等の調査は順調に進み、1月に終了した。

平成6年度(平成6年6月1日～11月30日)

平成6年度は、III区、V区、VII区を対象とした。

6月に準備を行い、7月から現場事務所を開設し、重機による表土剥ぎなどを行った。

7月からIII区の調査を開始した。住居跡や土壙、地下式壙が検出できた。調査は順調に進展し、9月に終了した。

続いて10月からはV区の調査を開始した。土壙や溝や堀が検出できた。調査は順調に進展し、10月に終了した。

続いて11月からはVII区の調査を開始した。溝や井戸が検出できた。調査は順調に進展し、11月に終了した。

平成7年度(平成7年4月1日～8年3月31日)

平成7年度は、全体の整理作業を行った。

4～7月には接合・図面整理を行い、7～9月に実測と第二原図作成の作成を行い、10～11月に復元・トレースを行った。

11月には原稿の執筆を開始し、12月から写真の撮影を開始し、1月に入札を行い、2月に校正を行い、3月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書作成の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査(平成3年度)

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼 管理部長	倉持悦夫
理事兼 調査部長	栗原文藏
管理部	
庶務課長	高田弘義
主査	松本 晋
主事	長滝美智子
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
主事	菊池 久
調査部	
調査部副部長	梅沢太久夫
調査第三課長	宮崎朝雄
主任調査員	今井 宏
主任調査員	鈴木孝之
調査員	大屋道則

(2) 発掘調査(平成4年度)

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼 管理部長	倉持悦夫
理事兼調査部長	栗原文藏
管理部	
庶務課長	萩原和夫
主査	賀田 清
主事	菊池 久
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
調査部	
調査部副部長	梅沢太久夫
調査第三課長	鈴木敏昭
主任調査員	西井幸雄
調査員	大屋道則

(3) 発掘調査(平成6年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	富田真也
専務理事	柄原嗣雄
常務理事兼 管理部長	
管理部長	加藤敏昭
理事兼調査部長	小川良祐
管理部	
庶務課長	及川孝之
主査	市川有三
主事	長滝美智子
主事	菊池 久
専門調査員兼 経理課長	
主任	関野栄一
主事	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
調査部	
調査部副部長	高橋一夫
調査第一課長	大和 修
主任調査員	浅野晴樹
調査員	上野真由美

(4) 整理事業(平成7年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	富田真也
専務理事	吉川國男
常務理事兼 管理部長	
管理部長	新井秀直
理事兼調査部長	小川良祐
管理部	
主務課長	及川孝之
主査	市川有三
主任	長滝美智子
主事	菊池 久
専門調査員兼 経理課長	
主任	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
資料部	
資料部長	塩野 博
主幹兼 資料部副部長兼 資料整理第一課長	
調査員	谷井 彪
調査員	大屋道則

II 立地と環境

菅原遺跡は岡部町の北東部、JR岡部駅の北東約2kmに位置している。

岡部町は、地形的に大きく4つに大別して考える事が出来る(鳥羽1987他)。

第1にあげられるのは、美里町から岡部町にかけてつながる、志戸川、小山川によって開析された沖積地である。

第2は、荒川による古い扇状地が、中小河川によって侵食された、櫛挽台地である。

第3は、利根川によって作られた大規模な沖積低地で、町の北側に所在している。前述した櫛挽台地とは、その大部分が崖線で接している。

第4は、洪積地形が侵食されて残丘となって残った、山崎山丘陵である。

今回報告する菅原遺跡は、前述した櫛引台地末端の、妻沼低地を見おろす場所に位置している。

岡部町には多くの遺跡が確認されている(鳥羽1987他)。

縄文時代前期では、西浦北遺跡で関山期の住居跡が検出されている他、東光寺裏遺跡、茶臼山遺跡などて諸磯期のまとまった資料が検出されている。

縄文時代中期では、水窪遺跡などで多くの住居跡が検出されている。

縄文時代後晩期については、原ヶ谷戸遺跡等の台地末端周辺部から資料が検出されている。

奈良・平安時代については、岡部町内にはおびただしい数の遺跡が認められる。

和同開珎を出土した内出遺跡、重要文化財の綠釉手付瓶、灰釉瓶を出土した西浦北遺跡、熊野遺跡、六反田遺跡をはじめとして、近年では県指定の中宿古代倉庫群など、地域の中心として位置づけられるような遺跡が調査中のものも含めて、多数見つかっている。

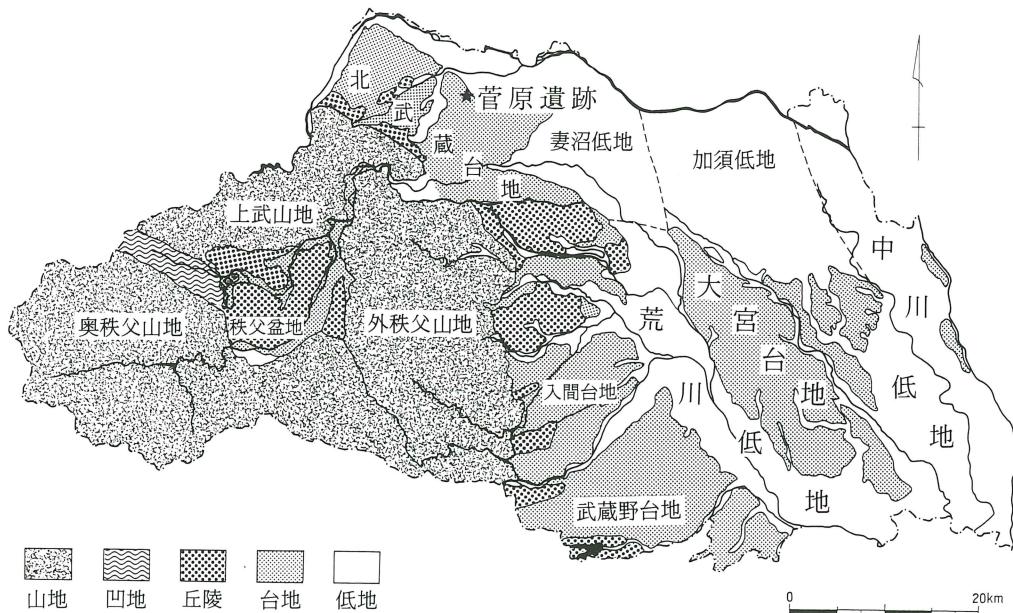
西浦北遺跡では、製鉄跡が検出されており、菅原遺跡との関係が注目される。

中世では、西龍ヶ谷遺跡、熊野遺跡などから館跡や火葬墓などが検出されている。

このような遺跡群の中に位置する菅原遺跡の調査については、多くの興味深い問題をあげることができる。

埼玉県北部の縄文時代中期遺跡では、今回の調査によって明らかになった台地上のやや規模の大きな集落跡である菅原遺跡と同様に、沖積台地上の大規模な集

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡



1 菅原遺跡 2 稲荷塚古墳 3 蛇喰古墳 8 白山遺跡 9 上宿遺跡 11 四十坂遺跡
12 寅稻荷山古墳 13 四十坂南遺跡 14 浅間神社古墳 17 熊野遺跡 18 お手長山古墳
21 下道南遺跡 40 水滝遺跡 94 岡の五輪塔 97 岡部六弥太墓 100 榛沢六郎成清供養塔
101 四十塚古墳群・岡部城跡 114 中南遺跡 121 黒田豊前守陣屋跡
122 岡部条理遺跡 123 砂田前遺跡 124 滝下遺跡 127 岡遺跡 129 岡部六弥太館跡
落跡として古井戸・将監塚遺跡をあげることができる。

これらの遺跡に対して、南西側に位置する丘陵上の遺跡との、立地の違いによる遺跡内容の差異が注目される。特にその立地環境の違いが、生業などの成立基盤そのものに直接的に関わっていることから、今後の遺跡内容の検討は興味深い。

縄文時代後晩期については、当該地域での該当資料は少ないが、中小河川流域での活動の展開や、低地への進出など、今後検討すべき課題が多い。

7世紀後半から8世紀以降の時期については、菅原遺跡の北西部の台地上に、内出遺跡、熊野遺跡、中宿遺跡等の郡衙関連の遺跡群が展開しており、さらに目前の妻沼低地には条里が認められることから、このような律令期の、地域の拠点としての当該地域の位置と、これに基づいて律令期からしばらく続いたであろう、有形・無形の様々な規制・統制、さらにこれらの枠組

みの弛緩によって生じる、土地に対する占有・私有化の進行や、郡衙関連の勢力のその後の動向などを考える際に、菅原遺跡の調査から予想される、10世紀代の大規模な製鉄・鋳造事業とこれを操業した集団、さらにはこれを招致した在地の勢力などを検討する事が必要となる。

このような問題は、ひいてはII区SD-6、V区SD-5などから予想される中世の館や、これと関連すると考えられる岡部氏の成立の問題などにもつながってくると思われ、また、館の廃絶と館跡の荒廃、そして墓地化など、近代以前の土地に対する意識の累積とその漸次的な変遷など、検討すべき課題が多い。

中世以降については、菅原遺跡周辺では、現国道17号付近を通っていたと考えられる中山道があり、VII区で検出された地割りは、この街道との関係で捉えられるものであろう。

III 遺跡の概要

菅原遺跡は、縄文時代から中世にいたる幅広い時期の遺構が重複した複合遺跡であり、以下にその概要を述べる。

縄文時代前期については、検出できた明瞭な遺構は土壙1基であり、諸磯C式土器が出土した。他に中世とした土壙の中にも、縄文時代前期の土壙が含まれている可能性がある。

縄文時代中期については、住居跡が15軒、土壙が30基検出できた。住居跡は、I区からIV区にかけて広い範囲から検出され、中央のIII区でやや散漫となっていたので、全体としては環状を呈している可能性がある。

縄文時代後晩期については、土器・石器・土製品が多少出土した程度で、明瞭な遺構は検出できなかった。この時期の遺構については、櫛引台地の上よりも、むしろ妻沼低地の台地寄りに、分布している可能性が高い。

古代の遺構は、住居跡が6軒、製鉄炉跡が1基検出できた。遺構以外には、II区の谷部から膨大な量の鉄滓が検出された。この鉄滓の包含層の中には、鋳型や羽口等の製鉄・鑄造関連遺物が多量に含まれていた。住居跡は製鉄作業との関連が考えられたが、遺物からの傍証はできなかった。製鉄作業自体の中心的な遺構は、今回の調査区にはかかっておらず、東西のいずれかに所在すると考えられる。

中世の遺構は、土壙が458基、火葬墓が1基、井戸が10基、溝が26条検出できた。この中でII区の6号溝やV区の5号溝などは、館の堀の可能性が高い。

また、III区の表土やIV区の井戸からは瓦も検出されており、館や岡部六弥太墓との関連が注目される。

検出された大量の土壙は、そのほとんどが墓壙であり、館の廃絶後に、その敷地内が墓地となった事が想定される。これらの土壙の中には、人骨の良好に遺存しているものが10基認められた。

中世以降では、VII区の溝が、中山道との関連で捉えられる区画と考えられる。

第3図 遺跡位置図



IV 遺構と遺物

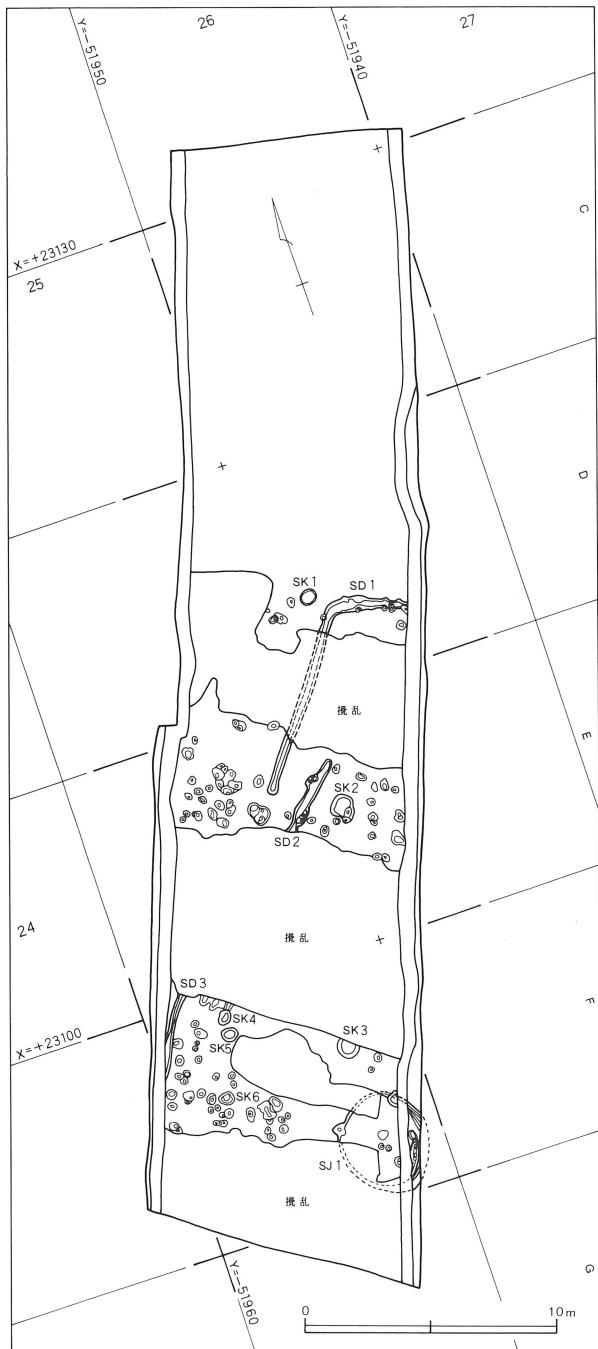
第Ⅰ区の概要

第Ⅰ区は、平成3年度に調査を行った。

I区は、調査区の最北端で、台地が低地に落ち込む落ち際に位置していた。

調査区の北半分は、表土の流出が進行しており、更に湧水や攪乱によって遺構は不明瞭であった。

第4図 第Ⅰ区全測図



検出した遺構と遺物

検出した遺構は、住居跡1軒、溝3条、土壙6基であった。

縄文時代の遺構と遺物

住居跡

縄文時代の住居跡は、1軒検出できた。

第1号住居跡(第5図)

第1号住居跡はF-25グリッドから検出した。東側1/3は調査区外にかかり、一部分は排水溝によって攪乱され、北側と東側が攪乱を受けていた。

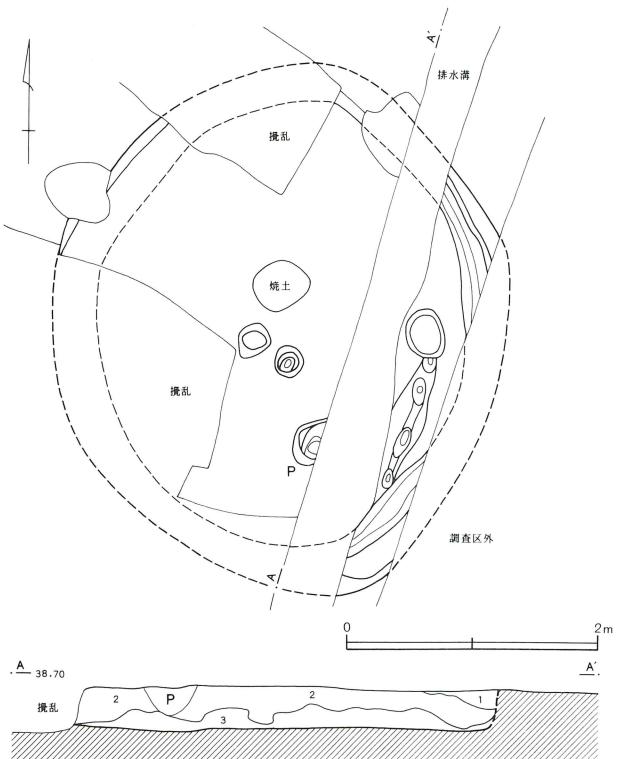
遺構の残存状態は、東側では比較的良好であったが、西側では、表土の流出によって形態が不明瞭であった。

深さは30cm程度で、東側の残存部分からは、周溝を検出した。周溝は壁から10~30cm程度離れて作られていた。住居跡の中央付近には焼土があり、炉址の痕跡と考えられた。遺物は検出できなかった。

土壙(第7図)

縄文時代の土壙は、1基検出できた。

第5図 第1号住居跡



第1号土壌

第1号土壌は、D-26グリッドから検出した。円形で、集石を伴っていた。遺物は検出できなかった。

中世から近世・近代の遺構と遺物

明確な出土遺物は伴わないものの、溝と土壌の大部 分は、中世に該当すると考えられる。

溝(第6図)

溝は、3本検出できた。

第1号溝

第1号溝は、E-25グリッドからはじまり、D-26グリッド付近で攪乱をうけ、同グリッドで東に曲がり、調査区外に至っていた。断面形態は、緩やかなU字状を呈しており、深さは、30cm程度であった。

第2号溝

第2号溝は、E-26グリッドからはじまり、E-25グリッドで攪乱によって消滅していた。断面形態はU字状で、深さはごく浅く、10~20cm程度であった。

第3号溝

第3号溝は、F-25グリッドから検出した。E-25グリッドでは攪乱によって消滅し、F-24グリッドで調査区外に至っていた。断面形態は、U字状で、深さは10cm程度であった。

土壌(第7図)

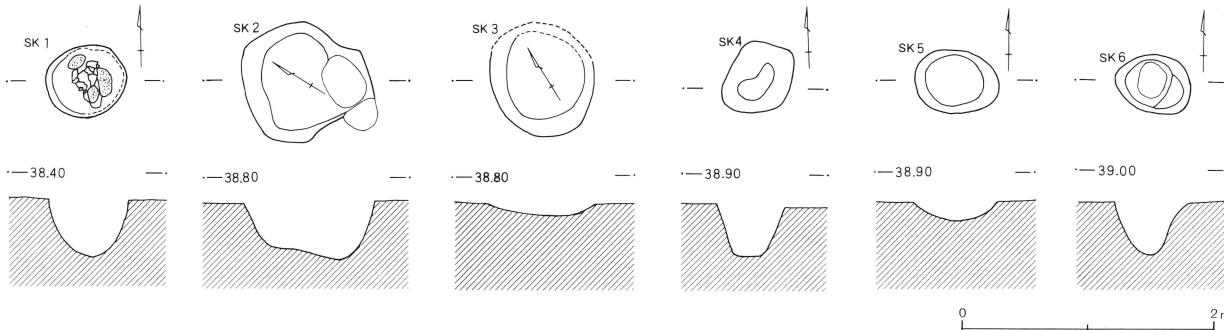
中世から近世に該当すると考えられる土壌は、5基検出できた。

第2号土壌

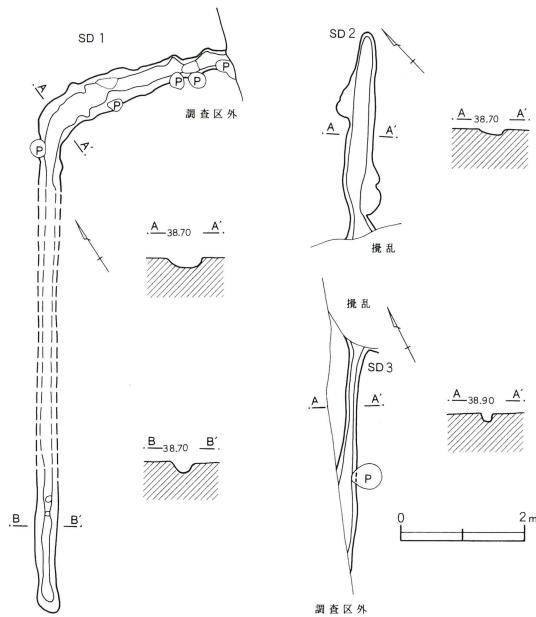
第2号土壌は、E-26グリッドから検出した。形態は、隅丸方形であった。

第3号土壌

第7図 第1~6号土壌



第6図 第1~3号溝跡



第3号土壌は、F-25グリッドから検出した。形態は、円形であった。

土壌の北東側1/3は、攪乱を受けていた。

第4号土壌

第4号土壌は、F-25グリッドから検出した。形態は、方形であった。

第5号土壌

第5号土壌は、F-25グリッドから検出した。形態は、円形であった。

第6号土壌

第6号土壌は、F-25グリッドから検出した。形態は、楕円形であった。

各土壌からは、遺物は検出できなかった。

グリッド取り上げの遺構と遺物

鋳型が小数検出されたが、後節に一括して記載した。

第II区の概要

第II区は、平成4年度に調査を行った。

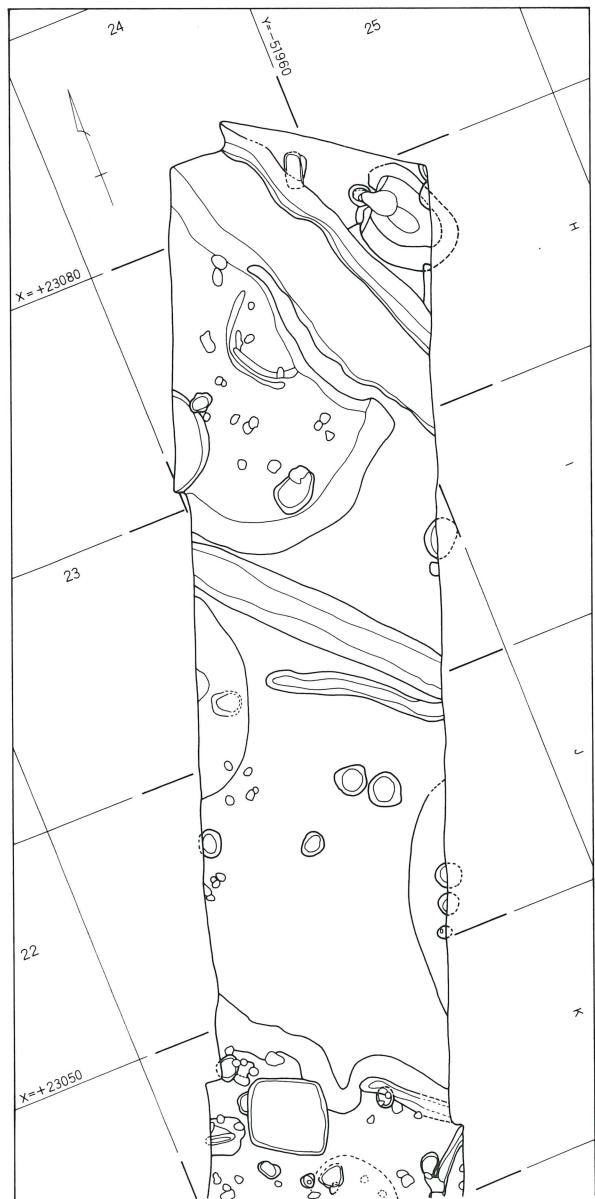
II区は、I区と農業用通路一本で隔てられた南側に位置していた。

I区と異なり、緩やかな北向きの斜面であり、攪乱をあまり受けておらず遺構の遺存状況は良好であった。

検出した遺構と遺物

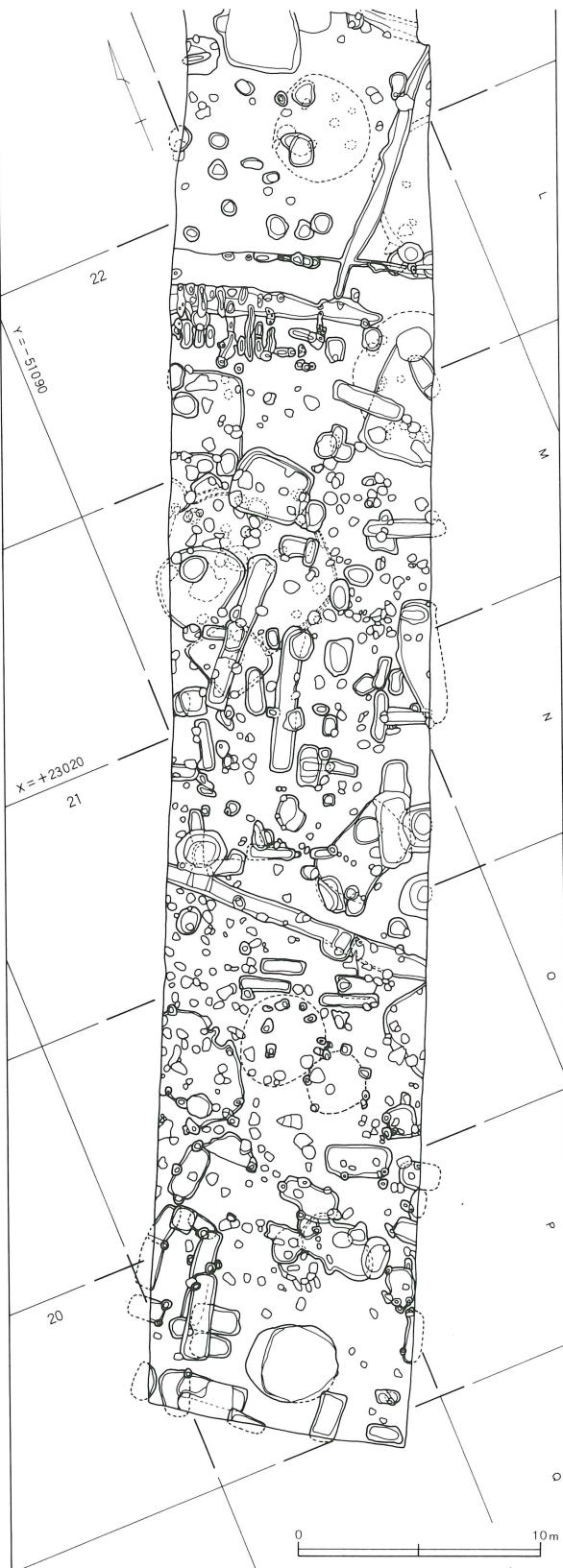
検出した遺構は、溝跡5条、土壙135基、製鉄炉跡1基、縄文時代の住居跡10軒、古代以降の住居跡6軒、地下式壙2基、井戸跡6基、火葬墓跡1基、道路状遺構1条、ピット約300本であった。

第8図 第II区全測図



縄文時代中期の住居跡は、調査区全体に分布しており、特定の集中は認められなかった。

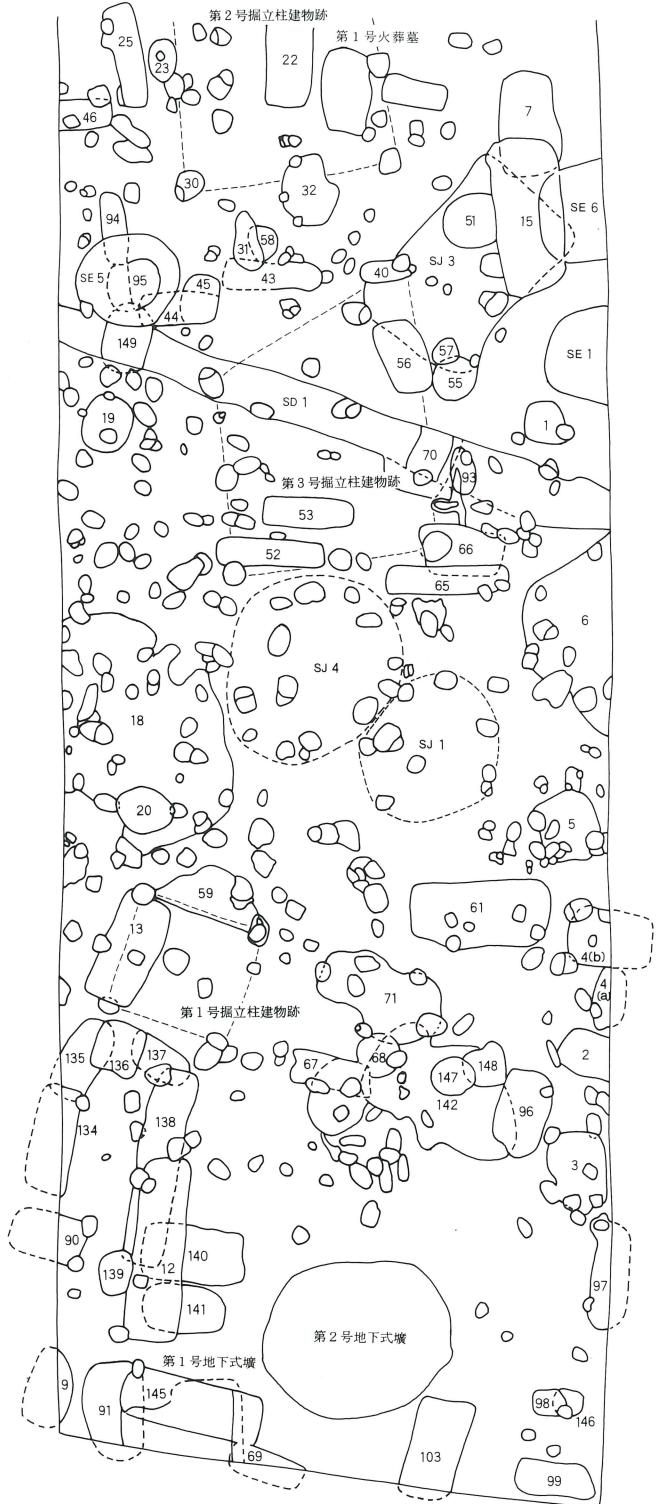
調査区内には中世の土壙が多数あり、これらによる



第9図 第II区遺構名称図(1)



第10図 第II区遺構名称図(2)



地山の搅乱が著しいために、縄文時代の住居跡の確認は非常に困難であった。

また、縄文時代の住居跡覆土はローム質であり、地山のローム層と近似していた。

古代以降の住居跡も縄文時代の住居跡同様に調査区

全体に分布していた。

土壌については、SK-20, 91が覆土の状況や出土遺物から、縄文時代のものであると考えられたが、他の中世とした土壌の中にも、縄文時代の土壌がいくらか混入していると考えられる。

中世の土壌は、多数検出できたが、調査区の中央付近が最も分布密度が高く、調査区北側では、分布密度が低くなっていた。

調査区の南側でも分布密度は低くなっていたが、注目される事として調査区南端に地下式壙があり、この地下式壙付近での、土壌分布密度の低下があげられる。

第1号地下式壙は土壌と切りあっていたが、第2号地下式壙は、その周辺部分だけ土壌が存在していなかった。土壌と地下式壙の使用年代が近いことが原因と考えられる。

道路状遺構は、調査区の中央付近で検出でき、調査区と直行していた。火山灰の堆積状況と、陸軍迅速図等の資料から、近代まで使用されていたと考えられる。

掘立柱建物跡は、3棟検出したが、ピットの分布から想定すると、3棟以上存在している可能性も考えられる。

火葬墓は、調査区の中央やや南側から検出した。火葬墓の中からは、棺の止め金や副葬品の飾り金具などが出土したが、年代については、明らかにする事が出来なかった。

井戸跡は6基検出できたが、調査区の中央から北側に集中し、土壌と重複しているものが、多く認められた。

遺物は、縄文時代の土器と石器、中世の土器、陶磁器と砥石などが検出できた。

また、調査区北側の谷部包含層からは、大量の鉄滓を中心として、容器鋳型、獸脚鋳型、角柱状鋳型、羽口、溶壁、トリベなどの古代の製鉄関連遺物が大量に検出できた。

特筆される事として、中世土壌の中の10基からは、遺存状態が良好で、埋葬時の姿勢のわかる人骨が検出できた。

縄文時代の遺構と遺物

住居跡

縄文時代の住居跡は、10軒検出できた。

これらの住居跡の分布域は、そのほとんどが後世の墓域と重複しており、従って、縄文時代の住居跡の大半は、中世の土壌によって著しい攪乱を受けていた。

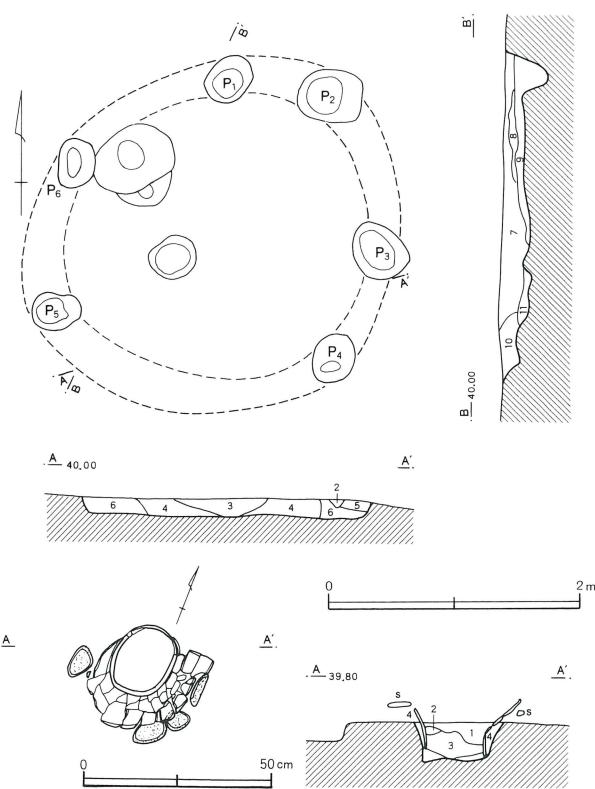
このために、住居跡の平面形態や床面は必ずしも明瞭ではなく、さらに遺物も帰属関係がやや不明瞭であった。

第1号住居跡(第11図)

第1号住居跡は、O-22グリッドから検出した。

住居跡は、北側ではSJ-4と隣接し、北西側で、ピットと重複していた。

第11図 第1号住居跡



S J - 1	1 黒色土	2 mm L粒少含	砂質
	2 黒色土	2 mm L粒少含	砂質
	3 茶褐色土	2 ~ 5 mm L粒少含	砂質
	4 茶褐色土	2 ~ 5 mm L粒多含	
	5 黄褐色土	L主体 H L粒 5 mm前後少含	やや固締
	6 黄褐色土	L主体 H L多含	やや固締
	7 茶褐色土	S L粒・10mm H L多含	C少含 弱粘性
	8 黄褐色土	S L粒多含	砂質
	9 黄褐色土	S L主体	粘性
	10 黄褐色土	S L主体	弱粘性
	11 黄褐色土	20mm H L多含	

平面形態は、径2.5m程度の円形を呈しており、確認面から床面までの深さは20cm程度であった。

床面の確認状況は、やや不明瞭であった。

壁溝は確認できなかつたが、炉跡には胴下半部を欠失した第12図1の土器が埋め込まれていた。

各ピットの深さは、P 1 = 20cm、P 2 = 10cm、P 3 = 25cm、P 4 = 60cm、P 5 = 25cm、P 6 = 35cmであった。

第1号住居跡出土土器(第12図)

1はキャリバー形深鉢形土器である。口縁部に区画文を配し、胴部に磨消縄文帯が垂下する。口縁部には幅の広い沈線文で文様が施されている。縄文はRLである。口縁部の1/2が残存する。全体の1/3が残存する。

2~4・6・7はキャリバー形深鉢形土器の口縁部である。2・3・7は口縁部区画文を有する。4・6は横位に巡る沈線文で縄文を施す。2、4、6の縄文はRLである。

5は外傾する無文の口縁部を有する深鉢形土器である。

8・9はキャリバー形深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての土器である。縄文はRLである。同一個体である。

10~17はキャリバー形深鉢形土器の胴部である。10は隆帶と沈線文、11~16は縄文帯が垂下する。縄文は12が無節L、11・13~16がRLである。

18・19は櫛歯状工具による条線を施す。

第1号住居跡出土土器は加曾利E III式古段階の所産である。

第1号住居跡出土石器(第13図)

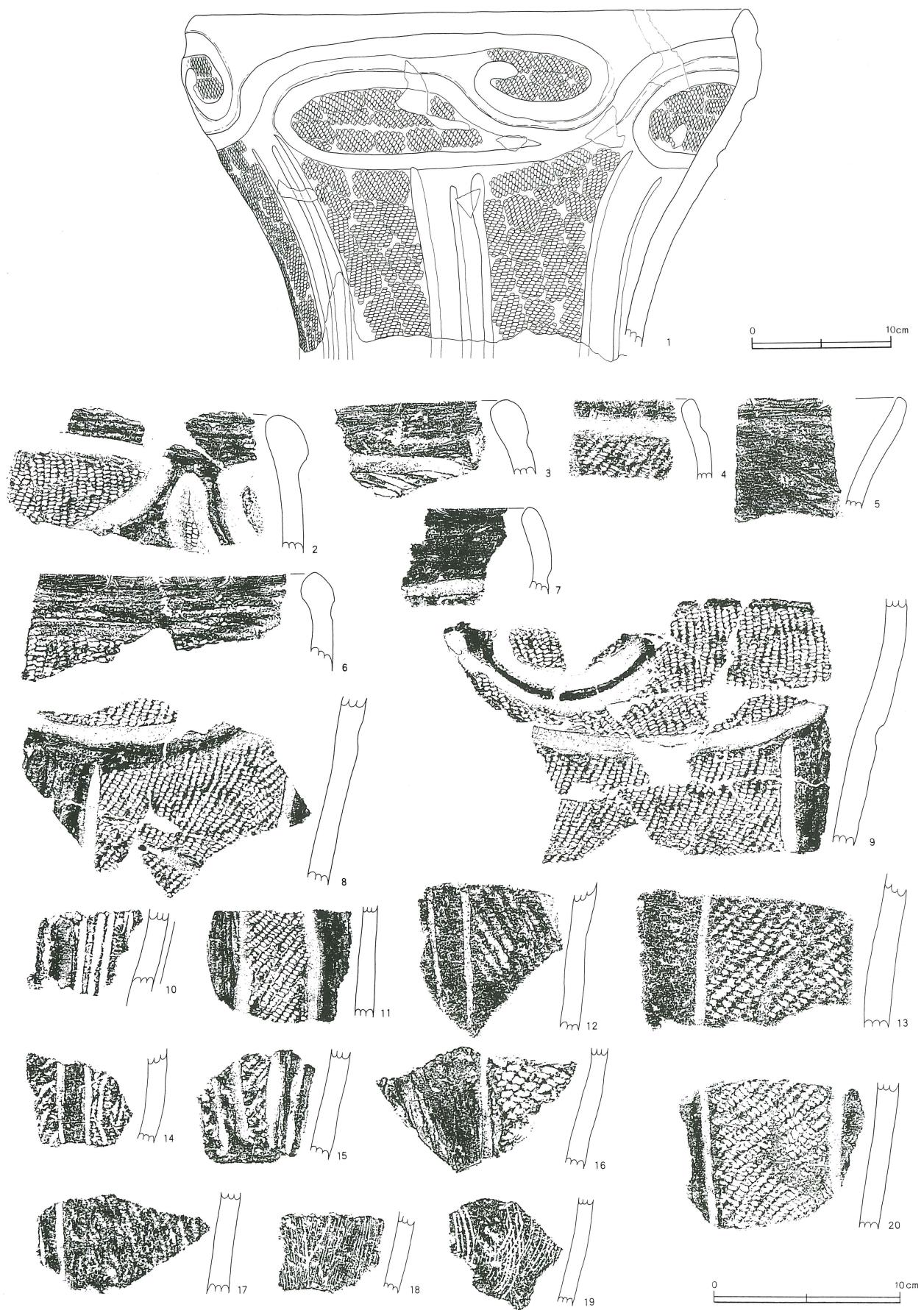
1~3は打製石斧であった。

1は短冊形で、石材はフォルンフェルスで、風化が著しかつた。

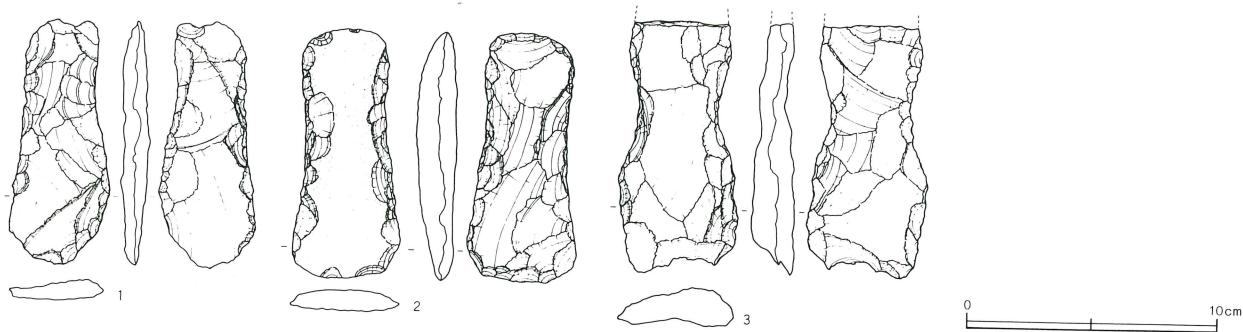
2は短冊形で刃部は直刃、自然面を大きく残している。石材は砂岩であった。

3は分銅形で、刃部、基部とともに欠損していた。石材はフォルンフェルスで、風化が著しかつた。

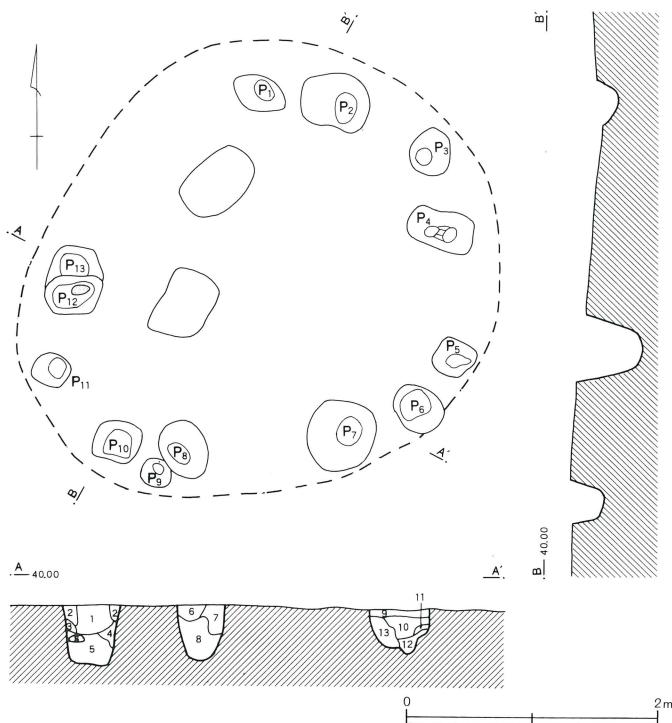
第12図 第1号住居跡出土遺物(Ⅰ)



第13図 第1号住居跡出土遺物(2)

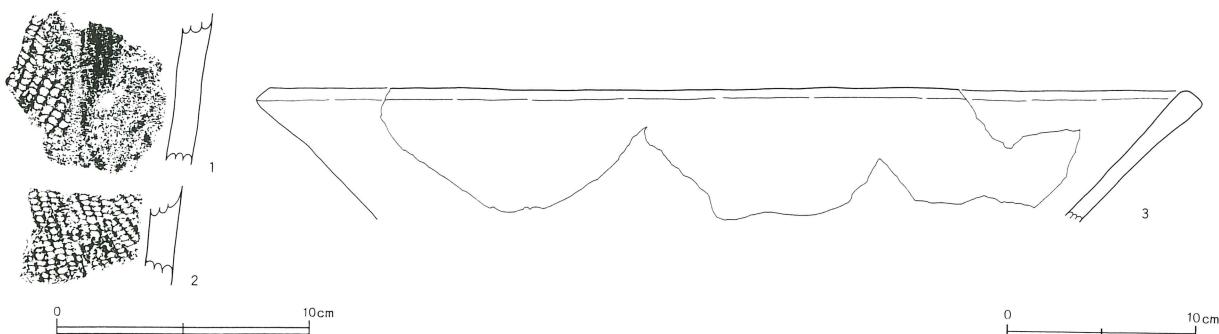


第14図 第4号住居跡



S J - 4		
1 暗茶褐色土	L・C少含	砂質
2 明茶褐色土	浅間B少含	L少含 砂質強
3 黒褐色土	C微含	砂質
4 黄茶褐色土	2層にL多含	砂質
5 黄褐色土	L・LB混土層	やや固締
6 茶褐色土	S L少含	砂質
7 茶褐色土	S L 2~10mm H L多含	砂質強
8 茶褐色土	S L 2~10mm H L多含	砂質強
9 暗茶褐色土	火山灰	S L少含 やや固締

第15図 第4号住居跡出土遺物



第4号住居跡(第14図)

第4号住居跡は、O-21、22グリッドから検出した。

住居跡は耕作によって覆土が消失し、立ち上がりは不明瞭であった。

住居跡には、ピットが重複していた。

形態は径3.5~4 m程度の円形を呈していた。

壁内側の13本のピットについては、全てが住居跡に伴うものか明らかにできなかった。

床面の確認状況は、やや不明瞭であった。

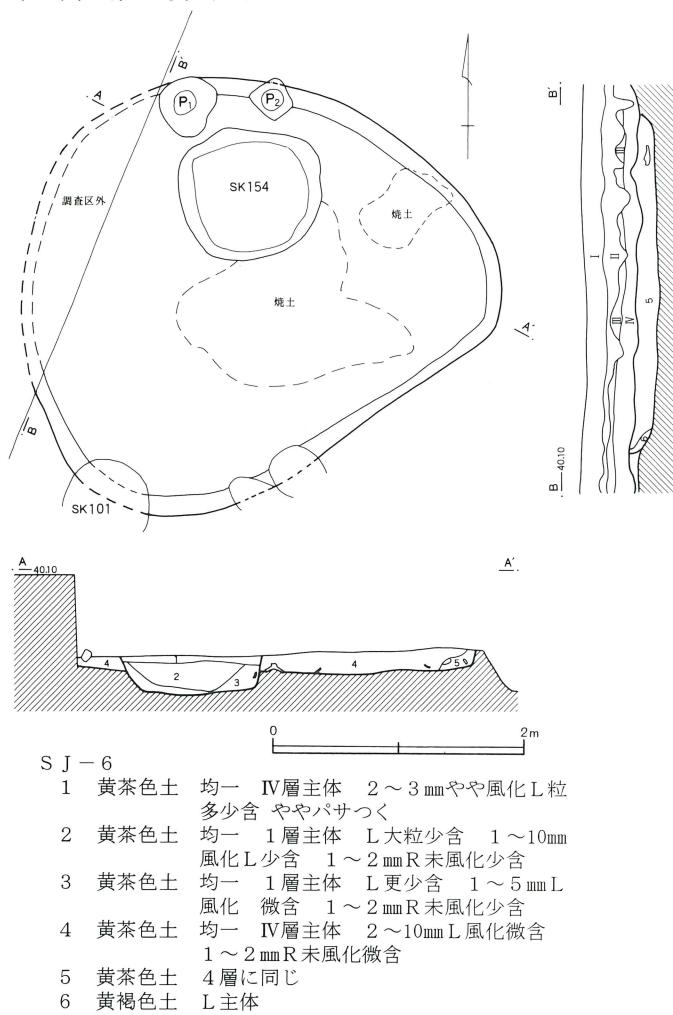
壁溝と炉址は確認できなかった。

各ピットの深さは、P 1 = 40cm、P 2 = 55cm、P 3 = 35cm、P 4 = 55cm、P 5 = 20cm、P 6 = 35cm、P 7 = 50cm、P 8 = 70cm、P 9 = 60cm、P 10 = 25cm、P 11 = 40cm、P 12 = 55cm、P 13 = 35cmであった。

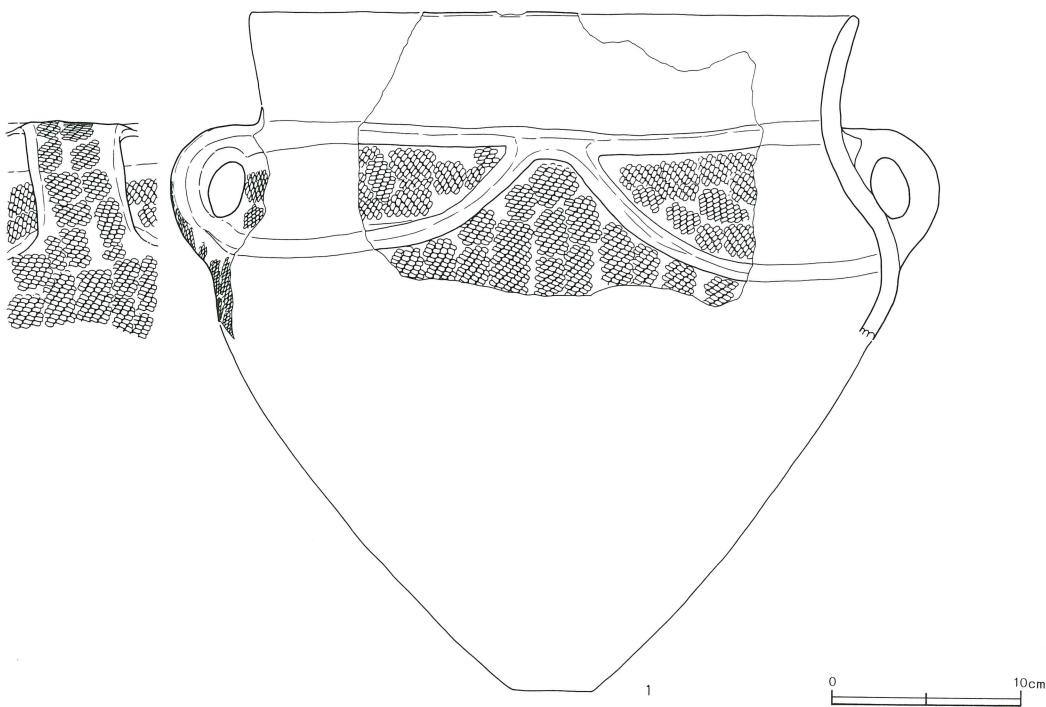
第4号住居跡出土土器(第15図)

1はキャリバー形深鉢形土器の胴部破片で、沈線による縦位の区画が見られる。2は縄文のみの破片である。縄文は1がRL、2がLRである。3は無文の浅鉢形土器である。残存度は1/6以下である。

第16図 第6号住居跡



第17図 第6号住居跡出土遺物(1)



第6号住居跡(第16図)

第6号住居跡は、M-22グリッドを中心として検出した。

住居跡の西側一部は、調査区の境界にかかり完掘できなかった。

住居跡は、南側ではSK-101、166及びピットと、北側ではSK-154、ピットと重複していた。

平面形態は径3.5m程度の円形を呈しており、確認面から床面までの深さは10~20cm程度であった。

床面の確認状況は、やや不明瞭であった。
焼土は部分的に薄く認められたが、炉址は確認できなかった。

壁溝も検出できなかった。

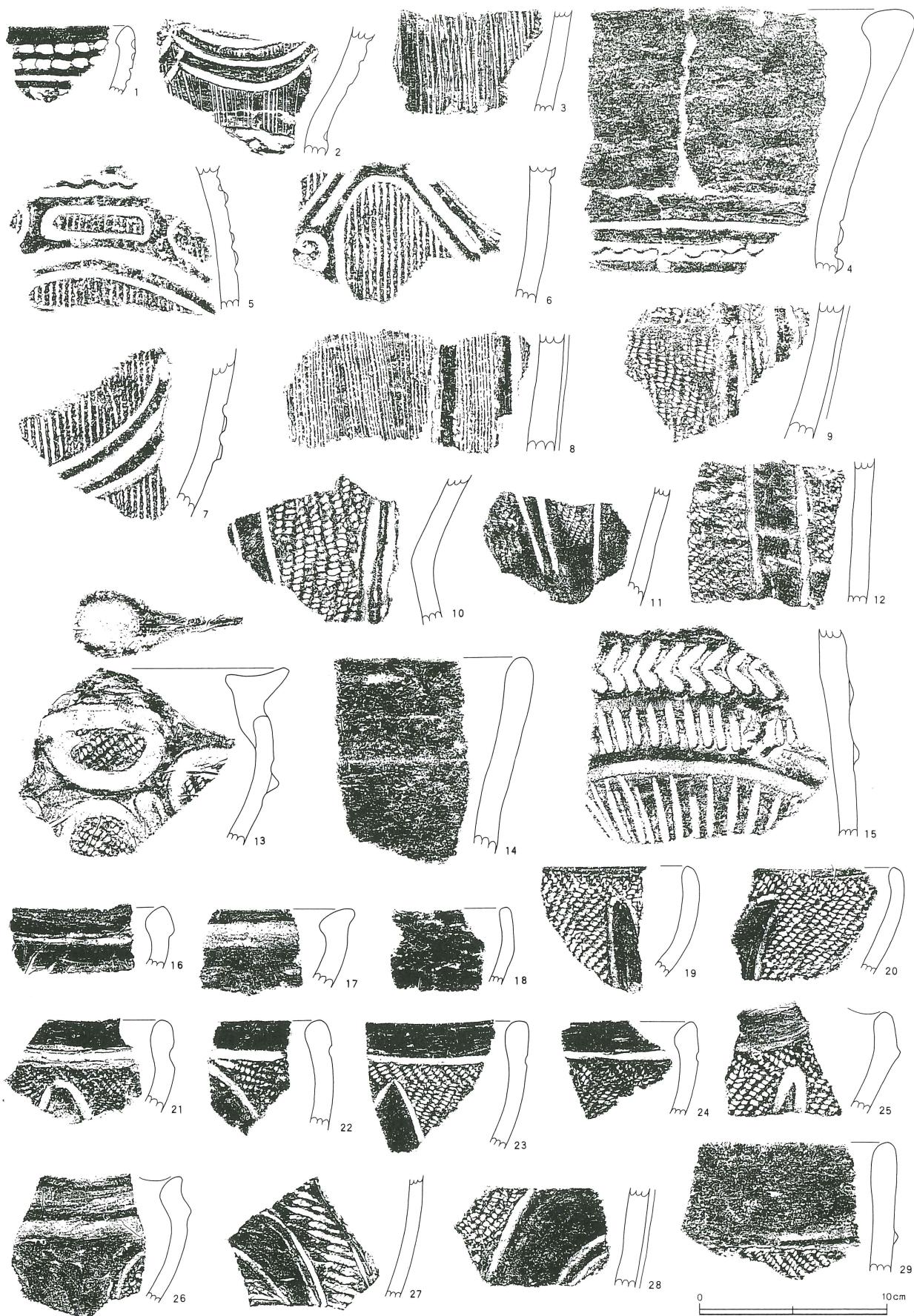
各ピットの深さは、P1=35cm、P2=20cmであった。

第6号住居跡出土土器(第17、18図)

第6号住居跡出土土器は加曾利E III式(第17図1、第18図13~29)とこれより古い土器(第18図1~9)が混在している。

第17図1は両耳壺である。口辺部の一部と把手部分の破片が残存している。胴部で強く張り、無文の口縁部が緩やかに外反している。胴部との境、

第18図 第6号住居跡出土遺物(2)



および把手の下端と連結して弧状に隆帯を施す。縄文はR Lで、主として区画内は横位に、それ以外は縦位に施文する。

第18図1、2は連弧文系の土器である。1は口縁部に2段に刺突文、2は胴部に交互刺突文が認められる。2の地文は条線文である。3は地文に条線文を施す。

第18図4～7は胴部が張り、無文の外傾する口縁部を有する深鉢形土器である。4、5には括れ部に交互刺突文が施される。6～7は胴部の破片で隆帯と沈線により曲線的なモチーフが施される。地文は撚糸のLである。

第18図8～12はキャリパー形深鉢形土器の胴部破片である。8は隆帯と条線が垂下する。9は隆帯とR Lの縄文を施す。9～12は磨消縄文を施す。縄文はR Lである。

第18図13はキャリパー形深鉢形土器の口縁部である。波状部の破片で橿円の口縁部区画文が見られる。縄文はR Lである。

第18図14、15は胴部が張り、無文の外傾する口縁部を有する深鉢形土器である。15は括れ部近くの破片で、矢羽根状の沈線文が見られる。隆帯と沈線文により、唐草状のモチーフが施される。

第18図16～18は無文の浅鉢形土器である。16、17は口縁部に稜を施す。

第19図19～25は胴部中位で括れ、体部に磨消縄文を施す土器である。19～24は平口縁の深鉢形土器である。19、20は同一個体でR Lの縄文を施す。21～24は口縁部の無文部を横位の沈線文で区切っている。21、23、24はR L、22はL Rの縄文を施す。23、24は同一個体である。25は波状口縁の土器で、縄文はR L Rである。

第18図26～28は胴部が括れる深鉢形土器である。26は波状口縁の土器で、口縁部、モチーフを隆帯で区画する。27は沈線でモチーフを区画する。縄文は無節Lである。28は隆帯で文様を区画する。縄文はR L。

第18図29は底部から口縁部へ丸みをもって推移する単純な形態の深鉢形土器である。口縁部の無文部を横位の隆帯で区画する。縄文はR Lである。

第10号住居跡(第19図)

第10号住居跡は、K-22,23グリッドを中心として検出した。

住居跡の西側は、調査区の境界にかかり完掘できなかつた。

住居跡は、北側ではSK-120と重複していた。

平面形態は、径3.5m程度の円形を呈しており、確認面から床面までの深さは2～3cm程度であり、緩やかな窪みにすぎなかつた。

床面の確認状況は、やや明瞭であった。

壁溝は確認できなかつたが、炉址は2基確認できた。このことから、第10号住居跡は、2軒の住居跡の重複であると考えられた。

1号炉は土器が埋め込まれ、そのまわりに半分程度埋め込まれた石囲いが行われていた。

2号炉も同様に土器が埋め込まれていたが、石囲いは検出できなかつた。出土土器から、炉1が炉2よりも古いと考えられたが、2つの炉跡にそれぞれ伴う柱穴については明らかに出来なかつた。

第10号住居跡出土土器(第20図)

当住居跡は2軒の重複と考えられ、出土土器も勝坂期の土器と加曽利E式期の土器群が認められる。

1は炉2の炉体土器である。深鉢形土器の底部であり、縦位に削り痕が見られる。加曽利E式であろう。

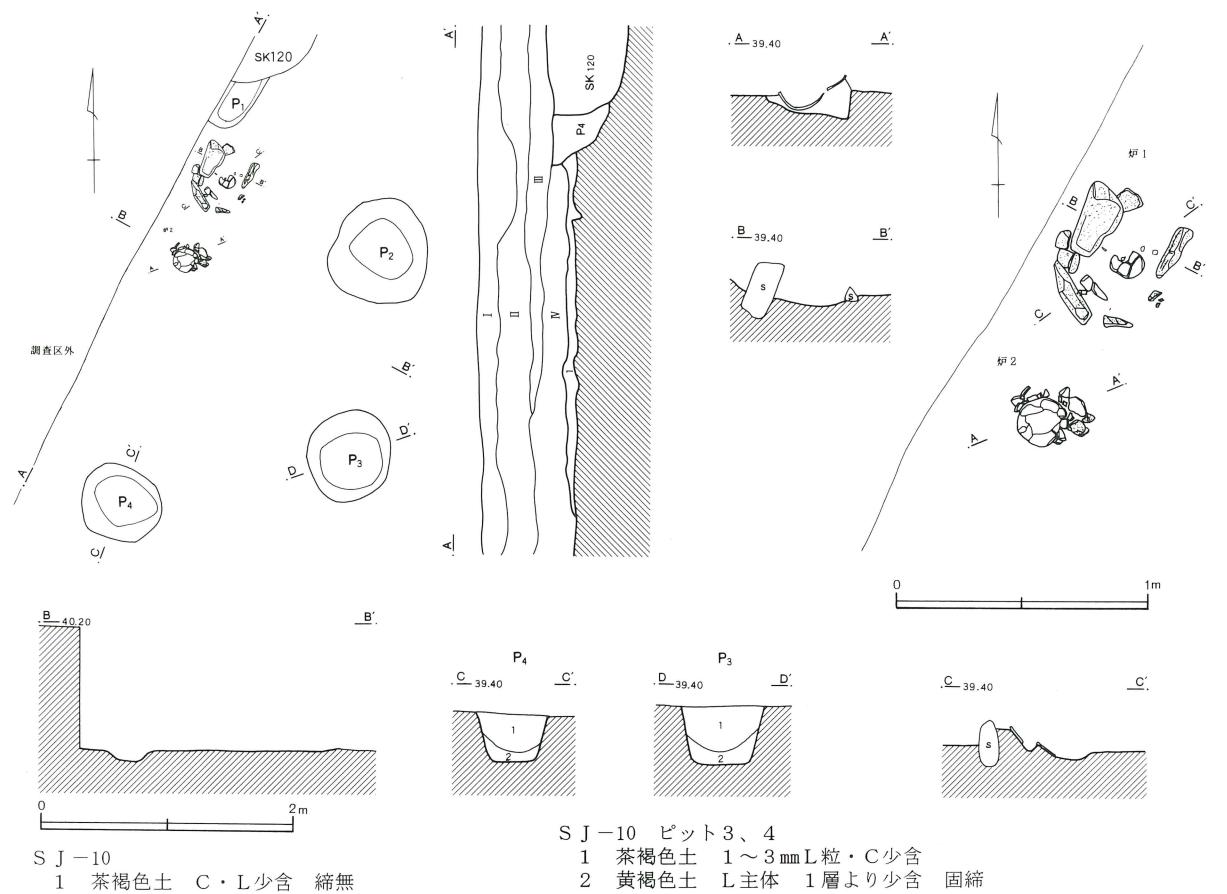
2～6は阿玉台式、勝坂式である。

2はY字状に隆帯を垂下させる。隆帯には指頭によるくぼみを施す。隆帯に沿って、2列の角押文を施す。雲母を含む。3は張り出した口縁部文様の部位を橋状につくる。隆帯上に爪形文が施される。4は刻みのある隆帯や沈線に沿って、爪形文を施す。5は無節のLを縦位に施す。炉1の中から出土している。6は沈線文により区画する。縄文はR Lである。

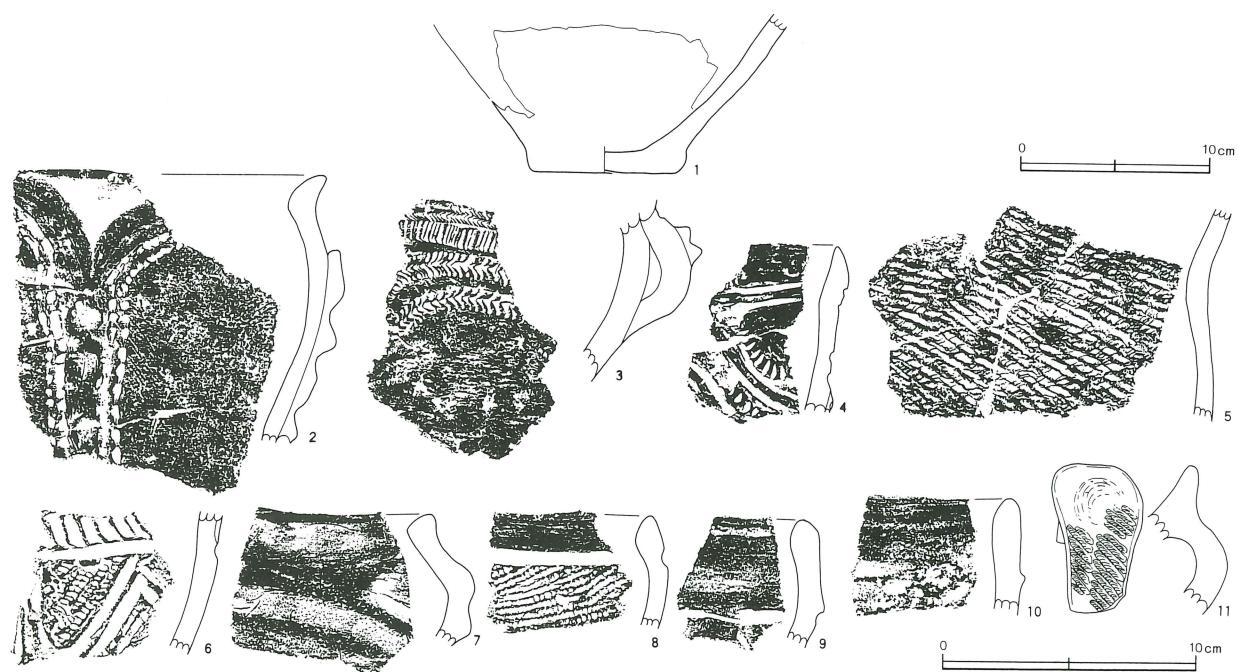
7～11は加曽利E式である。

7はキャリパー形深鉢形土器の口縁部である。8は口縁部に1条沈線を巡らせる。縄文はR Lである。9、10は口縁部に微隆帯を巡らせる。11は両耳壺の把手部分の破片である。無節Lを施す。

第19図 第10号住居跡



第20図 第10号住居跡出土遺物



第14号住居跡(第21図)

第14号住居跡は、M-22グリッドを中心として検出した。

住居跡の西側は、調査区の境界にかかり完掘できなかつた。

住居跡は、東側ではSK-41、164、165、74と、西側ではSK-154、101、SJ-6と、南側ではSJ-7、SK-166、89、48、22、79、108と、北側ではSJ-5と重複していた。

平面形態は、径7.5m程度の円形を呈しており、確認面から床面までの深さは50cm程度であった。

床面の確認状況は、やや不明瞭であった。

壁溝は、各方向で多少途切れつつも、ほぼ全周していた。

炉址は確認できなかつた。

各ピットの深さは、P 1=30cm、P 2=50cm、P 3=40cm、P 4=75cm、P 5=25cm、P 6=15cm、P 7=40cm、P 8=40cm、P 9=15cm、P 10=40cmであつた。

第14号住居跡出土土器(第22～26図)

当住居跡出土土器は勝坂式～加曾利E III式新段階の土器を含んでいる。加曾利E III式新段階の土器を第25図、第26図に示し、それより古い土器を第22図～第24図に示した。

住居跡は後世の遺構によって、炉跡等も失われているので明確ではないが、出土土器から見る限り、勝坂式等の混入を除くと、加曾利E II式と加曾利E III式が多い。

第22図1～4はキャリバー形深鉢形土器である。1は口縁部に隆帯と沈線により渦巻き状のモチーフ、楕円区画を施す。楕円区画内部は縦位の沈線文を施す。剣部に無文帶をもつ。1/10以下の残存度である。

2～4は底部である。2は地文上に縦位の沈線を施す。3、4は縦位の沈線を施し、磨消繩文としている。3は底面が欠損している。2～4の繩文はRLである。

第22図5は底部から口縁部へ直線的に移行する単純な形態の深鉢形土器である。口縁部の無文部を2条

の横線で区画している。沈線の描出は難である。口縁部の横線から縦位の沈線、曲線が垂下する。地文はLの撲糸文である。胴部下半を欠いている。約1/2が残存している。

第22図6～9は浅鉢形土器である。6は口縁部が内湾する形態の土器である。口縁部に2条の横線を巡らせる。7、8は口縁部を肥厚させる。8は補修孔が見られる。6は1/6、8は1/4、7、9は1/10以下の残存度である。第22図10は深鉢形土器の底部である。

第22図1、2は中期中葉の土器である。1は無文の口縁部をもつ筒形の形態の深鉢形土器である。隆帯には爪形文を施し、体部には沈線に沿って爪形文を施す。2は三角形区画文を隆帯で施す。隆帯に沿って爪形文を施す。雲母を含む。

第22図3～30は加曾利E式のキャリバー形深鉢形土器である。

3～9、11は口縁部の破片である。3は弧状の隆帯を施す。4は橋状の把手を施す土器である。橋状の部位を欠損している。把手には円孔が施される。口縁部の区画内には縦位の沈線を施す。胴部は沈線を垂下し磨消繩文としている。

5～9、11は口縁部の区画文、横S字状のモチーフ等を施す。5、7～9はRLの繩文、6、11は沈線文を区画内に施文する。

10、12～30はキャリバー形土器の胴部破片である。10、12は頸部付近の破片で横位の隆帯が巡る。13は胴部に渦巻き状の隆帯を施す。14は地文上に沈線文を施す。10、12～14の繩文はRLである。

15～17はLの撲糸文を施す。地文上に16、17は隆帯、18は沈線を施す。18～25は縦位の沈線を垂下し、磨消繩文を構成する土器である。いずれも繩文はRLである。26～30は曾利系の深鉢形土器である。26、27は条線文を施す。28～30は矢羽根状の沈線文を区画内に施す。

第24図1～16は連弧文系の深鉢形土器である。

1～5は口縁部に交互刺突文を施す。1はLの撲糸

第21図 第14号住居跡



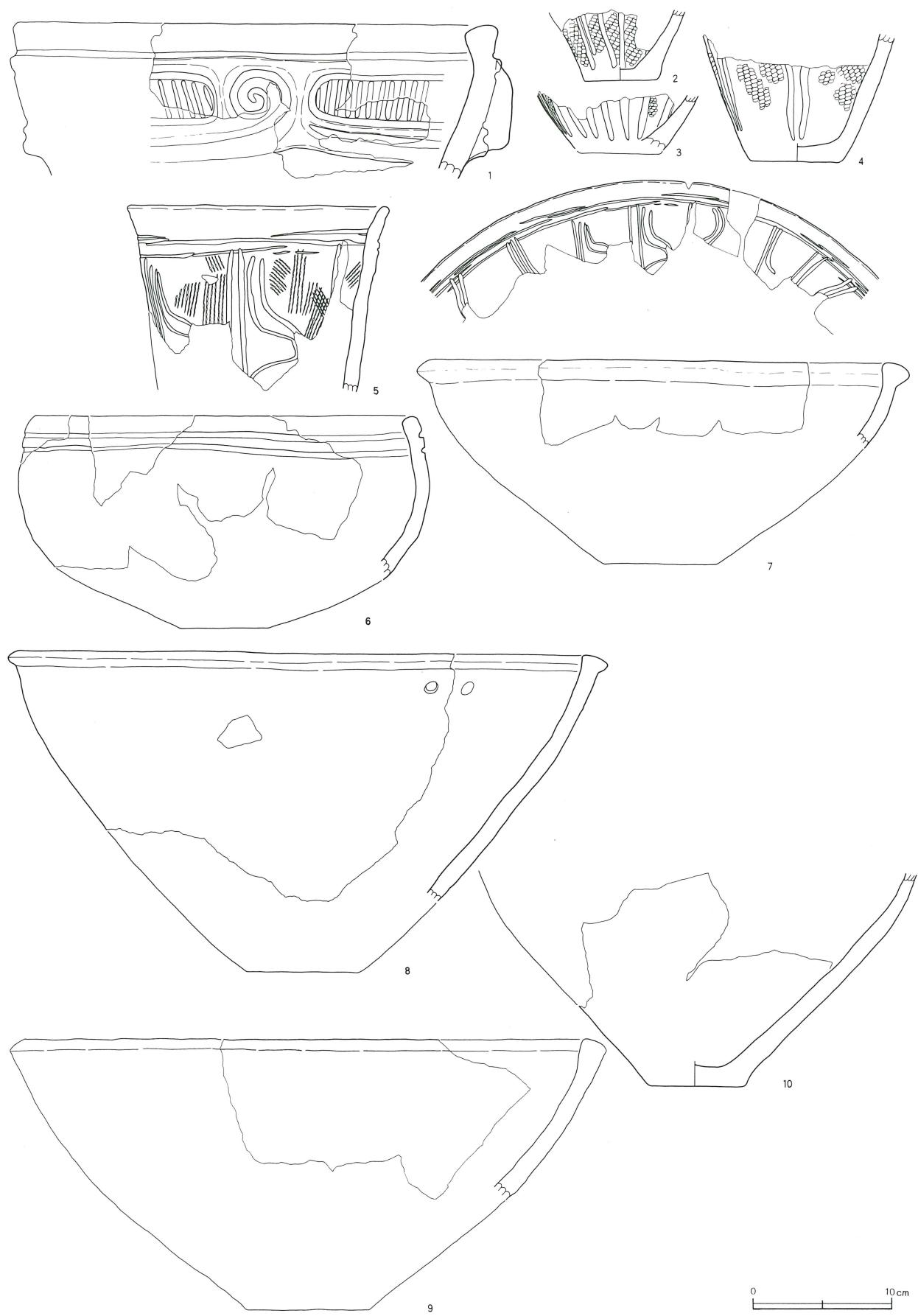
文、2～5はRLの縄文を施す。

6は口縁部の2条沈線の間に刺突を施す。縄文はR Lである。7、8は2条の沈線のみを口縁部に巡らせ

る。7はRLの縄文、8はLの撚糸文を施す。

9は括れ部の破片で、2条沈線で胴部とを画している。縄文はRLである。10、11は胴部の破片で地文に

第22図 第14号住居跡出土遺物(Ⅰ)

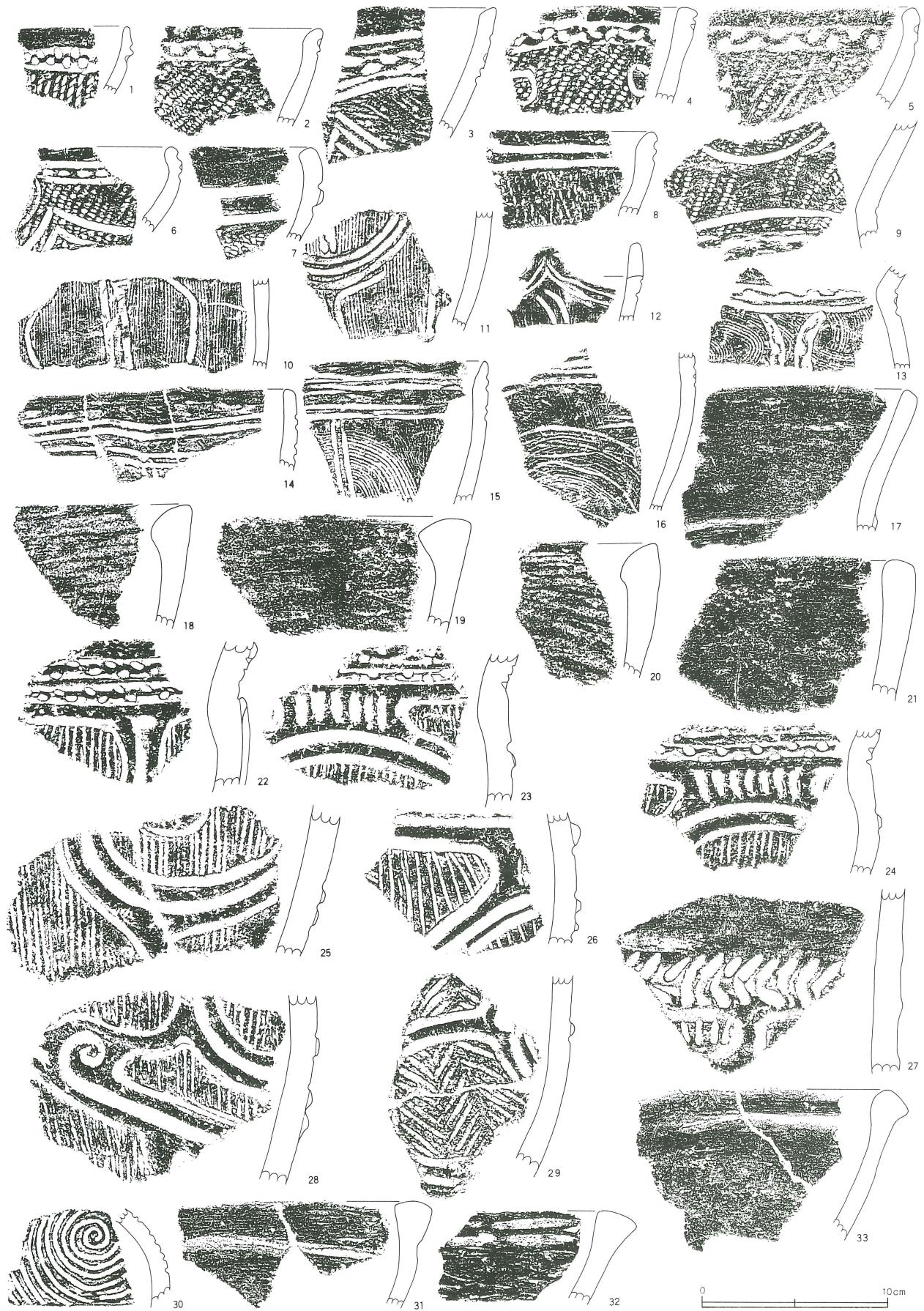


第23図 第14号住居跡出土遺物(2)

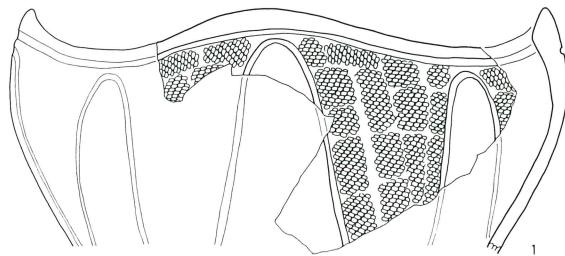


0 10 cm

第24図 第14号住居跡出土遺物(3)



第25図 第14号住居跡出土遺物(4)



条線を施す。12は波状部の破片である。13は交互刺突文が巡る括れ部の破片である。胴部には弧状に交互刺突文を配す。地文の条線は曲線的に施されている。

第24図14～16も地文に条線を施す。括れのない形態の土器であろう。

14、15は口縁部に2条1組の横線を2段に施す。
15、16は地文に曲線的な条線文を施す。

第24図17～26、28、29は胴部が張り、無文の外傾する口縁部を有する深鉢形土器である。

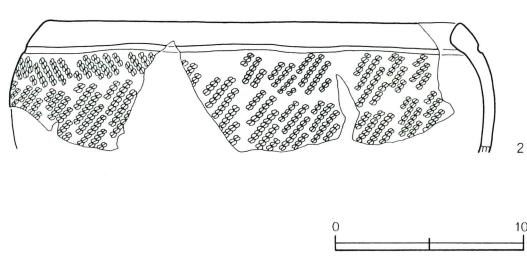
17～21は無文の口縁部破片である。17は括れ部に隆帶を巡らせる。22～24は括れ部の破片である。交互刺突文を2段に巡らせる。

25、26、28、29は胴部の破片である。隆帶により曲線的なモチーフが施される。26はLの撚糸文、22～24、26、28は縦位の沈線文、29は矢羽根状沈線文を地文として施す。27も同種の土器であるが、括れない形態であろう。無文部との境に矢羽根状沈線を横位に巡らせる。

第24図30～33は浅鉢形土器である。30は口縁部が外傾する形態の土器の頸部の部位で渦巻き状の沈線文を施す。31～33は無文の浅鉢形土器である。口縁部を肥厚させ稜線を巡らせている。

第25図1は口縁部が内湾気味に立ち上がる緩やかな波状口縁の深鉢形土器である。口縁部に沈線を巡らせ、体部に波状のモチーフの磨消繩文を施す。RLの繩文を施す。

第25図2は口縁部が内湾する形態の平口縁深鉢形土器である。口縁部に1条沈線を巡らせ、体部にはRLRの繩文を施す。1、2は1/10以下の残存度である。



第26図1～14は胴部で括れ、口縁部が内湾気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。

1～5は口縁部に点列を巡らせる土器である。1は点列と沈線、2は沈線を挟んで2段に点列、3は点列、4は点列と沈線、5は2段の点列をそれぞれ口縁部に巡らせる。2、4は2条沈線により波状のモチーフを施す。1～5の繩文はRLである。

6～13は1条沈線を巡らせ、口縁に無文帯をおく土器である。7～10は体部に波状の沈線を施す。繩文は6、9、13がLR、7、8、10がRL、11、12がRLRである。11、12は第25図2と同一個体である。

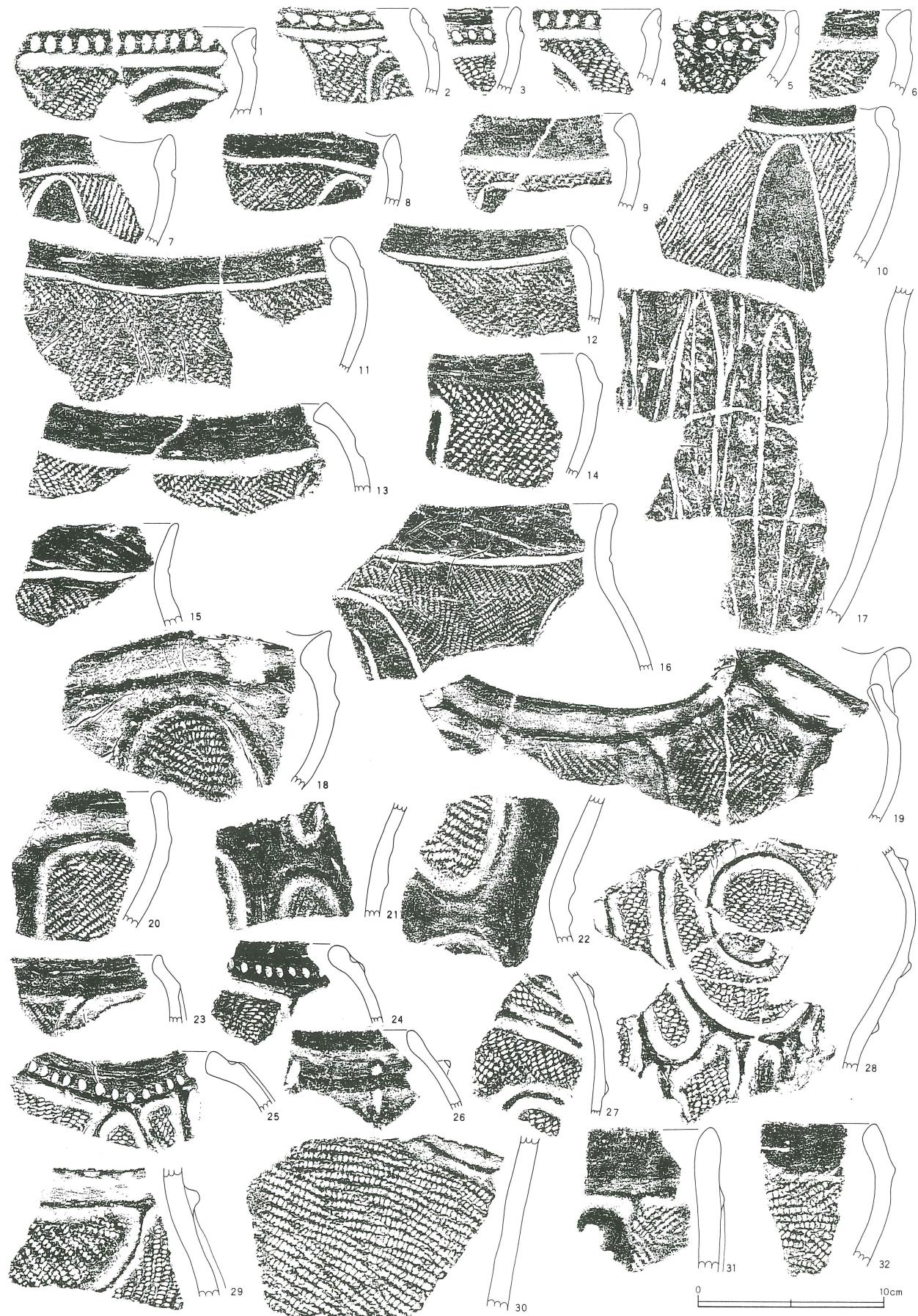
14は口縁部に無文帯と稜線が巡る。繩文はRLRである。

第26図15、16は胴部が張り、口縁部近くで括れ、口縁部が外傾気味に立ち上がる形態の土器である。16は体部に2条の曲線が見られる。同一個体である。繩文はRLである。第26図17は沈線区画内に無節のLを施す。第26図20は幅広の窪みを口縁部に巡らせる。繩文はRLである。

第26図18、19、21～32は微隆起線文を口縁部や体部に施す深鉢形土器である。各種の形態の土器がある。

18、19は波状口縁土器である。21、22は胴部破片である。23は微隆起線文、24、25は微隆起線文と点列を口縁部に巡らせる。26は有孔を施す。27、28は渦巻状の微隆起線文を胴部に施す。29は両耳壺の胴部であろう。30は底部から口縁部へ直線的に移行する形態の土器であろう。31も口縁部が直立気味に立ち上がる単純な形態の土器である。縦位に微隆起線文を施して、磨消繩文とする。32は口縁部が強く内湾する形態の深鉢形土器である。

第26図 第14号住居跡出土遺物(5)



第14号住居跡出土石器(第27図)

第27図 1～6は打製石斧であった。

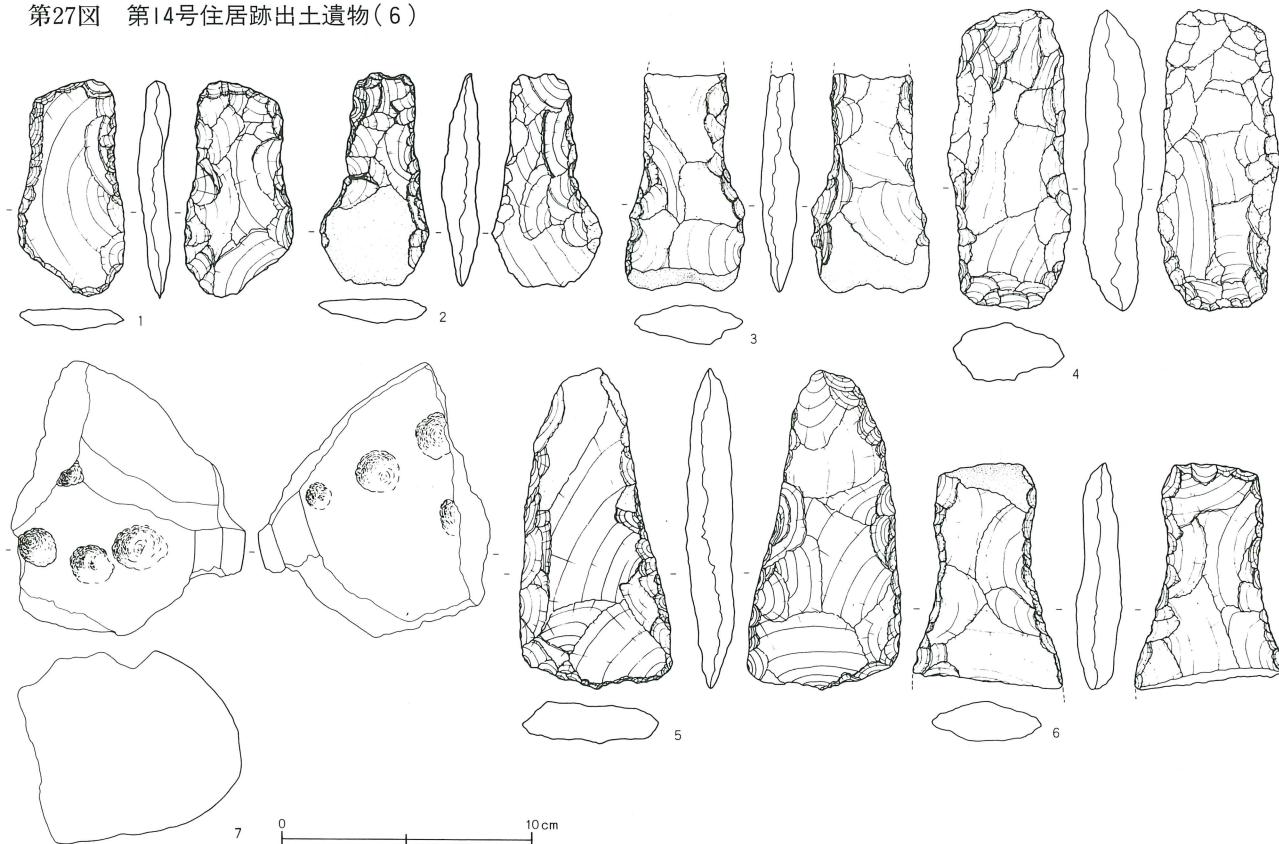
1は撥形で刃部は平ではなく、斜めであった。石材は安山岩で、風化が著しかった。

2は撥形で基部から刃部にかけて自然面を大きく残していた。

石材は頁岩であった。

3は撥形で刃部は両面とも自然面を残していた。基

第27図 第14号住居跡出土遺物(6)



第15号住居跡(第28図)

第15号住居跡は、K-24グリッドを中心として検出した。

住居跡は、西側ではSK-114、115と重複し、北側ではSK-132、156と重複していた。

平面形態は、径4m程度の円形を呈しており、確認面から床面までの深さは20cm程度であった。

床面の確認状況は、やや不明瞭であった。

壁溝と炉址は確認できなかった。

各ピットの深さは、P 1 = 55cm、P 2 = 5 cm、P 3 = 20cm、P 4 = 30cm、P 5 = 20cm、P 6 = 70cm、P 7 = 20cmであった。

4は短冊形で、石材は砂岩であった。

5は撥形で基部に自然面を残していた。刃部には小さな加工が施されていた。直刃で石材は砂岩であった。

6は撥形で刃部が欠損していた。石材はフォルンフェルスで風化が著しかった。

7は石皿で両面に窪みが認められた。石材は安山岩であった。



各ピットの深さは、P 1 = 55cm、P 2 = 5 cm、P 3 = 20cm、P 4 = 30cm、P 5 = 20cm、P 6 = 70cm、P 7 = 20cmであった。

第15号住居跡出土土器(第29、30図)

勝坂式、阿玉台式、加曾利E式が出土している。

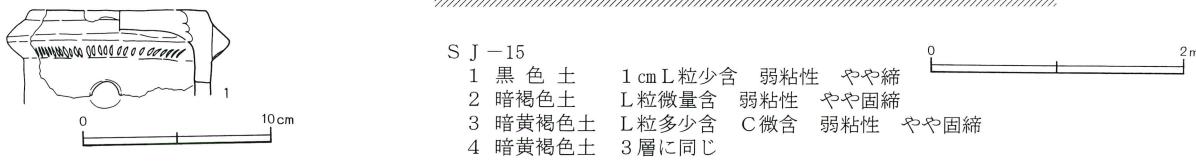
第29図 1は器台形土器である。鍔状に隆帯を巡らせ隆帯の下端には爪形文が巡る。円孔が施されている。

下部は欠損している。

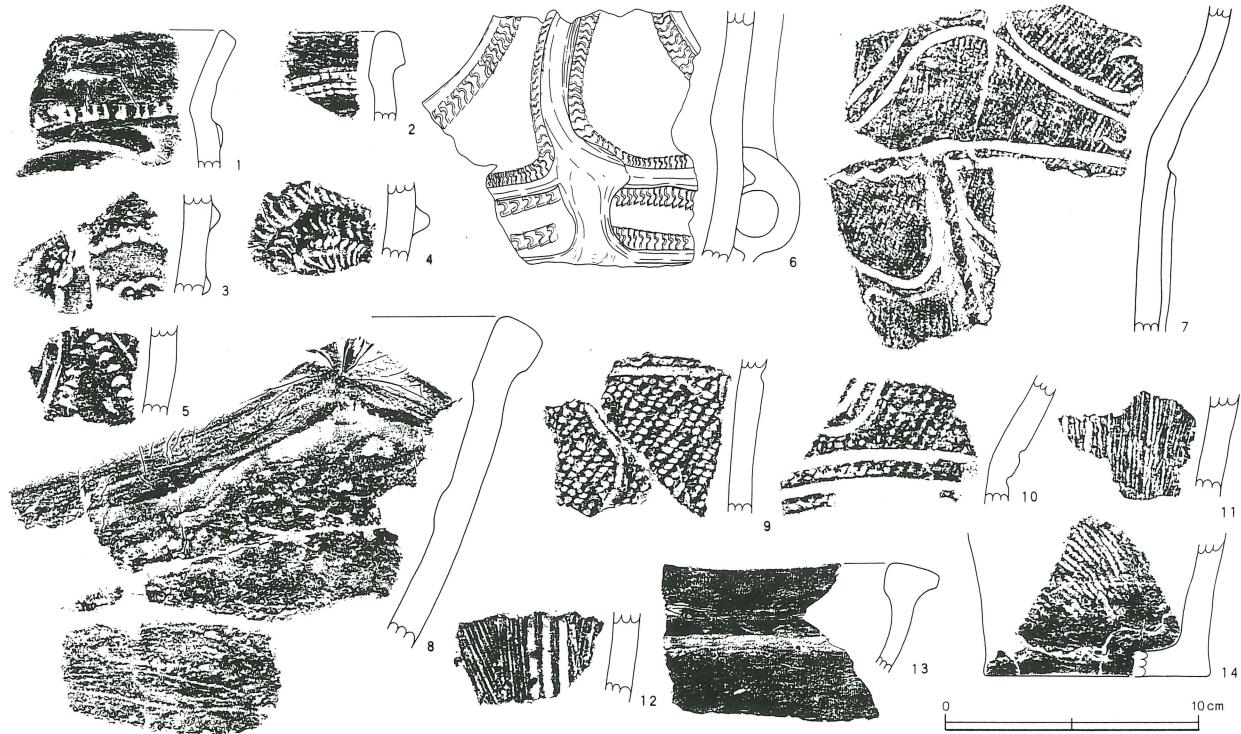
第31図 1～8、14は勝坂式、阿玉台式である。

1は無文の口縁部が緩く外傾する形態の土器である。隆帯に沿って角押文を施す。2も角押文を施す。3、4は隆帯に沿って、5は沈線に沿って爪形文を施す。6は山形の波状口縁の土器である。橋状の把手を施す。隆帯、口縁部に沿って角押文を施す。雲母を含む。7は底部から直線的に立ち上がり、体部上半で強く張り出す形態の土器である。張り出す部位には波状の沈線文を施す。胴部との境には沈線と小波状の沈線が巡る。胴部には縦位に隆帯が垂下する。胴部にも波状の沈線が施される。地文は細かいL Rの縄文であり、胴部の隆帯上にも施文される。8は山形の波状口縁土器である。口縁部

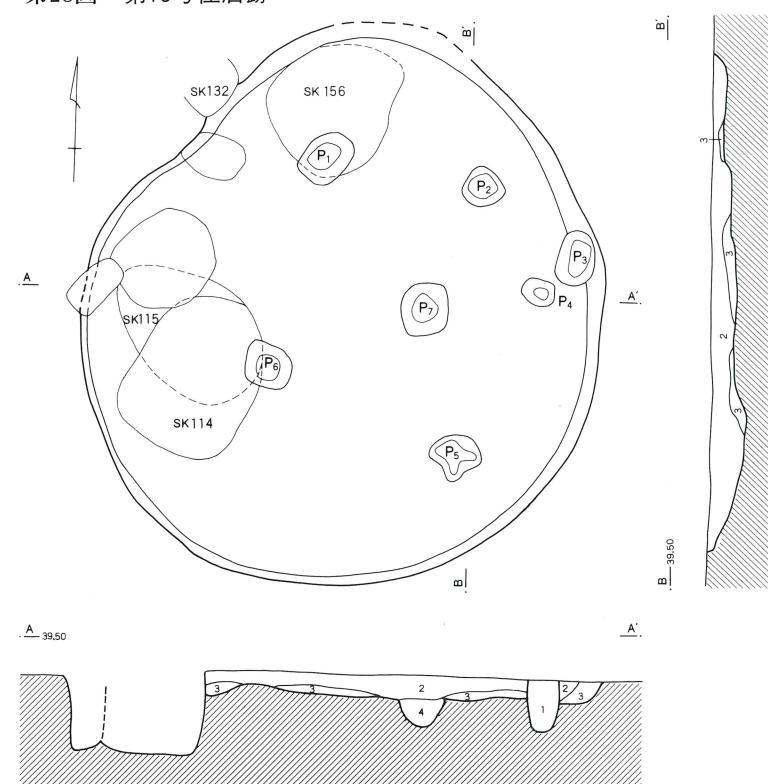
第29図 第15号住居跡出土遺物(1)



第30図 第15号住居跡出土遺物(2)



第28図 第15号住居跡



を肥厚させる以外は無文である。内面にも稜をもつ。14は底部の破片で無節Rの縄文を横位に施文する。

第30図9～13は加曾利E式土器である。9はキャリバー形の深鉢形土器の胴部で、蛇行沈線を施す。10は連弧文系の土器の括れ部である。9、10の縄文はRLである。11、12は地文に条線を施す曾利系の深鉢形土器の胴部破片である。13は無文の浅鉢形土器である。

第16号住居跡(第31図)

第16号住居跡は、L-24グリッドを中心として検出した。

住居跡の東側は、調査区の境界にかかり完掘できなかった。

住居跡は、北西側ではSD-3と重複し、南側では第1号道路状遺構、SK-127、128、129と重複していた。

平面形態は、径6m程度の円形を呈しており、確認面から床面までの深さは50cm程度であった。

床面の確認状況は、やや不明瞭であった。

壁溝は明瞭で、全周していたと考えられる。

炉址は確認できなかった。

各ピットの深さは、P1=20cm、P2=50cm、P3=25cm、P4=20cm、P5=60cmであった。

第16号住居跡出土土器(第32～34図)

当住居跡出土土器は加曾利E I式～E II式を主体とする。

第32図1～5は中期中葉の土器である。1は口縁部に角押文を斜位に施す。雲母を含む。2、3は筒形の形態の深鉢形土器である。4は浅鉢形土器であろう。円文、刻みを施す。5は無文の口縁部で、口唇部に刻みを施す。

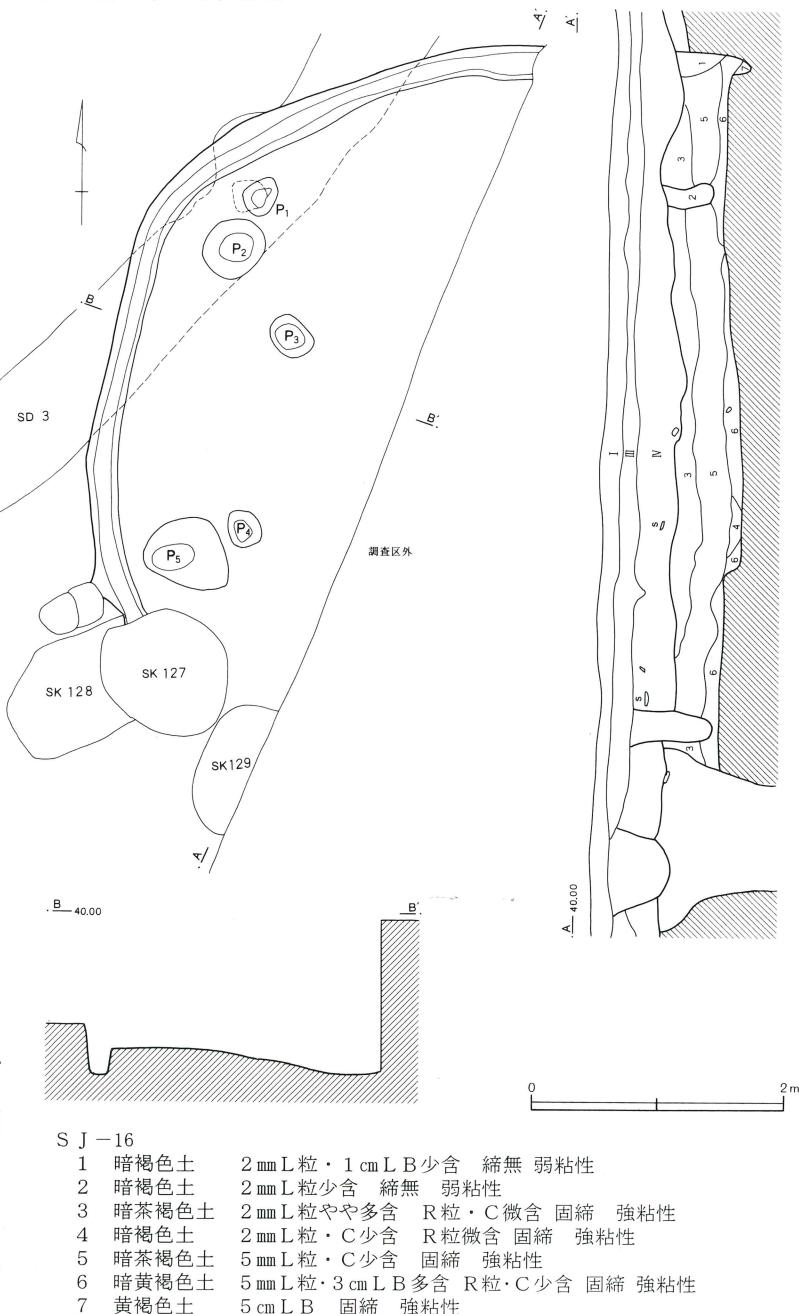
第32図6～22はキャリバー形の深鉢形土器である。

6～10は口縁部の破片である。隆帶により口縁部に区画文を施す。区内に6は縦位の沈線、7～9はRLの縄文、10は無節Lの縄文を施す。8、9は同一個体である。

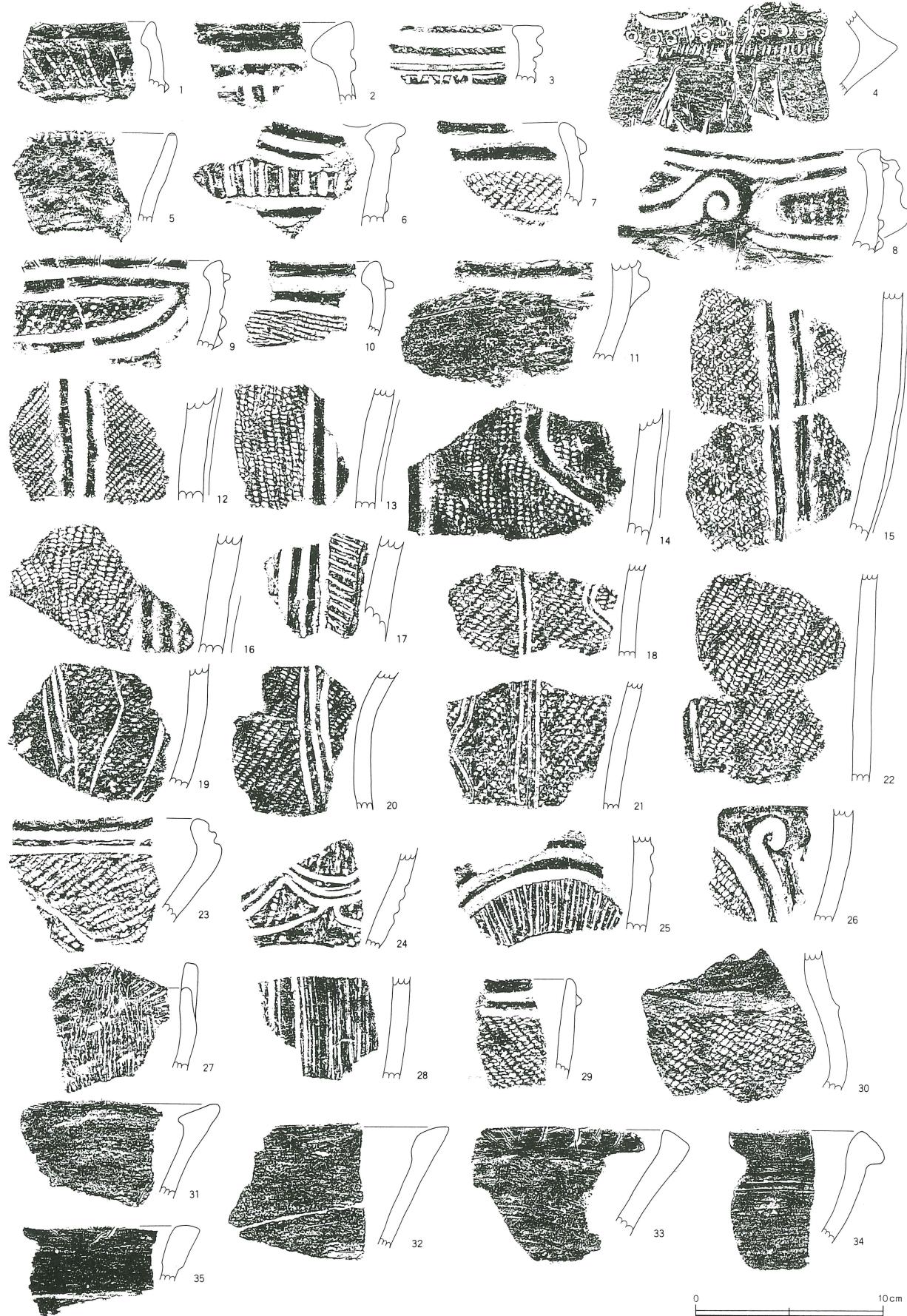
11は頸部の破片である。隆帶により頸部無文帯を画している。

12～22は胴部の破片である。12、13、15、16は縦位に隆帶が垂下する。15は縦位の隆帶と蛇行する隆帶を施す。縄文はいずれもRLである。17は縦位の沈線を

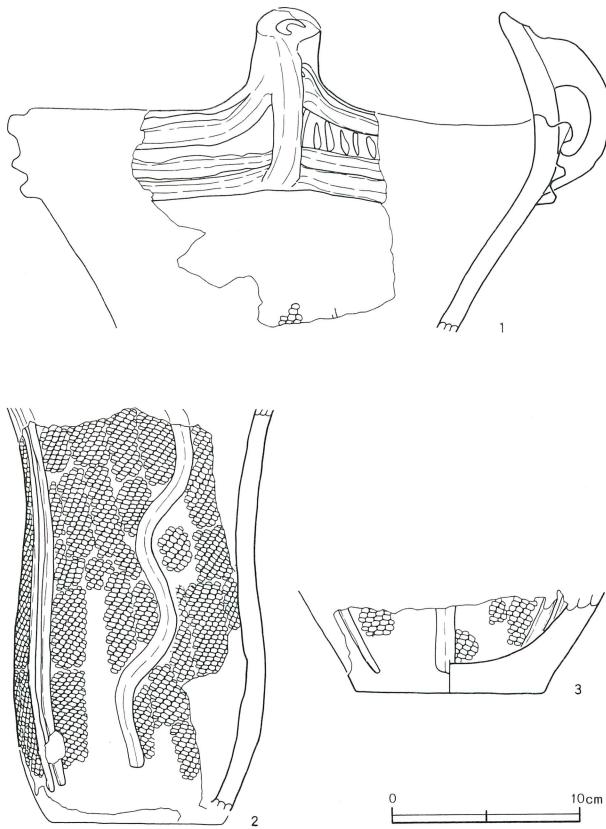
第31図 第16号住居跡



第32図 第16号住居跡出土遺物(Ⅰ)



第33図 第16号住居跡出土遺物(2)



垂下させ、区画内に斜沈線を施す。18~22は地文縄文上に、縦位等の沈線を施す。22は沈線間を磨消部とする。縄文はいずれもR Lである。

第32図23、24は連弧文系の土器である。23は口縁部に2条沈線を施す。R Lの縄文を施す。25は唐草文系の胴部破片である。26は蕨手状の沈線と縦位の区画文を施す。縄文はR Lである。27、28は縦位に条線文を施す。29は口縁部に微隆起線文を巡らせる。縄文はL Rである。30は両耳壺であろう。縄文はL Rである。

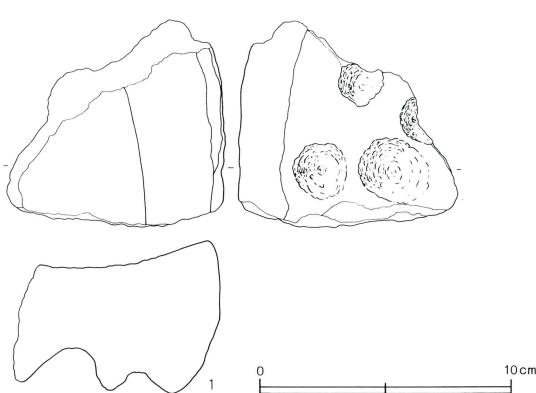
第32図31~35は無文の浅鉢形土器である。

第33図1~3はキャリバー形の深鉢形土器である。1は口縁波状部の破片である。橋状の把手を施す。隆帶で口縁部文様を区画し、縦位の沈線を施す。頸部無文帯をもつ。2、3は胴部、底部である。縦位の隆帶、蛇行する隆帶を施す。縄文はR Lを縦位に施す。

第16号住居跡出土石器(第34図)

1は石皿で、表面が凹状になっていた。石材はやや多孔質な安山岩であった。

第34図 第16号住居跡出土遺物(3)



第17号住居跡(第35図)

第17号住居跡は、H-24グリッドを中心として検出した。

住居跡の西側は、調査区の境界にかかり完掘できなかつた。

住居跡は、東側ではピットと重複していた。

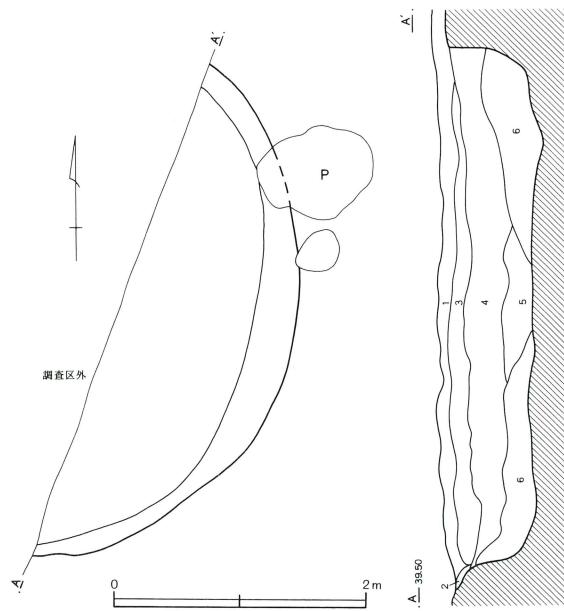
平面形態は、径4.3m程度の円形を呈しており、確認面から床面までの深さは70cm程度であった。

床面の確認状況は、明瞭であった。

壁溝と炉址は確認できなかつた。

遺物は検出できなかつた。

第35図 第17号住居跡



第18号住居跡(第36図)

第18号住居跡は、L-24グリッドを中心として検出した。

住居跡の東側は、調査区の境界にかかったために完掘できなかつた。

住居跡は、南側ではSJ-9と、東側ではSK-116、SE-2と、西側ではSK-106と、北側ではSK-107と重複していた。

平面形態は、径6m程度の円形を呈しており、確認面から床面までの深さは30cm程度であった。

床面の確認状況は、やや不明瞭であった。

壁溝と炉址は確認できなかつた。

各ピットの深さは、P1=50cm、P2=25cm、P3=90cm、P4=40cm、P5=25cm、P6=20cm、P7=75cm、P8=40cm、P9=45cm、P10=50cm、P11=50cm、P12=20cmであつた。

第18号住居跡出土土器(第37図)

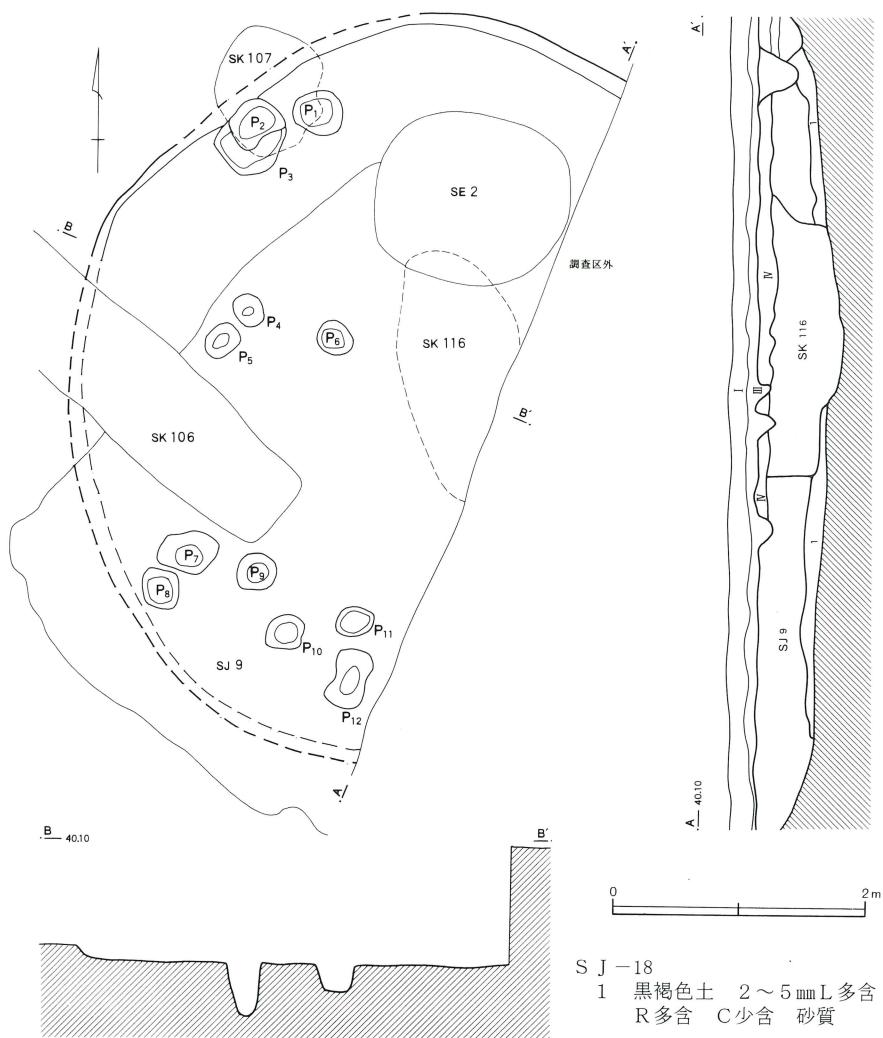
当住居跡出土土器は加曾利E II式である。

第37図1は胴部が張り、口縁部近くで強く括れる形態の深鉢形土器である。口縁部文様帶は橋状のつくりをしており、楕円形の円孔が施される。口縁部や円孔に沿って、沈線文や横S字状のモチーフが施される。括れ部は横線により区画している。口縁部の1/5程度が残存する。

第37図2～7はキャリパー形深鉢形土器の口縁部である。2は隆帯により弧状のモチーフを施す。2、6、7の縄文はRLである。

第37図8～10はキャリパー形深鉢形土器の胴部で

第36図 第18号住居跡



ある。8は地文に条線を施す。9はRLとLの縄文を施す。10は単節の縄文により羽状縄文を施す。縄文はRLで、横位、縦位に施文する。地文上に縦位の沈線、蛇行沈線を垂下する。

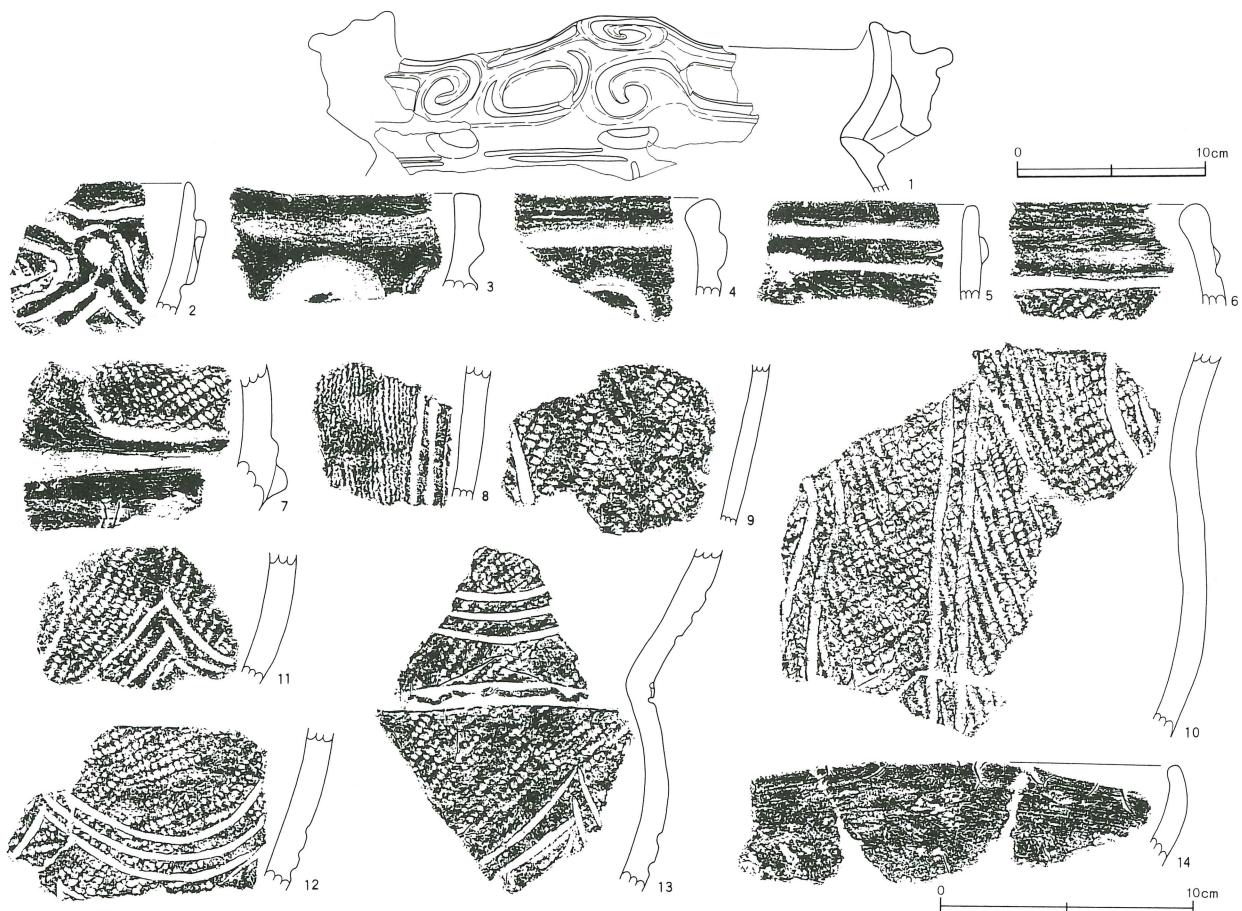
第37図11～13は連弧文系の土器である。

11、12は括れ部より上位の破片である。3条1組の弧線文を巡らせている。縄文はRLである。

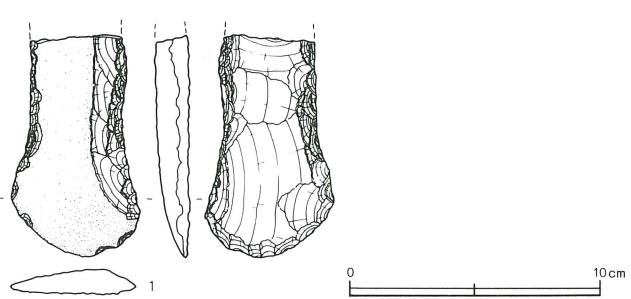
13は括れ部から胴下半までの破片である。3条1組の弧線文を施している。地文の縄文はRLである。括れ部には交互刺突文を巡らせる。

第37図14は無文の浅鉢形土器である。丸みを帯びた形態である。

第37図 第18号住居跡出土遺物(1)



第38図 第18号住居跡出土遺物(2)



第18号住居跡出土石器(第38図)

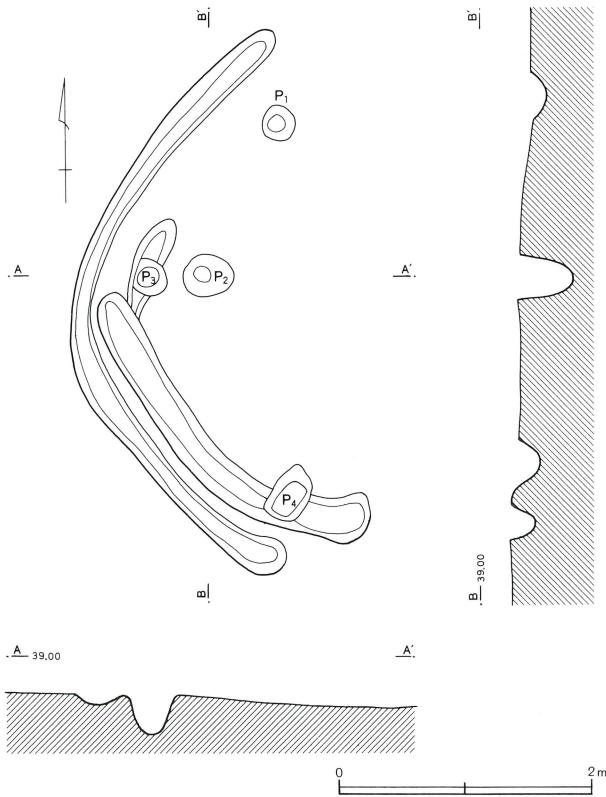
第38図1は打製石斧で、基部は欠損していた。自然面を大きく残している。石材は安山岩であった。

第19号住居跡(第39図)

第19号住居跡は、H-24グリッドから検出した。台地の縁辺部に立地しているため、表土の流失が著しく、覆土が遺存しておらず、わずかに西側の壁溝が検出されたのみであった。

平面形態は、径5m程度の円形を呈していたと考え

第39図 第19号住居跡



られ、僅かに遺存していた壁溝の深さは10~30cm程度であった。

床面は既に削平されたと考えられる。

壁溝は、西側からのみ検出でき、一部では二重に巡っていた。

炉址等も確認できなかった。

住居跡の床面に相当すると考えられる範囲内から、4本のピットが検出できたが、住居跡との関係を明らかにする事はできなかった。

ピットの覆土は、ローム質で、地山の土質に酷似していた。

遺物は検出できなかった。

土壙(第40図)

縄文時代と考えられる土壙は、2基検出できた。

第20号土壙

第20号土壙は、O-21グリッドから検出した。

土壙の規模は、長軸2.2m程度、短軸1.9m程度であった。

全体でSK-18と重複していた。

遺物は、縄文土器が検出できた。

第20号土壙出土土器(第41図1~8)

中期中葉の土器が出土している。

1は口縁部に三角形区画文帯を配し、頸部素文帯を置く土器である。隆帶に沿って爪形文を施す。区画内部には三叉文を施す。

2は山形の波状部である。波頂部から凹凸のある隆帶を縦位に垂下させている。雲母を含む。

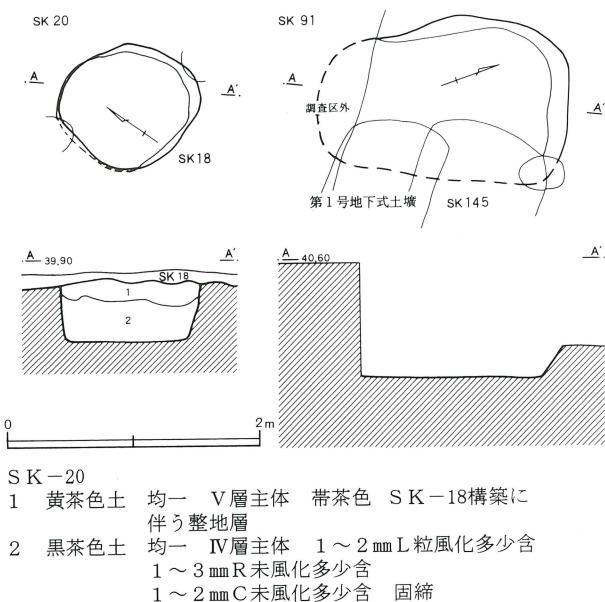
3は隆帶に沿って角押文を施す。口縁部上端にも角押文が巡らされる。雲母を含む。

4は口縁部に沿って角押文を施し、その下位には縦位に施されている。

5~7は胴部の破片である。5は幅広の隆帶を施す。沈線との間に爪形文を施す。雲母を含む。6は爪形文を施す。7は縦位に沈線文が垂下する。

8は波状の浅鉢形土器であろう。口縁部は突き出た形態をしている。内面に稜線が巡る。外面は調整の擦痕を多く残しており、内面はよく研磨されている。

第40図 縄文時代の土壙



第91号土壙

第91号土壙は、P-20グリッドから検出した。

土壙の規模は、長軸4.0m程度、短軸2.6m程度であった。

東側で第1号地下式壙、SK-145と重複していた。

遺物は、縄文土器が検出できた。

第91号土壙出土土器(第41図9~12)

前期後葉の諸磯C式が出土している。

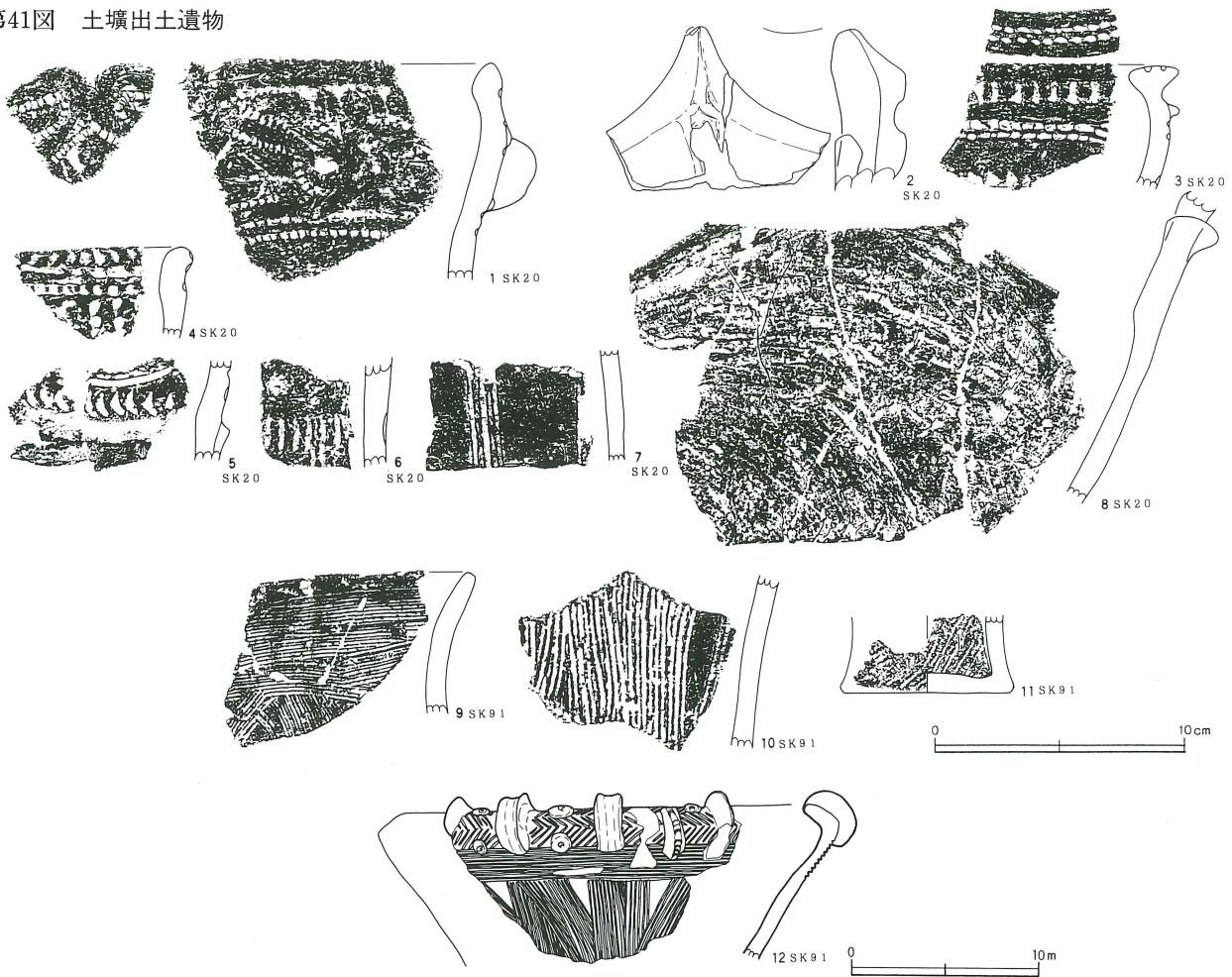
9は口縁部が緩やかに外反する形態の深鉢形土器である。外傾する口縁部には横位の集合沈線を巡らせている。その下位に弧状の集合沈線が見られる。

10は胴部の破片である。縦位もしくは弧状に集合沈線が施文される。

11は底部の破片である。底面から内傾気味に立ち上がる。縄文はLRである。

12は口縁部から胴部上半にかけての破片である。底部から口縁部近くまで外反気味に立ち上がり、口縁部が内湾する形態の深鉢形土器である。内湾する口縁部には矢羽根状に集合沈線を施す。その下位には横位に集合沈線を巡らせている。口縁部には縦長、ボタン状の貼付文を施す。胴部には縦位、弧状、矢羽根状に集合沈線を施す。1/10以下の残存度である。

第41図 土壤出土遺物



グリッド取り上げ土器(第42～48図)

第42図、第43図は加曾利E式土器である。

1はキャリパー形深鉢形土器の口縁部である。隆帯を弧状に繋いで口縁部を区画している。隆帯に沿って沈線を施し、区画内に縦位の沈線文を施している。頸部に無文帶をおく。

2はキャリパー形深鉢形土器の胴部である。縦位の隆帯が垂下する。地文にはRLの縄文を施す。

3はキャリパー形深鉢形土器の底部である。3条1組の沈線を垂下させ、沈線間を磨消部としている。縄文はRLを縦位に施す。

4はキャリパー形深鉢形土器の文様構成をとる土器で、口縁部が直立気味に立ち上がる単純な形態の深鉢形土器である。口縁部には楕円形の区画文を施す。胴部は縦位の沈線を垂下し、幅広の無文部をおく。縄文はRLである。

5は曾利系の深鉢形土器である。底部の破片で、縦位の条線文がみられる。

第43図1は底部から丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位で緩く括れ、口辺部近くで強く張り、口縁部が内湾する形態の土器である。微隆起線文で文様を区画する。口縁部に微隆起線文を巡らせ、要所には突起を施す。この突起下から縦位の楕円区画を垂下させ、4単位に配すのであろう。楕円区画の間にはW状のモチーフをおいている。胴部には逆U字状のモチーフを施す。口辺部の文様とは整合せず、6回繰り返される。区画内にはRLの縄文を施す。縄文の施文は微隆起線上にかかっている。全体の約2／3が残存する。後期初頭段階の土器であろう。

第44図1～14は勝坂式である。

1は口縁部や隆帯に沿って爪形文を施す。三叉文がみられる。2は楕円区画内部に角押文を施す。隆帯

上あるいはこれに沿って爪形文を施す。

3は沈線文、爪形文を施す。4は隆帶に沿って爪形文を施す。5は口縁部を無文とする土器で、爪形文を施す隆帶を胴部文様との境に巡らせる。6は底部近くの破片である。隆帶上に爪形文、胴部の沈線区画内に爪形文、三叉文を施す。底部近くは隆帶により肥厚させ、横線を施す。7は隆帶により口縁部に区画文を施す。隆帶上には爪形文、区画内部には沈線文、角押文を施す。8は胴部破片で、刺突を施した隆帶を曲線的に配す。9は口縁部近くの破片で、沈線により三叉文、渦巻文を施す。

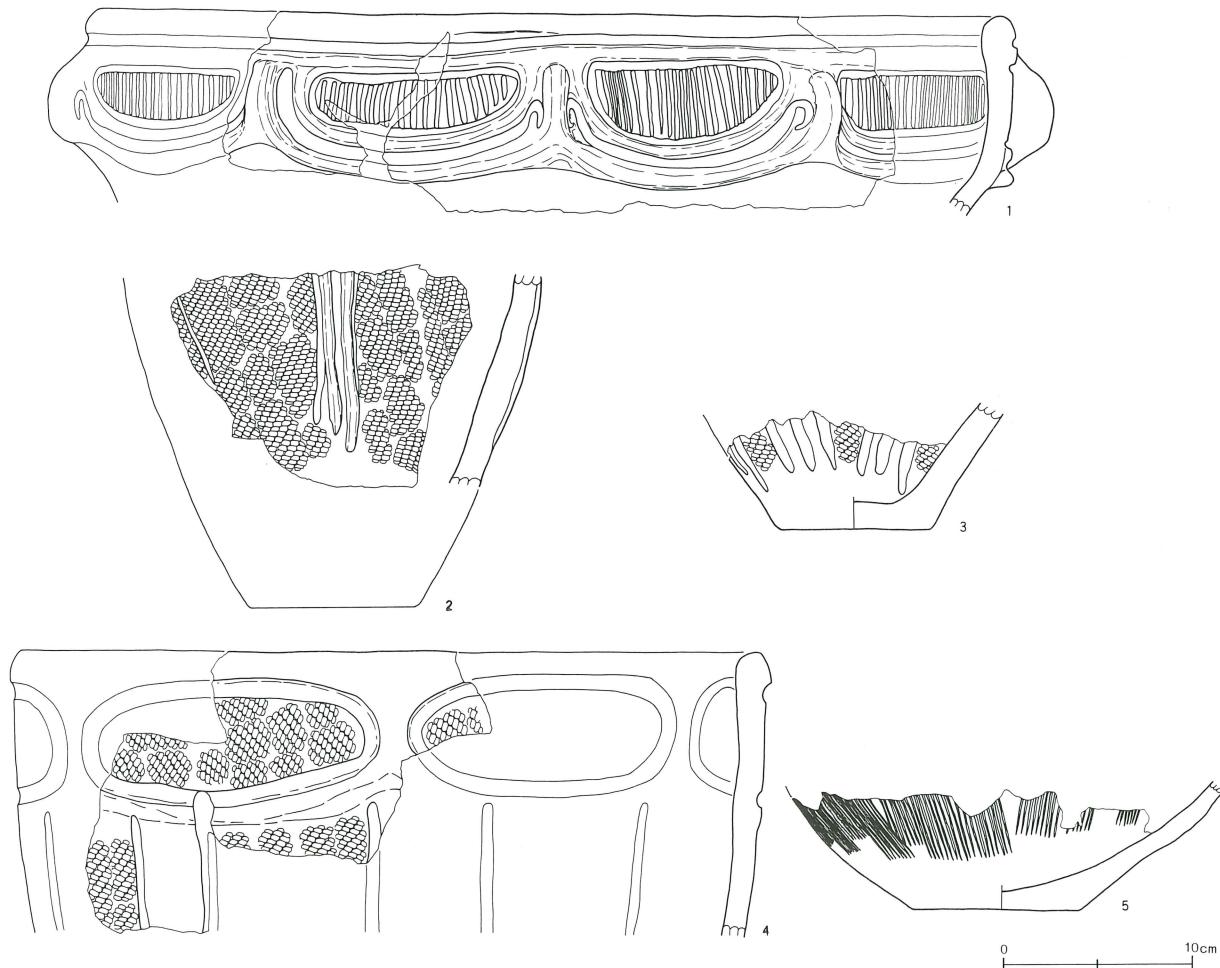
10はキャリパ一形の形態の深鉢形土器である。口縁部には爪形文、蛇行する隆帶等を施す。胴部文様との境には隆帶、刺突を巡らせる。胴部にはLの撚糸文を施す。11は刻み、円文等を施す。12は口縁部が内湾す

る形態の土器で、縦位の隆帶を貼付する。13は内湾する形態の土器で、口縁部に鋸歯状の沈線文を巡らせる。14は渦巻文を施す。胴部の境には沈線、刺突文を巡らせ、胴部には縄文を施文する。縄文はRLである。15は口縁部に円形の把手を施す。

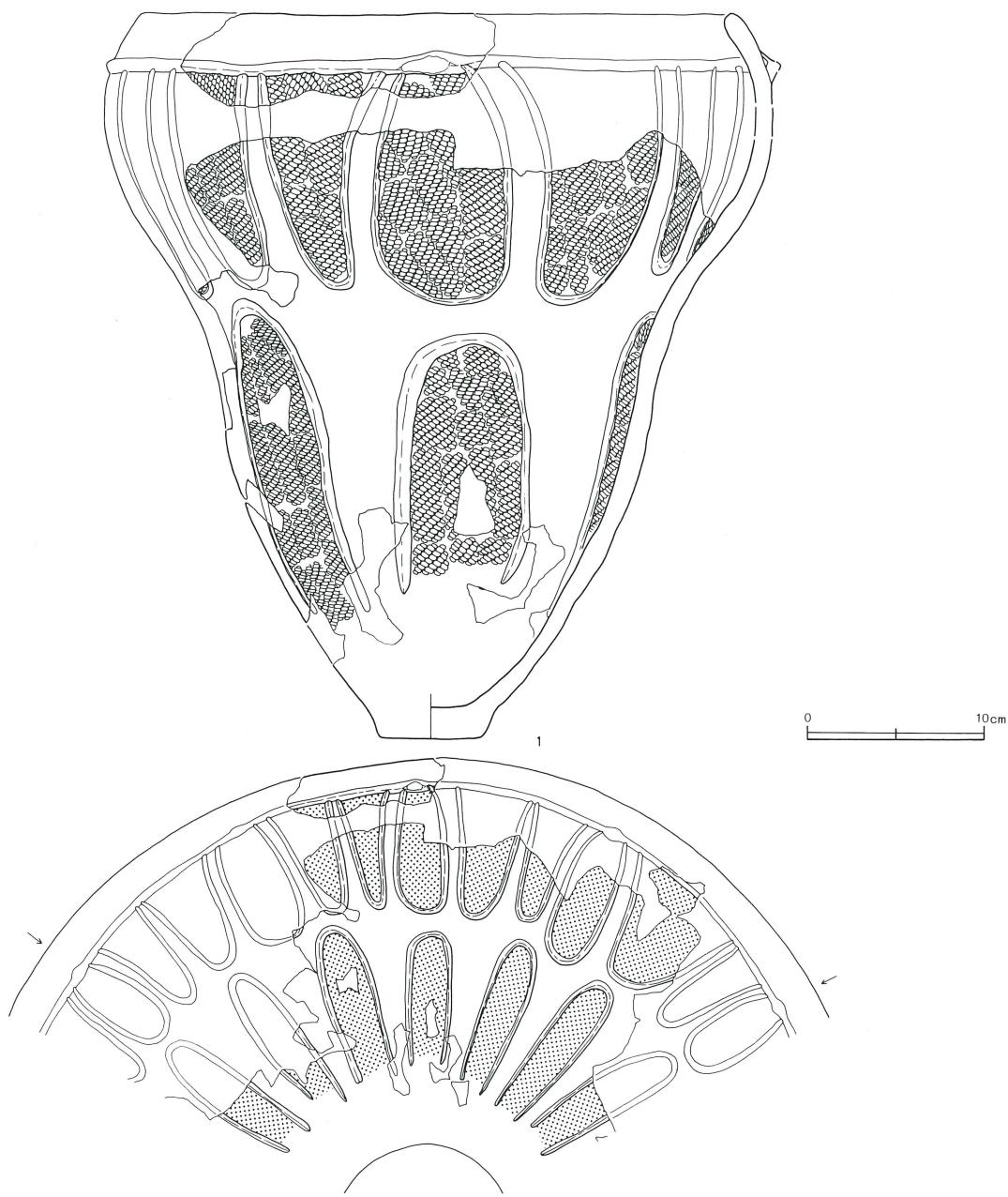
第44図16～25は阿玉台式である。胎土には雲母を含んでいる。16は扇状の把手の部分である。波状沈線、角押文を施す。17は横位に隆帶、角押文が巡る。18は波状の沈線文を施す。19は隆帶、角押文を施す。20、23は波状沈線、21、22は角押文を施す。24は隆帶の口縁部区画に沿って、刺突文を施す。25は浅鉢形土器である。上端が円形で平坦な突起を施す。渦巻状に角押文を施す。

第44図26～38、第45図、第46図は加曾利E式のキャリパ一形深鉢形土器である。加曾利E I式からE III式

第42図 グリッド取り上げ遺物(1)



第43図 グリッド取り上げ遺物(2)



を含んでいる。

第44図26～38は口縁部の破片である。口縁部文様帶に隆帯を多用している。26は隆帯上に横S字状のモチーフを施し、横位に波状沈線を施す。27は横S字状の隆帯、28、29はクランク状の隆帯を施す。30、31は同一個体である。胴部文様との境に隆帯を巡らせ、部分的に点列を施す。32、34～37も隆帯と縄文施文による口縁部文様を施す。33は口縁に隆帯を巡らせ、その下位に撚糸文を施す。38は区画内に縦位の沈線文を施し、頸部との境に交互刺突文を巡らせる。縄文は

26～32、35～37がR L、33、34がLの撚糸文を施す。

第45図1～14は口縁部の破片で、口縁部文様帶に楕円区画文等を施す。

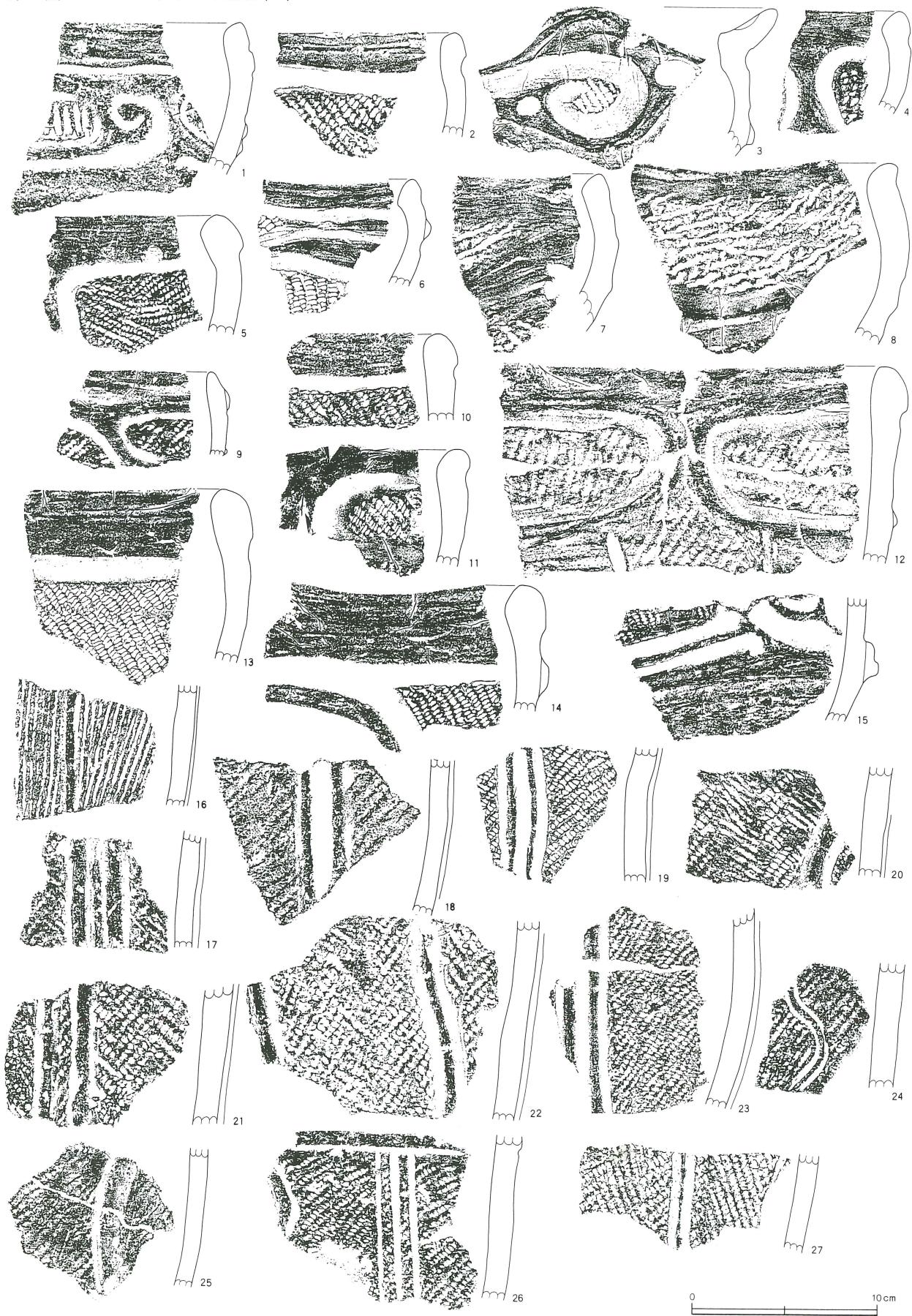
1は楕円区画内に縦位の沈線を施す。横S字状の沈線を施す。2、4～6、9～14は楕円区画内に縄文を施す。3は山形の波状部である。7、8は同一個体である。並行するナゾリにより隆帯を作出している。12は第42図4と同一個体である。縄文は2～6、9～14がR L、7、8はLを施す。

第45図15は頸部の破片で、無文帯をおく。隆帯によ

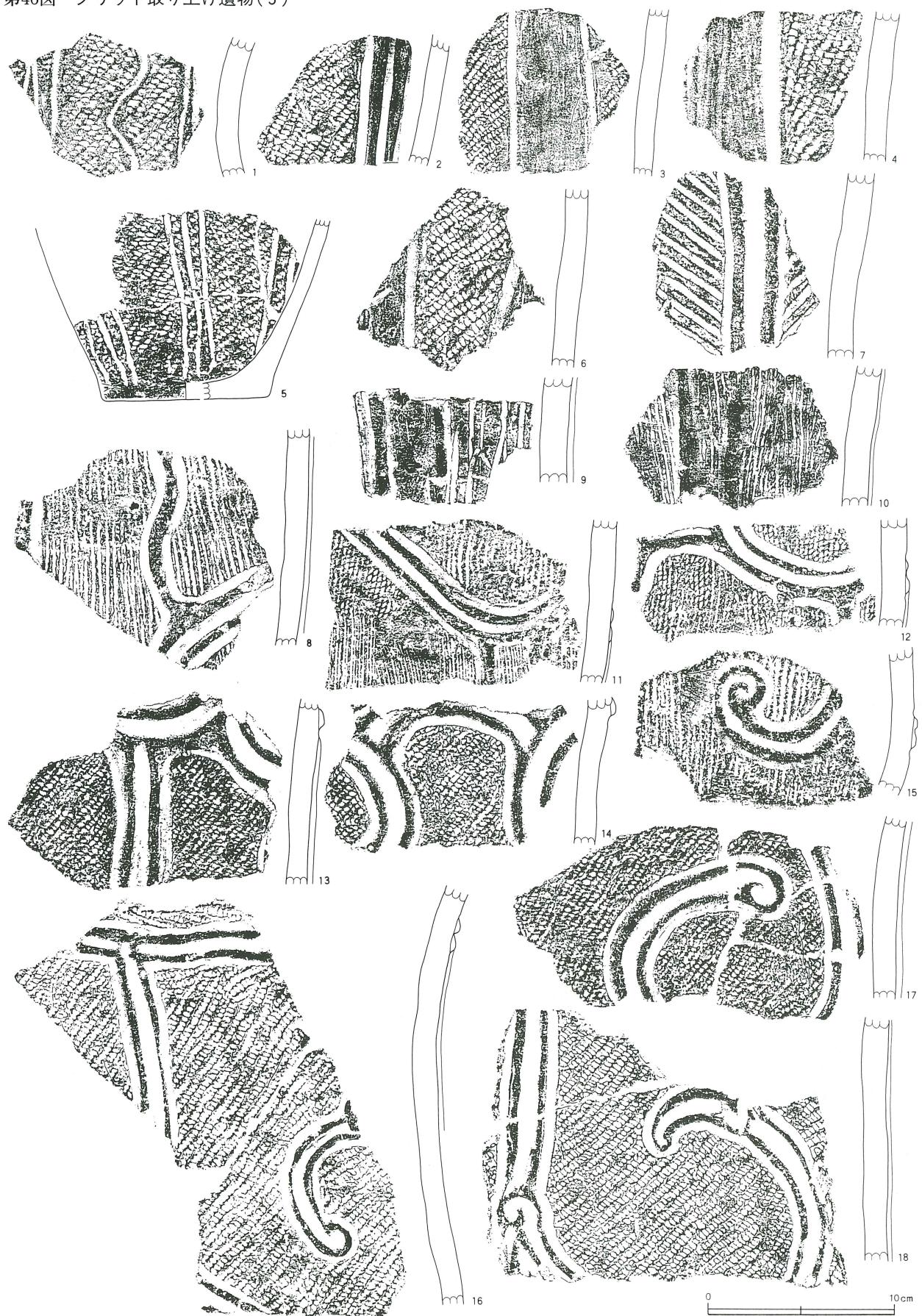
第44図 グリッド取り上げ遺物(3)



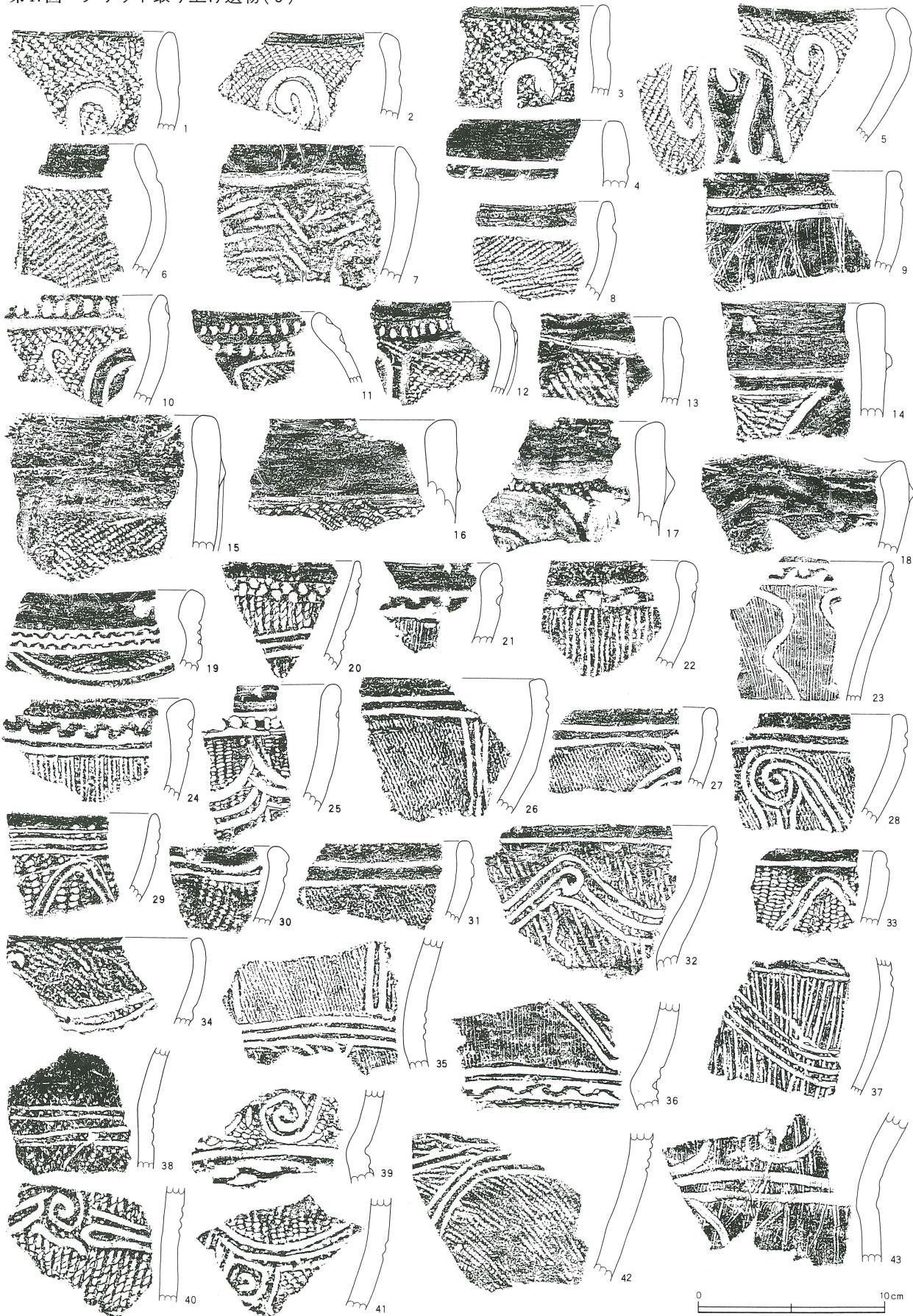
第45図 グリッド取り上げ遺物(4)



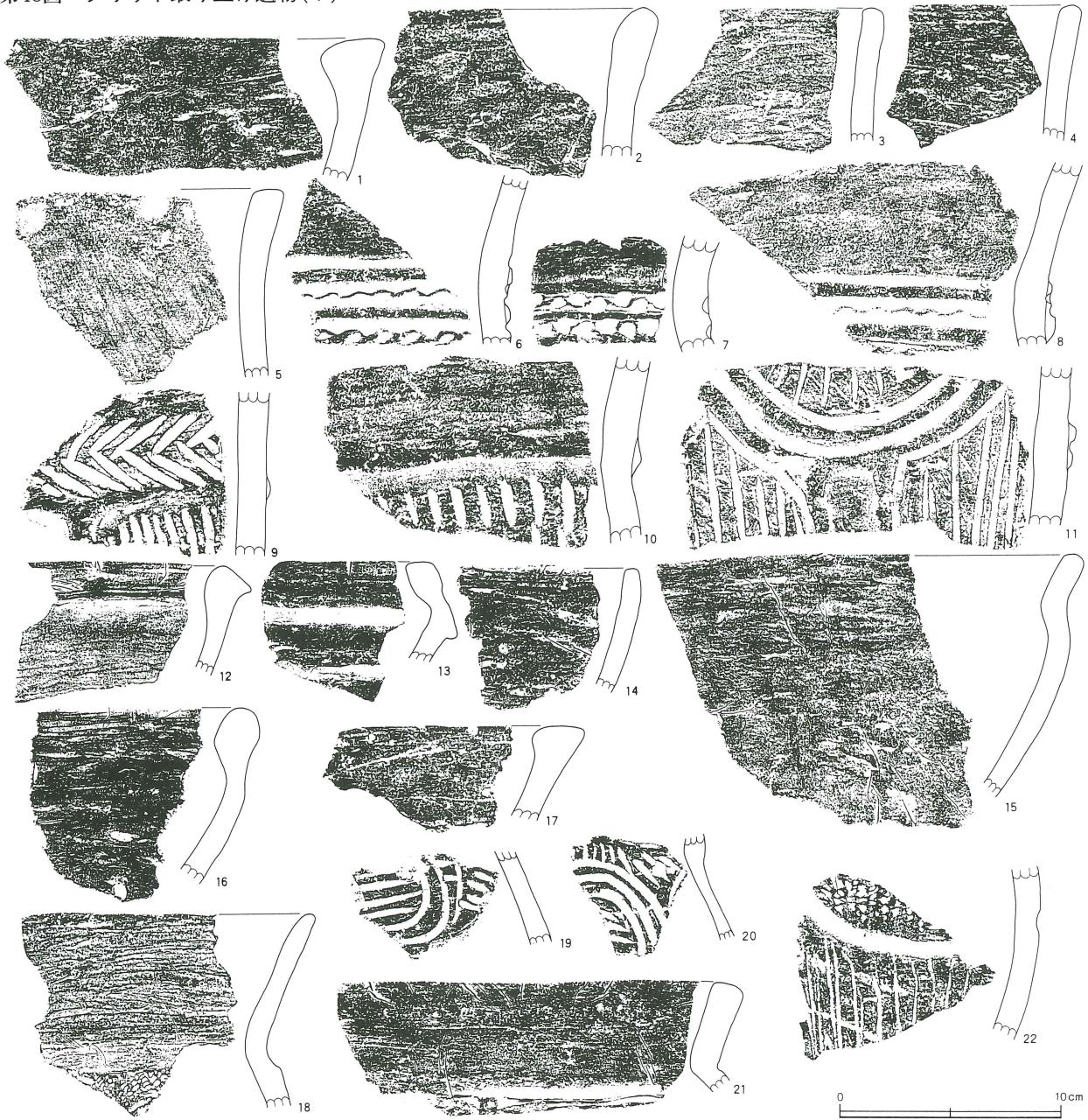
第46図 グリッド取り上げ遺物(5)



第47図 グリッド取り上げ遺物(6)



第48図 グリッド取り上げ遺物(7)



る口縁部区画内にRLの縄文を施す。

第45図16～23、25、第46図10は胴部の破片で地文縄文上に隆帯を垂下する。16、10はLの撚糸文、17、19、23、25はRLを施す。20はRLとL、21、22はRLとLRにより、羽状縄文を施す。21、22は同一個体である。

第45図24、26、27、第46図5は胴部から底部の破片で地文上に沈線文を垂下させる。24、26、5はRLの縄文、27はRLとLRの縄文を羽状に施す。

第46図2～4、6は磨消縄文を垂下させる。縄文は

RLである。

第46図7、9は曾利系の土器である。隆帯を垂下し、7は矢羽根状の沈線、9は縦位の沈線を施す。

第46図8、11～18は胴部に曲線的な隆帯を施文する。8、11、12、15はLの撚糸文、13、14、16～18はRLの縄文を地文に施す。

第47図1～18は加曾利E III式の深鉢形土器である。15、16など一部は後期初頭の可能性がある。

1～3、5は蕨手状の沈線文を施す。縄文はRLである。

4、6～9、13は口縁部に沈線を巡らせる土器である。地文に6はRL、7、13はL、8はLRの縄文、9は条線文を施す。

10～12は口縁部に刺突列を巡らせる。10、11は沈線文、12は微隆起線文を体部に施す。縄文はいずれもRLである。

14～18は口縁部に微隆起線文を巡らせる土器である。14～17は平口縁、18は緩い波状縁である。14、16、17はRL、15はLRの縄文を施す。

第47図19～43は連弧文系の深鉢形土器である。

19～24は口縁部に交互刺突文を巡らせる。地文に19はRLの縄文、20はL、22はRの撚糸文、21、23は条線文を施す。

25は口縁部に沈線と刺突を巡らせる。縄文はRLである。

26～31は2条、32、33は1条の沈線文を口縁部に巡らせる。地文は26～28、31、32がLの撚糸文、29、30、33がRLの縄文を施す。26～28、31、35は同一個体である。

35～43は括れ部、胴部の破片である。35、37、43は沈線、36、39は交互刺突文を括れ部に巡らせている。地文は35、40がLの撚糸文、38、39、41、42がRLの縄文、36、37、43は条線文を施す。

第48図1～11は胴部が張り、無文の外傾する口縁部を有する深鉢形土器である。

1～5は無文の口縁部である。

6～8は括れ部の破片である。いずれも交互刺突文を巡らせている。

9～11は胴部の破片である。9は括れない形態であろうか。無文部との境に矢羽根状の沈線文を施す。10は無文部との境に隆帯を施す。11は隆帯を曲線的に配し、縦位の沈線を施す。

第48図12～15は無文の浅鉢形土器である。各種の形態を含む。

第48図19、20は口縁部が外傾する浅鉢形土器であろう。頸部の破片で、沈線文を施す。

第48図18、21、は両耳壺であろう。18、21は外傾す

る口縁部の破片である。22は胴部の破片で、沈線の区画内にはRLの縄文を施す。胴下半には縦位の沈線を施す。

グリッド取り上げ石器(第49～52図)

1はドリルで、石材は黒曜石が用いられていた。三角錐型の一面両側縁に押圧剥離によって刃部が形成されていた。

2は石鎌で、石材は安山岩が用いられていた。脚の一部が欠損していた。表面は著しく風化し、脚の欠損箇所も風化していた。

3は石鎌で、石材は黒曜石が用いられていた。脚の一部が欠損していた。背面の一部に主要剥離面が認められた。

4は石鎌で、石材は安山岩が用いられていた。背面には主要剥離面が大きく残っていた。脚部を片方欠損し、欠損面は風化していた。

5はドリルで、石材は安山岩が用いられていた。主要剥離面と打点を残し、刃部の断面は調整剥離により菱形を呈していた。

6はK-23グリッドから検出した。短冊形で石材はフォルンフェルスであった。風化が著しかった。

7はM-23グリッドから検出した。短冊形で表中央に大きく自然面を残していた。刃部は両面からの加工により直刃であった。全体に大きく反っていた。石材は砂岩であった。

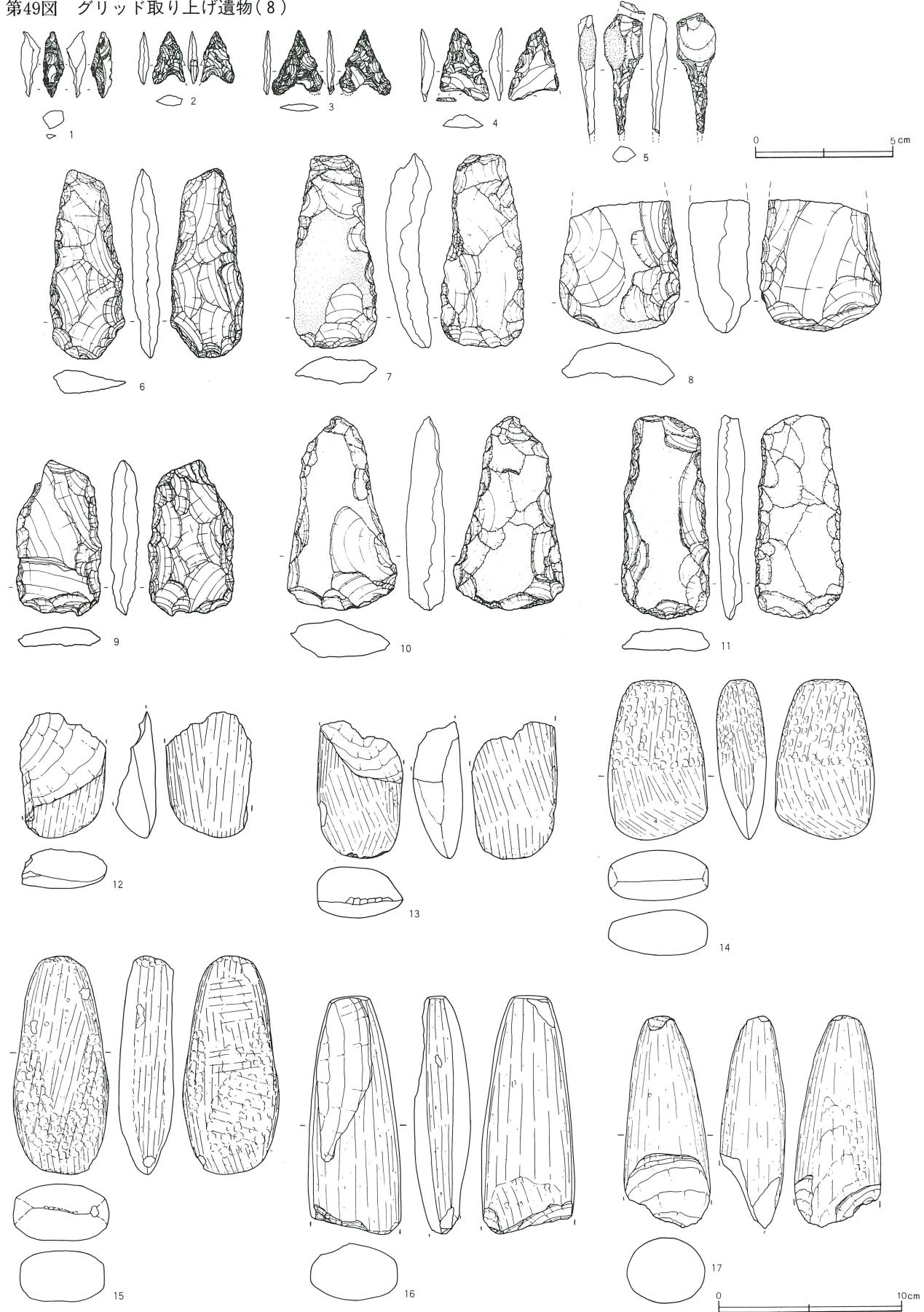
8はM-23グリッドから検出した。短冊形で基部を大きく欠損していた。中央部から刃部に自然面を残していた。刃部は片面からの加工により円刃となっていた。石材は砂岩であった。

9は表土から検出した。撥形で基部を欠損していた。刃部は両側からの加工による直刃であった。石材はフォルンフェルスで風化が著しかった。

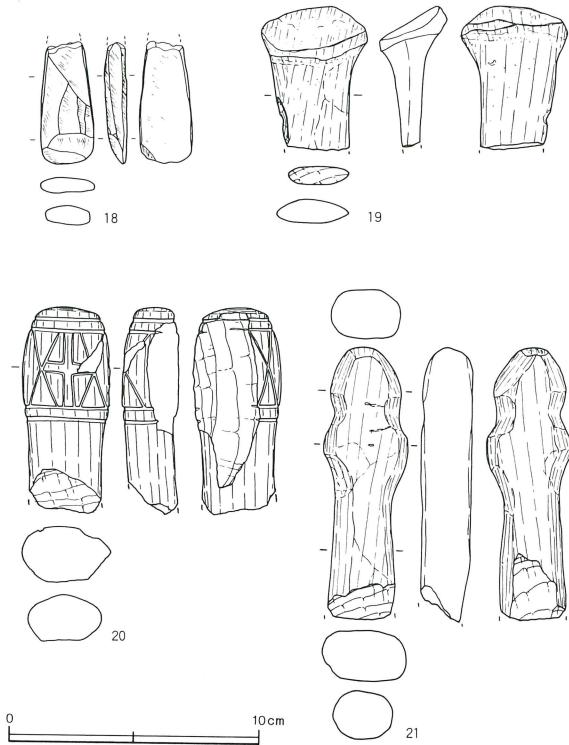
10はI-24グリッドから検出した。撥形で両面とも自然面を残していた。刃部は両側から加工されており、円刃であった。石材は安山岩であった。

11はH-24グリッドから検出した。短冊形で表に自然面を大きく残していた。刃部は円刃で石材はフォル

第49図 グリッド取り上げ遺物(8)



第50図 グリッド取り上げ遺物(9)



ンフェルスであった。

12は磨製石斧の刃部で、石材は鮮緑岩であった。欠損面は風化しており使用にともなう欠損と考えられた。刃部にわずかな刃こぼれが認められ、線条痕は不明瞭。

13は磨製石斧で、石材は鮮緑岩であった。上半を欠損していた。側面に敲打痕が認められ、表面には顕著な線条痕が認められた。

14は磨製石斧で、石材は緑泥片岩であった。中央部から上は敲打痕が顕著に認められ、それ以下では多少残る程度であった。下半部の線条痕は顕著であった。

15は磨製石斧で、石材は安山岩であった。全面に敲打痕が認められ、刃部、側面、中央部では、敲打痕がやや不明瞭。中央部分では横位の線条痕が顕著。

16は磨製石斧で、石材は緑泥片岩であった。刃部と基部の一部を欠損していた。刃部背面の欠損面には線条痕が認められた。

17は磨製石斧で、石材は緑泥片岩であった。刃部を大きく欠損し、基部もわずかに欠損していた。側縁は平滑で、表裏面には敲打痕と線条痕が認められた。

18は小型磨製石斧で、石材は蛇紋岩であった。基部

を欠損していた。刃部は裏側に偏っており、線条痕が顕著に認められた。

19は石剣の基部で、石材は蛇紋岩であった。基部には顕著な線条痕がみとめられ、それ以外の部分には認められなかった。

20は石棒の先端部で、石材は緑泥片岩であった。全体に平滑で、裏面は大きく剝落していた。先端は平面であった。

21は石棒の上半部で、石材は緑泥片岩であった。側面はやや丸みを帯び、表裏面は平坦に仕上げられていた。線条痕や敲打痕は不明瞭であった。

22は表土から検出した。両側面に顕著な敲打痕とこれによる凹みが認められた。また、上下端部に敲打痕が認められた。石材は安山岩であった。

23は表土から検出した。両面に凹みが認められた。一部が被熱によって黒変していた。石材は安山岩であった。

24はK-23グリッドから検出した。両面側面に凹みが認められた。被熱しており、黒色に変色していた。石材は安山岩であった。

25はK-23グリッドから検出した。敲打痕が認められ、使用により面が形成されていた。表面は風化が著しく、擦痕などは認められなかった。石材は砂岩であった。

26はG-24グリッドから検出した。両面に凹みを持っていた。石材は角閃石安山岩であった。

27は表土から検出した。両面ともに凹みが認められ、側面が敲打によって抉られていた。上下端にも敲打痕が認められた。

28は表土から検出した。両面に凹みが認められ、両側面に敲打痕が認められた。両側縁の敲打痕はやや未風化であった。石材は安山岩。

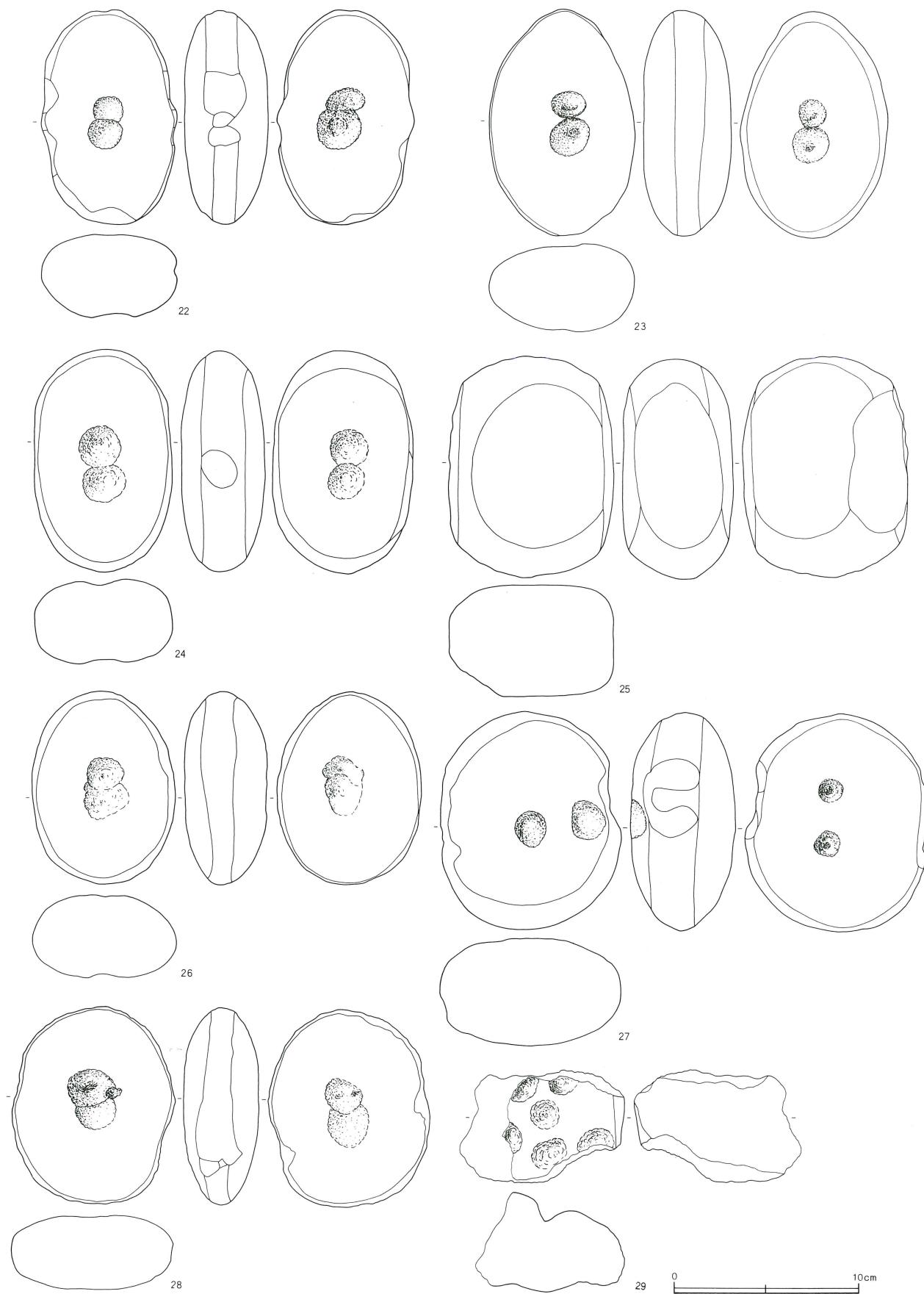
29~35は全て石皿の欠損品である。全体の形状は不明瞭であった。

30、31は被熱によって変色していた。

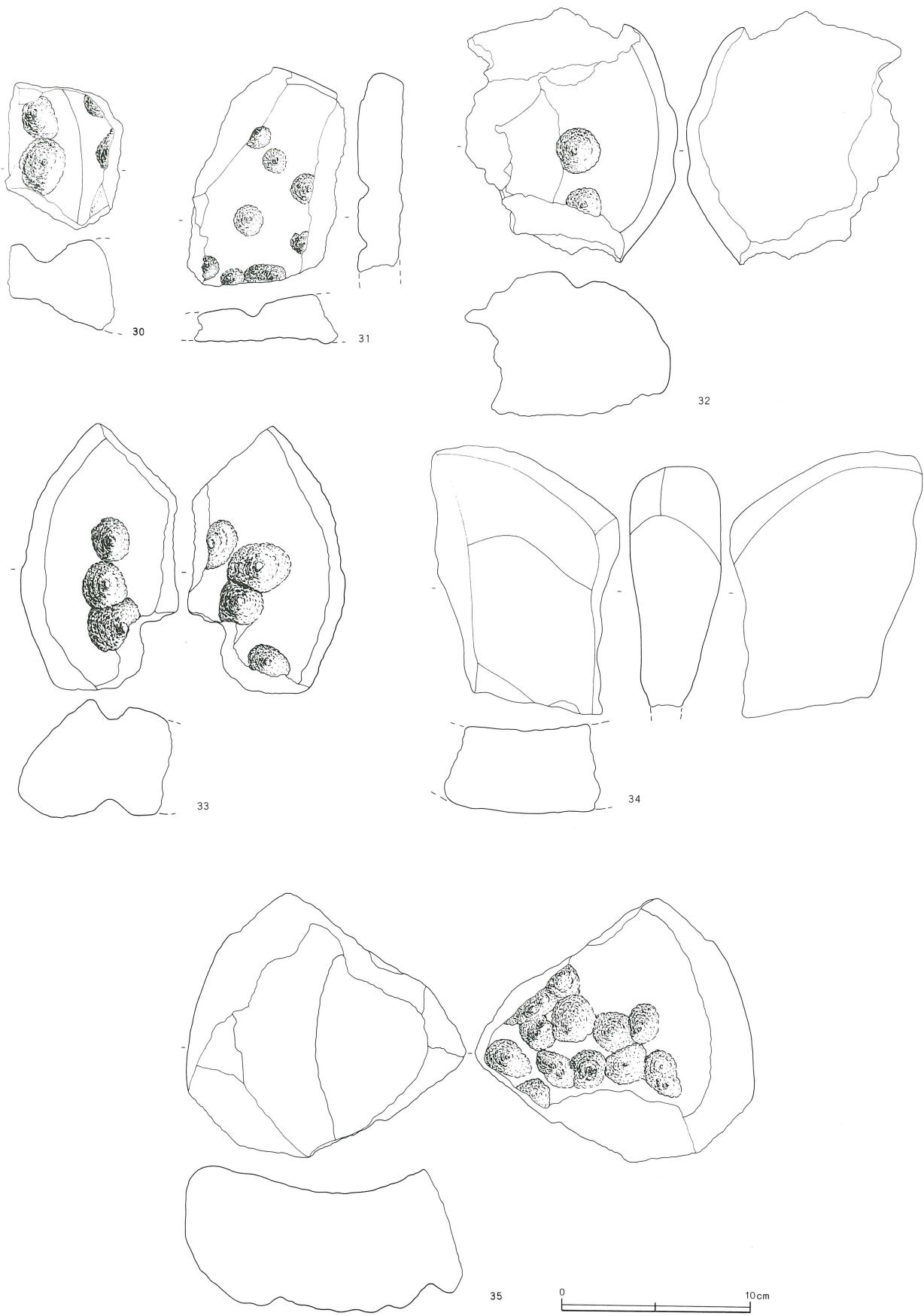
29・30・32~35の石材は多孔質安山岩であった。

31の石材は片岩であった。

第51図 グリッド取り上げ遺物(10)



第52図 グリッド取り上げ遺物(II)



古代以降の遺構と遺物

竪穴状遺構

いわゆる竪穴状遺構と考えられる遺構が、1軒検出できた。

第1号竪穴状遺構(第53図)

第1号竪穴状遺構は、M-22グリッドを中心として検出した。

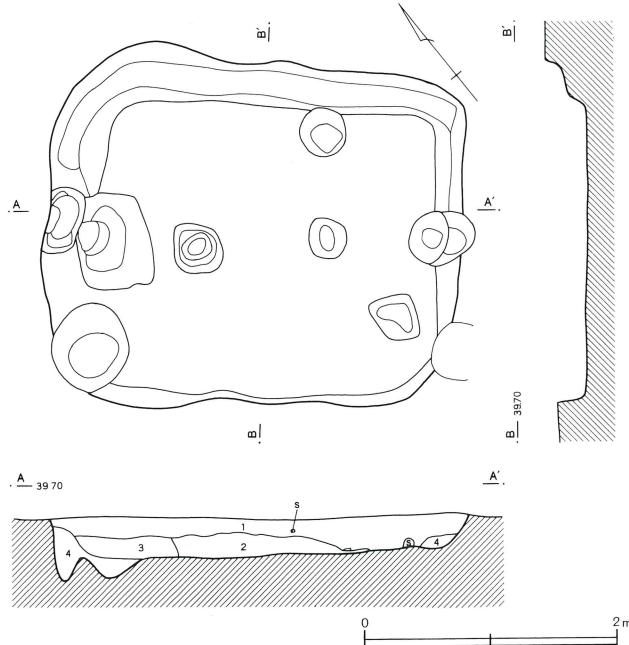
平面形態は、長軸3.3m程度、短軸3.0m程度の隅丸方形を呈しており、確認面から床面までの深さは35cm程度であった。

床面の確認状況は、明瞭であった。

竪穴状遺構の北東側の壁から北西側の壁の一部には、床面からの高さ15cm、幅20cm程度のテラス状の部分が作り付けられていた。

ピットは、9本程度を確認することができたが、この中で明瞭に竪穴状遺構にともなうと考えられたのは、長軸と壁の交点に作られた2本のみであった。残りのピットについては、竪穴状遺構との同時性を明らかにすることはできなかった。

第53図 第1号竪穴状遺構



第1号竪穴状遺構

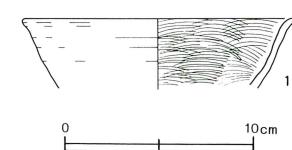
- | | | | | | |
|---|------|-----|-------|-------------------------------|--------------|
| 1 | 灰茶色土 | 均一 | IV層主体 | 1~5mm Lやや風化少含
2~5mm C未風化少含 | 1~2mm R未風化多含 |
| 2 | 灰茶色土 | 不均一 | 1層同 | 1~20mm L風化多含
20~30cm粘土塊風化含 | |
| 3 | 灰茶色土 | 均一 | 1層同 | ややL太多含 | |
| 4 | 灰茶色土 | 不均一 | 1層同 | 5~30mm未風化L多少含 | |

第1号竪穴状遺構出土遺物(第54図)

椀が1点検出できた。

第54図

1は、内面に磨きと黒色処理を施した、椀の1/8程度の微細な破片であった。



外面も黒色を呈していた。

住居跡

古代以降の住居跡は、5軒検出できた。

II区の北側から製鉄炉と鉄滓の包含層が検出されていたので、製鉄と関連する工房あるいは工人の住居跡の可能性が当初から想定できた。

時期の決定と製鉄関連遺物の共伴に関して注意を払ったが、出土土器も少なく、製鉄関連遺物の検出にも至らなかった。

第3号住居跡(第55図)

第3号住居跡は、N-22グリッドを中心として検出した。

住居跡は東側ではSK-15、51と重複し、西側ではSK-40、55~57と重複していた。

平面形態は、長軸4.0m程度、短軸2.5m程度のやや不定な方形を呈しており、確認面から床面までの深さは30cm程度であった。

床面の確認状況は、やや明瞭であった。

壁溝は検出できなかった。

住居跡の床面からは、炭化物や焼土が検出されたが、明瞭な炉址やカマドは検出できなかった。

第3号住居跡出土遺物(第56図)

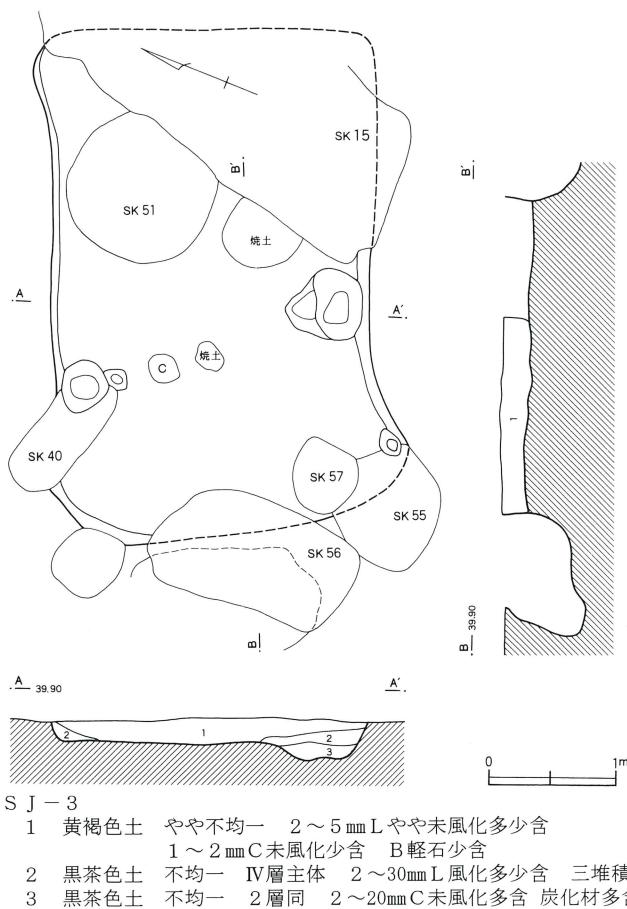
遺物は羽窯が2点検出できた。

1は覆土から取り上げたもので、鍔部は胴部に対して明瞭な沈線で画され、更に摘み込まれた上に、端部に明瞭な面を持っていた。

口唇端部には、中央に窓み状の沈線が認められ、胴部には、ヘラケズリが認められた。

2も覆土から取り上げたもので、1と異なり、鍔は明瞭な段で胴部から画されておらず、形態的にやや連続的であった。

第55図 第3号住居跡



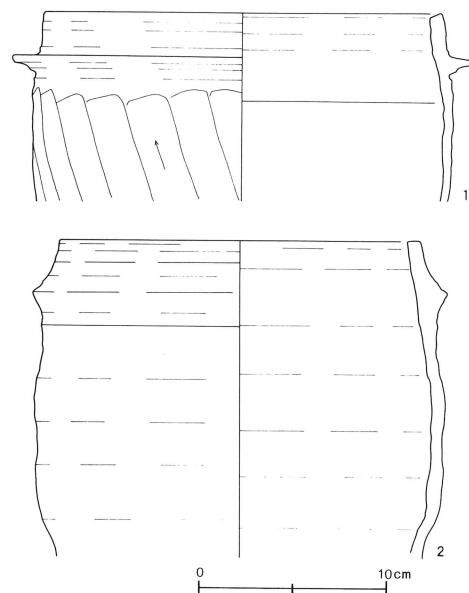
鍔には端面が認められなかつた。

口唇端部には、僅かな窪みが部分的に認められた。

胴部にも1の様なヘラケズリは施されていなかつた。

1と2の羽窓を比較すると、1は全体に端正な作りであり、2は、全体に鈍い作りとなつてゐた。特に鍔の部分でこのような違いが顕著であつた。

第56図 第3号住居跡出土遺物



第7号住居跡(第57図)

第7号住居跡は、M-22グリッドを中心として検出した。

住居跡は、南側ではSK-50と、中央部分ではSK-48、89、151と重複し、北側ではSK-166と重複していた。

壁は東西のコーナー部分を除いては不明瞭であった。

平面形態は、長軸2.9m程度、短軸2.8m程度の方形を呈しており、確認面から床面までの深さは、平均で15cm程度であった。

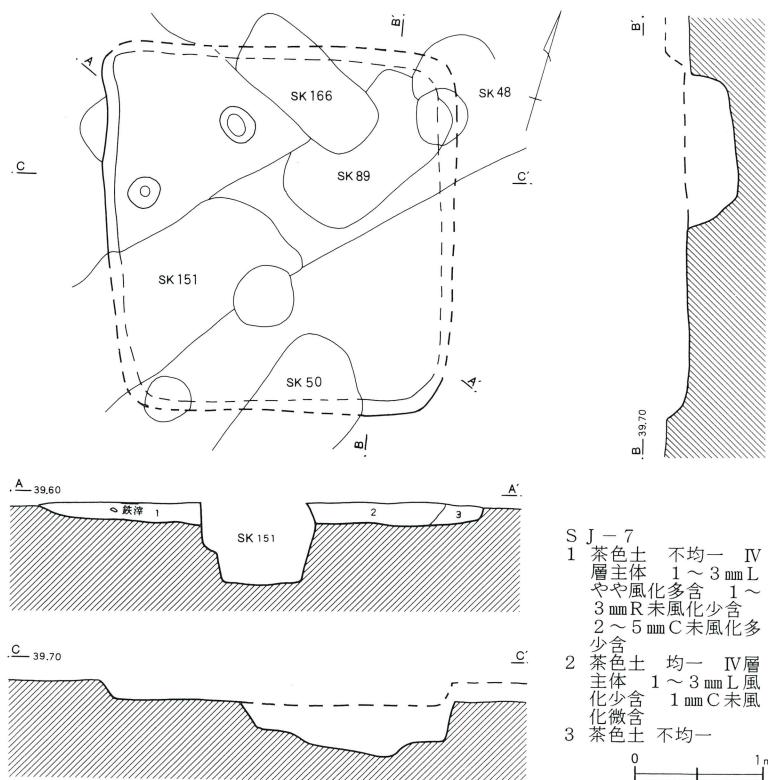
床面の確認状況は、明瞭であった。

壁溝とカマドは確認できなかつた。

第7号住居跡出土遺物

住居跡の覆土には、鉄滓が含まれていたが、他の遺物は検出できなかつた。

第57図 第7号住居跡



第8号住居跡(第58図)

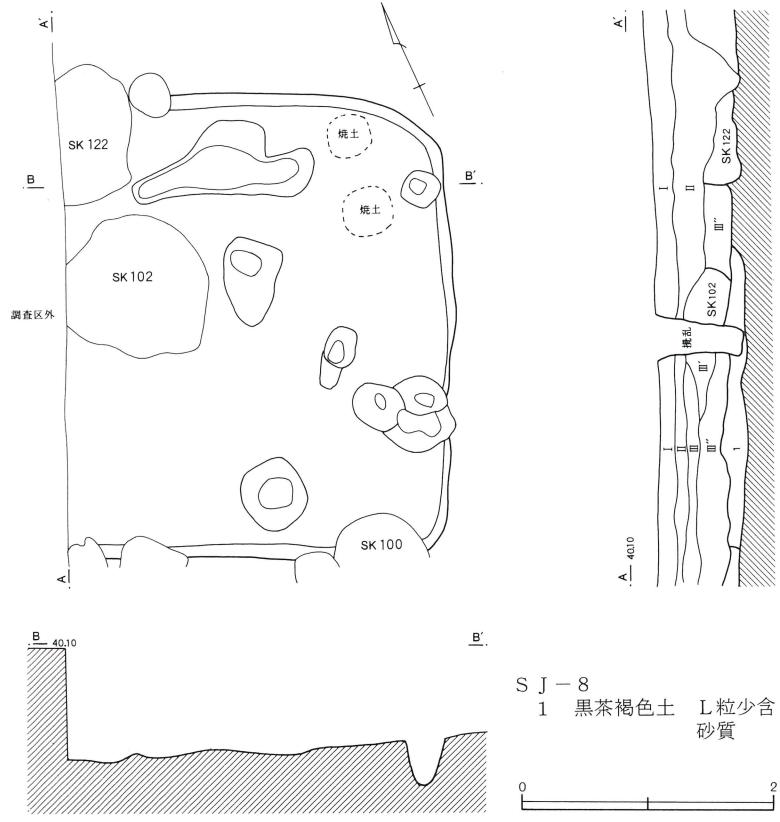
第8号住居跡は、L-22グリッドを中心として検出した。

住居跡の西側は、調査区の境界にかかり完掘できなかった。

住居跡は、北側ではSK-102、122と重複していた。平面形態は、長軸3.6m程度、短軸3.3m程度の方形を呈しており、確認面から床面までの深さは5~10cm程度であった。

床面の確認状況は、やや不明瞭であった。

第58図 第8号住居跡



第9号住居跡(第60図)

第9号住居跡は、M-23グリッドを中心として検出した。

住居跡の東側は、調査区の境界にかかり完掘できなかった。

住居跡は、北側ではSK-116、SE-2と重複していた。平面形態は長軸4.5m程度、短軸3.0m程度の方形で、確認面から床面までの深さは20cm程度であった。壁溝は確認できなかった。

壁溝は確認できなかった。

カマドも確認できなかつたが、北東側のコーナー部分の2ヶ所の床面から径30cm程度の焼土を検出した。

これらの焼土については、カマドの痕跡とは考え難く、更に、工房の施設の痕跡とする具体的な根拠も見いだし得なかつた。

ピットは7本程度検出できたが、住居に明瞭にともなうものかどうかの確認はできなかつた。

第8号住居跡出土遺物(第59図)

遺物は皿と椀を1点ずつ検出した。

1は内面に磨きが施され、更に黒色処理された、1/8程度の皿の破片であった。器肉は薄く、端部は端正に仕上げられていた。外面はやや風化し、口縁部のヨコナデと体部の螺旋状のヨコナデの境界は、やや明瞭であった。

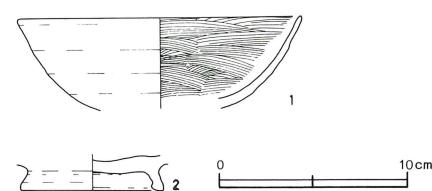
胎土には、角閃石を多少含んでいた。

2も、1同様に内面に磨きが施された椀の高台部から底部の破片であった。黒色処理は施されていなかつた。

胎土には、やや大きめの片岩粒、チャート粒、角閃石を含んでいた。

1、2ともに覆土で取り上げた。

第59図 第8号住居跡出土遺物



カマドは住居跡の南側より確認でき、壁に直行しておらず、住居跡の南側コーナー部に設営されていた。

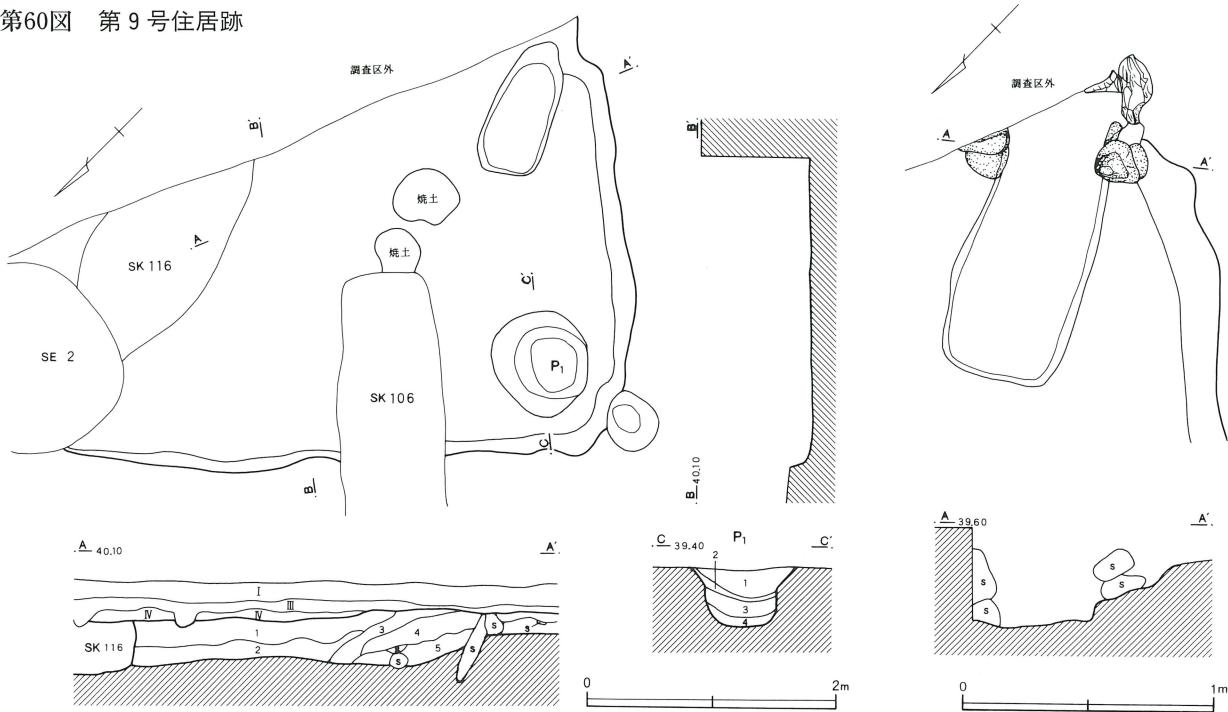
天井部や煙道は確認できなかつた。

袖も遺存していなかつたが、袖の心材と考えられる石が両袖の位置から検出できた。

第9号住居跡出土遺物(第61図)

遺物は、中世土壙からの混入品と考えられる完形のかわらけが2点、1/8程度の破片のかわらけを1点検出した。

第60図 第9号住居跡



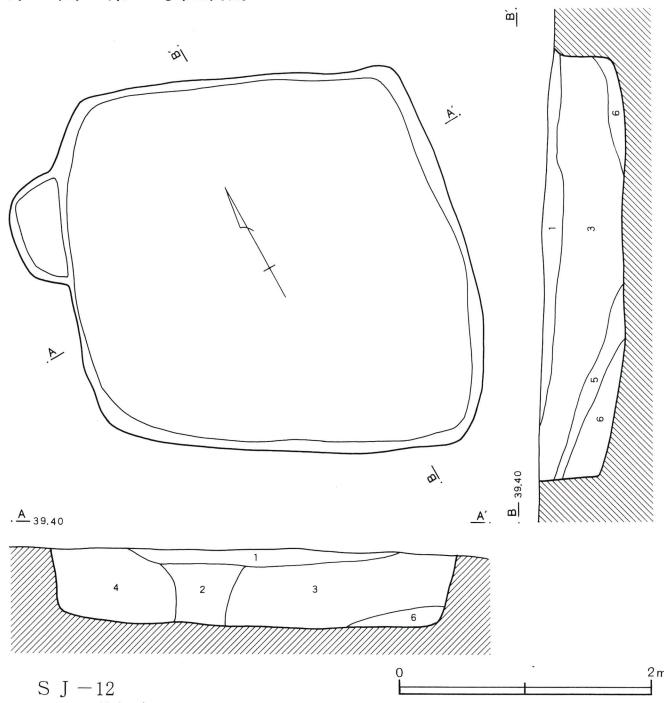
S J - 9

- | | | |
|---------|-----------------|---------------|
| 1 黒褐色土 | 2 ~ 5 mm L粒少含 | R · C少含 砂質 締無 |
| 2 黒褐色土 | 2 ~ 5 mm L粒多含 | R多含 C少含 砂質 締無 |
| 3 黒茶褐色土 | 5 ~ 10 mm L粒多含 | R · C多含 砂質 締無 |
| 4 赤茶褐色土 | R · C · 粘土B多含 | 砂質 締無 |
| 5 赤褐色土 | R · C · 粘土B更に多含 | 弱粘性 |

S J - 9 ピット 1

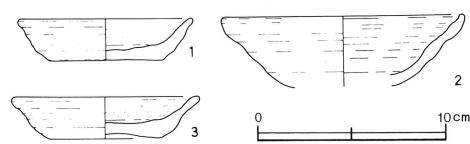
- | | |
|--------|-----------------|
| 1 黒褐色土 | C · R粒少含 砂質 締無 |
| 2 焼土層 | R層 微細R層 柔 |
| 3 黒色土 | C · R粒少含 砂質 締無 |
| 4 黄黒色土 | 3層主体 L B多含 やや固締 |

第62図 第12号住居跡



- S J - 12
- | | |
|---------|----------------------------------|
| 1 茶褐色土 | 1 ~ 2 mm H L少含 パサつく |
| 2 黒褐色土 | 10mm H L前後微含 パサつく |
| 3 黄茶褐色土 | 5 ~ 50mm H L粒 · B多含 パサつく |
| 4 茶褐色土 | 10mm H L粒多含 パサつく |
| 5 黒色土 | 20mm H L粒少含 パサつく |
| 6 黄茶褐色土 | 30 ~ 50mm H L B含 30mm暗色 L B多含 固締 |

第61図 第9号住居跡出土遺物

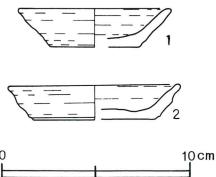


第12号住居跡(第62図)

第12号住居跡は、K-23グリッドから検出した。平面形態は長軸3.2m程度、短軸2.9m程度の方形を呈しており、床面までの深さは、60cm程度であった。床面の確認状況は、明瞭であった。壁溝とカマドは確認できなかった。覆土からは、白色未焼成の粘土塊が多数検出できたので、製鉄あるいは、鋳造の工房である可能性が考られたが、他の関連遺物は全く検出できなかった。

第63図
第12号住居跡出土遺物

遺物は、覆土からかわらけを、2点取り上げた。
中世土壤からの混入品
であると考えられた。



掘立柱建物跡

古代以降の掘立柱建物跡は、3棟検出できた。

この中で、第1号掘立柱建物跡は柱掘り方の中に板状の石材を持つものであった。

他の2棟は、平面図の遺構組み合わせの検討から設定した。

II区の調査区内には無数のピットがあった。発掘調査中に、掘立柱建物跡として確認できたのは第1号掘立柱建物跡のみであった。更に掘立柱建物跡が見いだされると考えられる。

第1号掘立柱建物跡(第64図)

第1号掘立柱建物跡は、O-21グリッドから検出した。

建物跡は、北西側ではSK-13と北東側ではSK-59と重複していた。

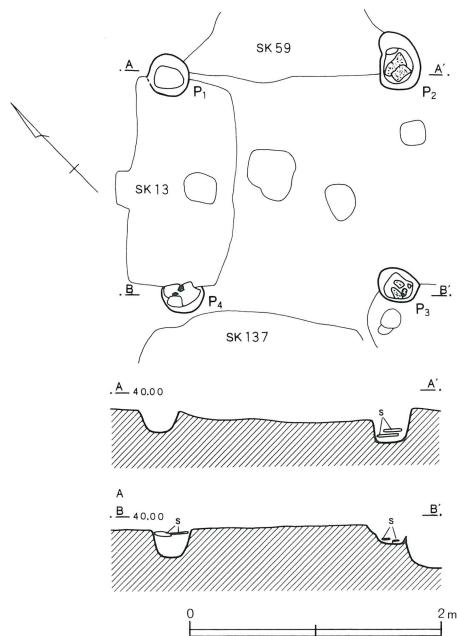
規模は、桁行き1間×梁行き1間で、軸方位はN-43°-Wであった。

P2、P3、P4からは、底面からやや浮いて板状の片岩が検出できた。

遺構確認面での観察では、柱掘り方と他の多数のピットとの間には、覆土の明瞭な違いが認められなかった。

遺物は検出できなかった。

第64図 第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡(第65図)

第2号掘立柱建物跡は、N-22グリッドから検出した。

建物跡は、北側ではSK-48、50、22と、西側ではSK-23と重複していた。

P2に該当するピットはSK-22によって、P6に該当するピットはSK-32によって、それぞれ擾乱されており、検出できなかった。

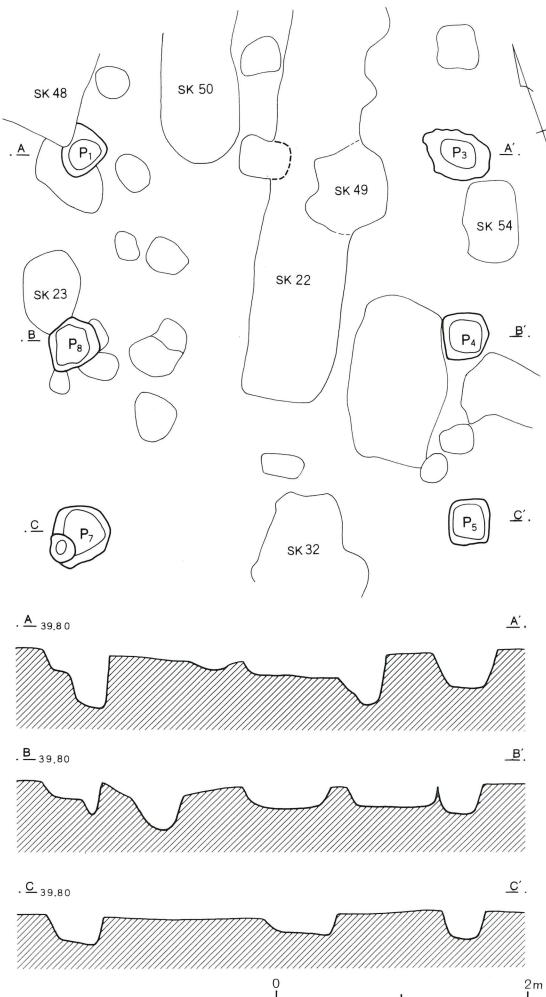
規模は、桁行き2間×梁行き2間で、軸方位はN-20°-Eであった。

各柱掘り方の平面形態は、方形に近いもの(P3、P4、P5、P8)と、円形に近いもの(P1、P7)等があった。

柱掘り方の深さは、30cm程度であった。

他のピットと、覆土に違いは認められなかった。

第65図 第2号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡(第66図)

第3号掘立柱建物跡は、O-22グリッドから検出した。

建物跡は、北側ではSK-45、43と、東側ではSJ-3、SK-40、56、70と、南側ではSK-66、52と、中央付近では、SD-1と重複していた。

P1に該当するピットは、SK-45によって、P2に該当するピットは、SK-43によって、P4に該当するピットは、SK-56によって、P5に該当するピットは、SK-70によって、それぞれ攪乱されていた。

規模は、桁行き3間×梁行き2間で、軸方位はN-18°-Eであった。

各柱掘り方の平面形態は、P6とP8の底面形態が方形で、P3、P7、P9、P10が円形であった。

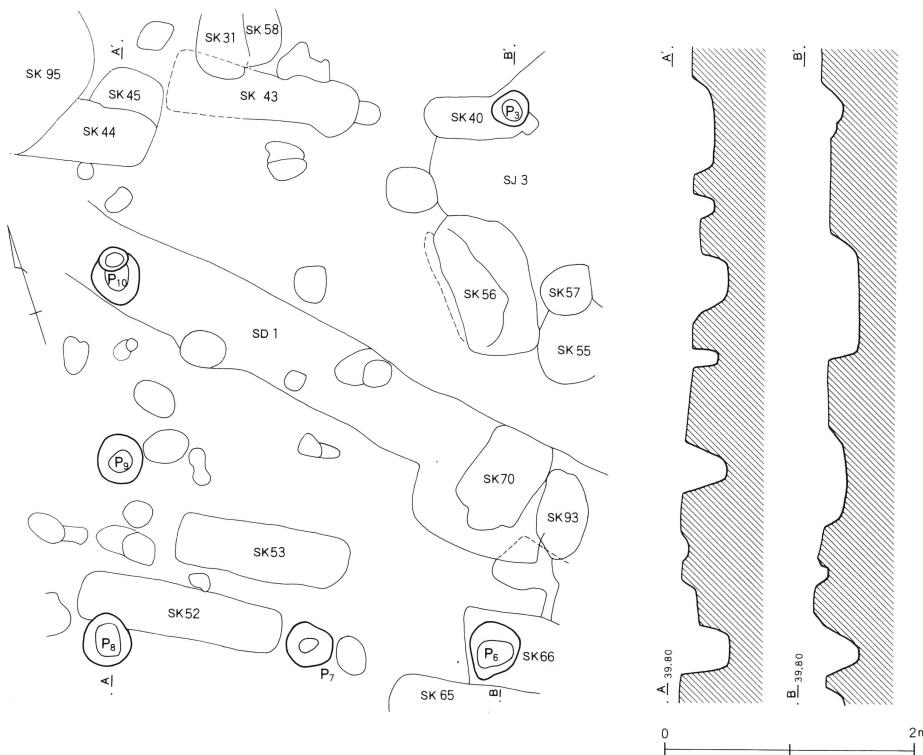
柱掘り方の深さは、40~50cm程度であった。

確認面での観察では、第3号掘立柱建物跡の柱掘り方と、他の多数のピットとの間に覆土の明瞭な違いは認められなかった。

遺物は検出できなかった。

他の遺構との新旧関係は不明瞭であった。

第66図 第3号掘立柱建物跡



火葬墓

火葬墓と考えられる遺構は1基検出できた。

第1号火葬墓(第67図)

第1号火葬墓は、N-22グリッドを中心として検出した。

遺構の確認当初は長軸が直行して重複した2基の土壙であると考えていたが、調査の進展とともに燃焼部と煙道よりなる茶毬を兼ねた火葬墓であると考えられるに至った。

平面形態は、長軸1.7m、短軸1m、深さ70cm程度の隅丸方形の土壙の長軸並行方向の壁を掘り抜いて煙道が作られ、この煙道は、地表面では、長軸1.4m、短軸60cmの長方形の土壙となっていた。

底面及び側面は明瞭で、覆土の状況は埋め戻しの様相を呈していた。

覆土には灰と骨粉を含み、更に金属片が検出できた。

第1号火葬墓出土遺物(第68図)

第1号火葬墓出土の遺物は、二者に大別された。

一つは鉄製のものであった。

1~14は鉄製の釘で、四角い頭部を持ち、断面形態も方形であった。

これらの中で、2、4、6、8、9、10、12、13は、鋸の進行にも関わらず、遺存状態がやや良好で、釘の頭から先端付近までが遺存していた。

また、1、3、5、7は鋸の進行によって、頭部が欠落していた。

更に11、14では、鋸の進行によって、先端部が欠落していた。

15は、鉄製の鎌状の金具であった。

これらの鉄製の釘と鎌は、やや大きく、厚い木製の箱

に打ち込まれたものであると考えられる。

もう一つは銅製のものであった。

16、17は銅製の金具で、小型木製の箱の開閉部に付けられた金具であると考えられる。18も同様に飾り金具であると考へられる。

19～30は、小型木製の箱の止め金具であると考えられる。

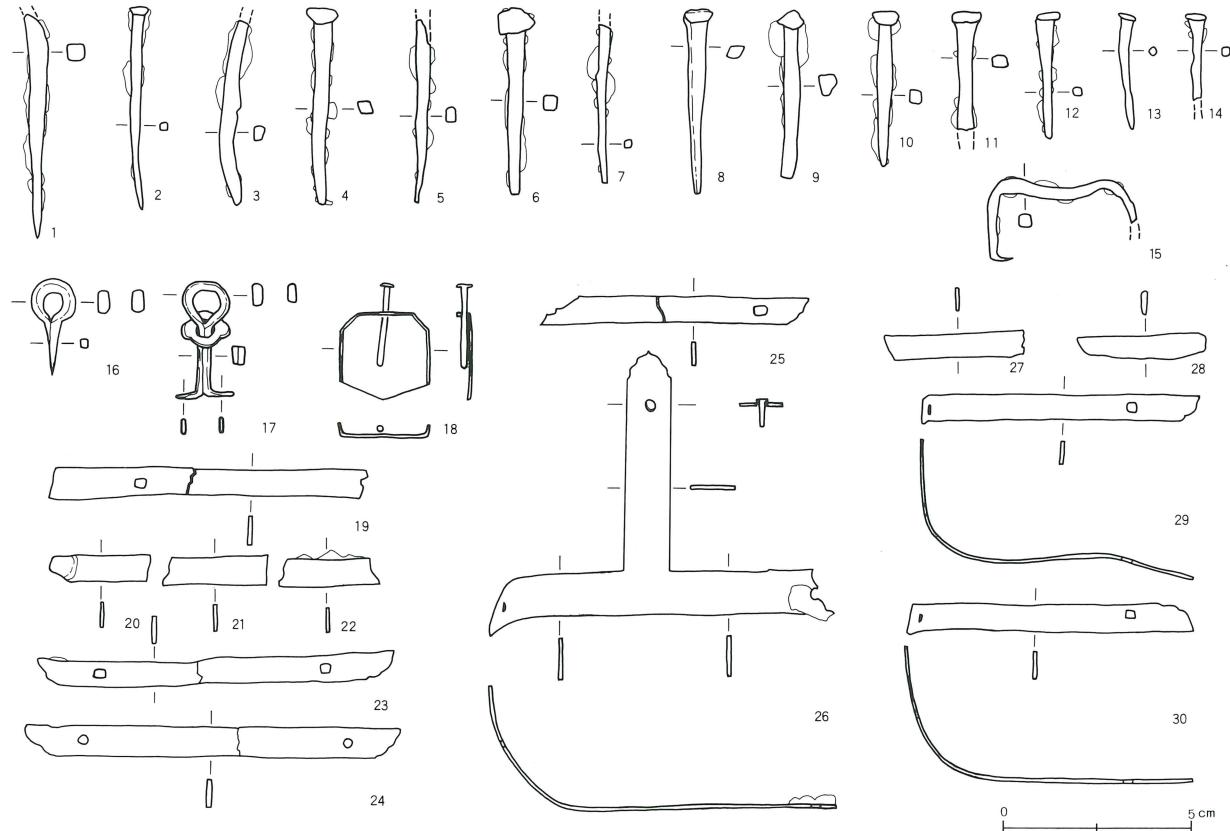
これらの中では、26、29、30は、片端がゆるやかな弧を描きながら、90度曲がっていた。また、19、23～26、29、30には、各金具の末端に長方形の釘穴があけられていた。さらに、23～26、29、30には、金具の末端に、3段程度の階段状の処理が認められた。

以上の金属製品については、前者の鉄製釘、鉄製鎧からは、棺の金具が想定され、後者の銅製の飾り金具、止め金具からは、副葬品の小型の箱が想定される。

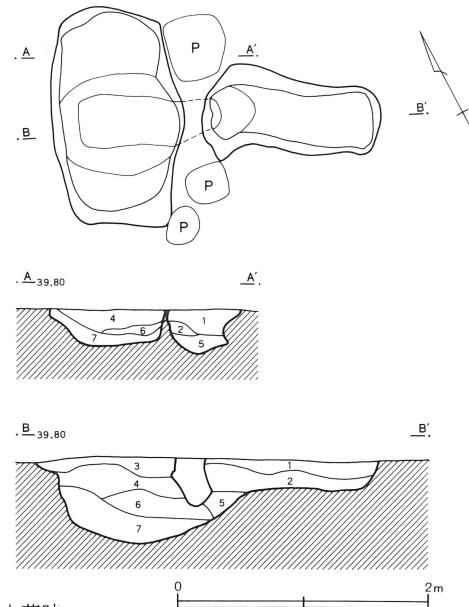
ただし棺の大きさは、火葬墓跡の土壌の長軸の長さから考へて、成人とは考へがたい。

なお、図示したもの以外にも、火葬時に熔解し、後に凝固したような、多孔質の金属残滓が検出できた。

第68図 第1号火葬墓出土遺物



第67図 第1号火葬墓



第1号火葬跡

1 茶色土	均一 IV層主体 1～10mm L未風化多少含 2～3mm R未風化微含 2～5mm C未風化少含 5～20mm白色粘土Bやや風化少含
2 黒茶色土	均一 1層に同 黒色土多少含
3 黒茶色土	均一 IV層主体 1～3mm Lやや風化多少含
4 黒茶色土	やや不均一 IV層主体 1～20mm L未風化多含 2～5mm R未風化少含 1～10mm C未風化多少含
5 黒茶色土	やや不均一 2層に同 ややL少含
6 黒灰色土	不均一 IV層主体 1～5mm L未風化多少含 1～3mm R未風化多少含 2～5mm C未風化多少含
7 黒茶色土	不均一 IV層主体 5～10mm L未風化多少含 1～3mm R未風化微含 2～50mm C未風化多含